令和３年度　老人保健事業推進費等補助金　老人保健健康増進等事業

外国人介護人材の質の向上等に資する
学習支援等調査研究事業

報告書

令和４年３月

公益社団法人　日本介護福祉士養成施設協会

目次

第 1 章　事業の概要 5
1. 事業の背景と目的 6
2. 実施内容 6
3. 実施体制 12

第 2 章　外国人医療・介護人材の指導に関する 先行調査・研究　分析結果 15
1. 高度な専門性を持つ介護人材の確保に関する施策と外国人介護人材の関係 16
2. 本調査・研究事業での先行調査・研究の目的 16
3. 先行研究の検索方法 17
4. 介護にかかる先行調査・研究の分析結果 17
5. 看護にかかる先行調査・研究の分析結果 19
6. 先行調査・研究についてのまとめ 21

第 3 章　第 33 回国家試験データ分析 分析結果..... 23
1. 国家試験結果に関する仮説の設定と検証 24
2. 第 33 回国家試験データ分析についてのまとめ..... 30

第 4 章　外国人介護人材を指導される教員(講師) の皆様に対する指導内容に関する調査結果 31
1. 貴職の情報..... 33
2. 講義内(時間割内)で行っている指導内容　※養成校教員(講師)に該当する方のみ 39
3. 補講(時間割外)で行っている指導内容　※養成校教員(講師)に該当する方のみ.... 69
4. 外国人介護人材の指導全般 78
5. 貴校の情報　※養成校教員(講師)、かつ教務主任に該当する方のみ..... 105

第 5 章　授業参観及び動画分析 119
1. 養成校の予備情報シートの作成..... 120
2. 授業分析について..... 121
3. 授業分析結果 122

第 6 章　模擬授業の撮影及び教員研修会の実施 123
1. 模擬授業の撮影 124
2. 教員研修会の実施..... 124

第 7 章　「指導のポイント」の作成 127
1. 指導のポイントの作成趣旨 128
2. 指導のポイントの項目..... 128

付属資料..... 129
1. アンケート調査票..... 130
2-1. ヒアリングまとめ(領域：人間と社会)..... 138
2-2. ヒアリングまとめ(領域：介護)..... 140
2-3. ヒアリングまとめ(領域：こころとからだのしくみ)..... 142
2-4. ヒアリングまとめ(領域：医療的ケア)..... 144
3. 模擬授業教案 146

はじめに

平成 29 年(2017 年)の在留資格「介護」創設により、介護福祉士養成施設(以下、養成校という)で学ぶ外国人留学生(以下、留学生という)の数は、増加の一途を辿っています。令和元年度以降、毎年、20 か国以上の国から 2,000 人を超える留学生が、我が国の専門職としての介護を学んでいます。その数は全国の養成校で学ぶ学生の約 3 割を占めるに及んでいます。

これら外国人留学生の就職先についてみると、令和 3 年 3 月に卒業した留学生 1,471 人のうち 97.5%は、我が国の介護老人福祉施設など福祉施設を中心に就職しています。彼らは、今後、増加が見込まれる技能実習生や特定技能で来日する外国人介護人材への指導などにおいて、その能力を発揮することが望まれます。また、中長期の視点に立てば、我が国で培った介護福祉士としてのキャリアを母国に持ち帰る留学生も出てくるでしょう。その際、高齢化が進む諸外国において、我が国の介護が普及されていく可能性を大いに含んでいます。

一方で、入学者数に対して国家試験の合格者数を比較すると、その数が圧倒的に少ないことも、自明のことと言わざるを得ません。介護福祉士国家試験における留学生の合格率は 38.0%(令和２年度)と大変低く、6 割以上の留学生が国家試験に合格できていないのが実情です。

このような状況を打破するために、令和 2 年度に続き、厚生労働省の補助事業「外国人介護人材の質の向上等に資する学習支援等調査研究事業」として当協会の実施計画が採択され、令和 3 年度も継続して、この事業を実施することとなりました。

昨年度事業で作成した「介護福祉士国家資格取得に向けた留学生指導についてのガイドライン」(本文では「ガイドライン」という)では、学習支援のほか学習環境の整備など養成校に求められる対応を中心にまとめております。

本年度事業では、先行研究・調査分析、介護福祉士養成施設の主に教員(講師)を対象としたアンケート調査、ヒアリング調査、授業参観・教員研修会を行い、その調査結果等を踏まえ検討委員会及び作業部会において検討し、「介護福祉士国家資格取得に向けた指導のポイント」(別冊)を作成しました。この別冊「指導のポイント」は、養成校の留学生のみならず、国家試験受験対象者である EPA 介護福祉士候補者も対象とし、指導する際の前提知識や具体的な指導方法など、多くの教員(講師)が、外国人介護人材を指導するための具体的な指導の在り方をまとめております。

本事業の実施にあたっては、検討委員会及び作業部会を設置し、①授業参観を実施しその内容の分析、②介護福祉士養成施設教員へのアンケート調査などを行い、本指導のポイントを作成しました。授業参観及びアンケートなどにご協力いただいた皆様、検討委員会委員及び作業部会委員の皆様方には感謝申し上げる次第です。

最後に、本事業の成果が介護福祉士養成施設はもとより関係する教員(講師)の一助となりますとともに、外国人介護人材の質の向上に寄与できることを願います。

公益社団法人 日本介護福祉士養成施設協会

第１章　事業の概要

1. 事業の背景と目的

我が国の要介護者増加に伴う介護従事者の需要は、令和 7 年度(2025 年度)までに約 245 万人と推計されている。同時に、介護ニーズの複雑化・多様化によって、質の高い介護が求められており、優秀な介護人材の確保は喫緊の課題となっている。

介護人材の確保については、これまでの専門性や機能分化に乏しい「まんじゅう型」の状態から、多様な人材の参入を促し裾野を広げつつ、介護福祉士等による高度な専門性を担保する機能分化を実現する「富士山型」へと構造転換が進められている。このために、人材の層に応じたきめ細かな方策を講じることとされている。介護の専門人材である介護福祉士には、介護業務のマネジメントや、現場でのチームリーダー等、社会福祉・社会保障のスペシャリストとしてのキャリア形成を重視していくことが望まれている。

一方で、質の向上に資すると考えられる外国人介護人材の国家試験の合格率には、課題が山積している。第 33 回(令和 2 年度)介護福祉士国家試験の合格率では、介護福祉士養成施設(以下、養成校と言う)を卒業した留学生で 34%、EPA 介護福祉士候補者で 46%という数値であり、低水準の結果と言わざるを得ず、介護の質の向上に寄与できているとは言えない現状である。

こうした現状から、令和 2 年度の当該研究事業では、アンケート、ヒアリング、2 度に及ぶ国家試験模試の調査を実施・分析した結果、留学生の国家試験における科目別理解度の差や得点の高低などの全体傾向を明らかにしてきた。また、これらの結果を踏まえ、養成校教員(講師)を対象とした「介護福祉士国家試験取得に向けた留学生指導についてのガイドライン」を作成することができた。

しかしながら、養成校での留学生への対応方法などは、ヒアリングによって得られた質的な情報が主だっており、より具体的な教え方のポイントとなる事柄までは提示することができなかった。そのため、本年令和 3 年度の事業では、留学生だけでなく EPA 介護福祉士候補者も含めた外国人介護人材への国家試験対策における指導の在り方や方策について検討することを目的とし、実施することとなった。

2. 実施内容

上記の目的を達成するため、本事業では有識者、実務関係者等の 8 名で構成する検討委員会を設置するとともに、検討委員会直下に主に実務者等 8 名で構成する指導のポイント(「指導のポイント」冊子)作成のための作業部会を設置し、各調査の設計・結果分析・とりまとめについて検討を行い、一連の業務を円滑かつ効果的に進めた。具体的には、以下(1)～(6)の 6 項目について取り組んだ。

(1) 先行研究・調査の実施・分析
(2) 国家試験結果のデータ分析結果
(3) 養成校教員(講師)・EPA 集合研修指導教員(講師)へのアンケート調査の実施・分析
(4) 授業参観及び動画分析
(5) 模擬授業の撮影及び教員研修会の実施
(6) 「指導のポイント」の作成

以下、それぞれ概要を示す。

(1) 先行研究・調査の実施・分析

現在、我が国における外国人介護人材の在留資格は 4 つあるが、当該研究事業に係る文献は、その先駆けである EPA 外国人介護・看護人材にかかる文献が主となる。これらの文献について、医学中央雑誌を中心に検索[1]したところ、介護に係る文献 32 件、看護に係る文献 117 件の計 149 件が該当した。なお、査読の有無は問わず、収集した件数である。

これらの文献から得られた内容としては、主に 4 つのカテゴリに分類ができた。(1)介護や看護の知識・技術に関する指導、(2)日本語学習に関する指導、(3)異文化理解などを踏まえた指導、(4)その他である。

これら先行研究・調査の分析結果においては、以下「(3)養成校教員(講師)・EPA 集合研修指導教員(講師)へのアンケート調査の実施・分析」に記載するアンケート調査票の作成、「(4)授業参観及び動画分析」の骨子作成、「(6)「指導のポイント」作成」においての基礎資料として使用した。

なお、本分析結果については、「第 2 章 外国人医療・介護人材の指導に関する先行調査・研究 分析結果」に掲載している。

(2) 第 33 回 国家試験結果のデータ分析

当協会が実施した「第 33 回介護福祉士国家試験(令和 2 年度実施)の外国人留学生の解答状況」調査のデータを基に、留学生に関する第 33 回(令和 2 年度)の国家試験結果の分析を行った。全体数としては、当協会の会員校 247 校のうち 126 校から回答、回答者数は計 2,052 人(うち外国人留学生 514 人、日本人学生 1,538 人)であり、このうち留学生 514 人のデータを使用した。

令和 2 年度では領域別・科目別の分析が主であったが、令和 3 年度事業においては、大項目を主軸とした分類を行い、どのような項目で高い得点が獲得できていれば、試験の合否ラインを超える点数を得ることができるのか、数量化Ⅱ類を使用し、分析した。

図表 1： 分析した項目(例)

大項目	中項目	小項目
人間の尊厳と自立	人間理解と尊厳	・ 「人間」の多面的理解 ・ 人間の尊厳 ・ 自立・自律
介護における尊厳の保持・自立支援	人権と尊厳	・ 権利擁護・アドボカシー ・ 人権尊重 ・ 身体的・精神的・社会的な自立支援

※例として領域： 人間と社会のみ掲載

分析においては、目的変数と説明変数との関係を調べて関係式を作成し、その関係式を用いて①説明変数カテゴリと目的変数カテゴリとの関連性、②説明変数の重要度ランキング、③判別(予測)を明らかにする手法である。この手法においては、厚生労働省と協議の上、決定した。

これら分析結果は、以下「(6)「指導のポイント」の作成」の基礎資料として使用した。

なお、本分析結果については、「第 3 章 第 33 回国家試験データ分析 分析結果」に掲載している。

1 文献検索は R3.8.05 に行い、当該文献について R3.8 月に収集した。

(3) 養成校教員(講師)・EPA 介護福祉士候補生集合研修指導教員(講師)へのアンケート調査の実施・分析

調査対象者を①EPA 介護福祉士候補者への研修をしたことがある教員(講師)、②養成校教員(講師)、③養成校教員かつ教務主任の 3 パターンとし、調査内容を変えて設問を作成した。とりわけ、③養成校教員かつ教務主任では、カリキュラム編成に関する質問項目に重点を置き、単科目だけでなく、科目間連携における創意工夫の有無を調査した。

これらアンケート調査の分析結果においては、以下「(5)模擬授業の撮影及び教員研修会の実施」の骨子作成、「(6)「指導のポイント」作成」においての基礎資料として使用した。

なお、本調査・分析結果については、「第 4 章 外国人介護人材を指導される教員(講師)の皆様に対する指導内容に関する調査結果」に掲載している。

図表 2： 調査概要

項目	内容
実施期間	令和3年10/5～11/1
実施対象	・卒業年度に留学生がいる全国の養成校に所属する介護教員(悉皆) ・EPA介護福祉士候補者への研修担当者(悉皆) (養成校181校・EPA関係5名)
調査方法	(養成校教員)当協会から養成校宛てにメール依頼、WEBにて回収 (EPA研修担当)国際厚生事業団より該当者にメール依頼、WEBにて回収
調査結果主要集計項目	・教員経験年数、保有資格、現場経験 ・養成施設での担当科目、教材の工夫、指導の方法　等
督促	未回答の養成校に対してメールによる督促
備考	問い合わせには電話・メールで対応
有効回答数	252名(教員(講師)全数が不明の為、回収率は未算出)

(4) 授業参観及び動画分析

外国人介護人材に向けた国家試験を意識した講義での「指導のポイント」となるべき要件を検討するため、養成校での授業及び EPA 介護福祉士候補生向けの国家試験対策となる集合研修(WEB 上)を取り上げることとした。

まず、EPA 介護福祉士候補生を対象とした集合研修では、国際厚生事業団より 11 件の動画を提供頂き、全作業部会委員に視聴、コメントシートへの記入を行って頂いた。次に、第 33 回国家試験の留学生合格率が高位だった養成校を中心に、全 5 校の授業参観を実施した。なお、全ての授業は教員(講師)・学生へ事業の趣旨説明を行い、撮影の許可を得たうえで、撮影を行った。養成校 5 校の動画に対しては、各 2 名の作業部会委員に担当を割り振り、EPA 介護福祉士候補生対象集合研修と同様に、コメントシートへの記入を頂き、内容を分析した。

図表 3： EPA 介護福祉士候補者を対象とした集合研修動画 視聴一覧

No.	内容	動画時間
1	問題2_社会の理解(障害者差別解消法)	13:37
2	問題4_社会の理解(訓練等給付)	9:39
3	問題6_コミュニケーション技術(バイステックの7原則)	11:28
4	問題10_生活支援技術(ボディメカニクスの原則)	12:42
5	問題11_生活支援技術(立ち上がりの介助のポイント)	8:04
6	問題16_介護過程(解釈・分析・関連付け・統合)	14:26
7	問題17_介護過程(サービス担当者会議)	11:38
8	問題19_発達と老化の理解(褥瘡の予防)	9:03
9	問題22_認知症の理解(ノーマライゼーション)	12:04
10	問題28_こころとからだのしくみ(レム睡眠・ノンレム睡眠)	6:34
11	質疑応答_社会の理解(訓練等給付の種類・違いについて)	4:17

図表 4： 授業参観撮影校・視聴担当委員

№	学校名	学年	科目名	授業内容	視聴担当
1	和歌山YMCA国際福祉専門学校	1年	介護過程	アセスメントについて	黒田部会長 品川委員
2	旭川福祉専門学校	2年	社会の理解	老人福祉論_介護保険制度	伊藤委員 岡本委員
3	富山福祉短期大学	1年	こころとからだのしくみ	「死」に対するこころとからだのしくみ	石川委員 笹沼委員
4	中部学院大学短期大学部	1年	生活支援技術	生活支援技術Ⅱ。実技課題のグループ発表	岡本委員 橋本委員
5	九州中央リハビリテーション学院	2年	介護過程	事例検討　～テーマの絞り方～	嶋田委員 笹沼委員

これら授業参観及び動画分析結果においては、以下「(5)授業参観及び動画分析」の骨子作成、「(6)「指導のポイント」作成」においての基礎資料として使用した。

なお、本実施内容については、「第 5 章　授業参観及び動画分析」に掲載している。

(5) 模擬授業の撮影及び教員研修会の実施

以下、「(6)「指導のポイント」の作成」に記載する「指導のポイント」内の指導ポイントを活用した講義形式の模擬授業を実施・撮影した。また、当該撮影動画を活用し、養成校の教員(講師)~~教員~~を対象とした研修会を行った。

① 模擬授業の撮影について

模擬授業については、「(2) 第 33 回　国家試験結果のデータ分析」結果および「(3) 養成校教員(講師)・EPA 集合研修指導教員(講師)へのアンケート調査の実施・分析」結果を参考に、以下 2 点を根拠とし、撮影した。

図表 5： 模擬授業撮影科目の選定理由

ポイント	左記理由
N3以下の学生、かつ 1 年次の学生に対する模擬授業を行うこと	・アンケート調査結果にて、実際に行う講義での教員(講師)の課題に関して、「日本語能力に差がある」ことや、「講義・介護に必要な日本語力が足りない」といった課題が最も多く上がったことから、この点を鑑みると、日本語能力が高くなく、介護のことばの理解も十分でないことが想定される、N3 以下の学生、かつ 1 年次の学生に対する模擬授業を行うことが望ましいため
留学生の学習苦手科目から科目を選定すること	・国家試験結果データ分析結果にて、科目別に留学生の理解度に大きく差があったほか、国試合計点への影響も科目によって大小があったことや、アンケート調査結果にて、特に留学生が苦手とする科目について適切な教え方が分からないといった教員(講師)の意見が多かったため

これらを踏まえて、以下の模擬授業の撮影を行った。なお、模擬授業動画については、当協会 HP に今後公開予定である。

図表 6： 模擬授業撮影内容

項目	内容
授業時間	60分 ※　分数(60分)の設定意図として、60分であればそのまま補講として活用することも可能であり、かつ養成校の通常授業90分と仮定した場合、残りの30分等でミニテストを行う等、各教員(講師)にとって自らの授業に活用しやすい分数であることがある。
授業科目	社会の理解 ※　科目選択として、前述の留学生の苦手科目であることだけでなく、模擬授業として教員(講師)が参考にする際、座学形式で行われる科目である方が参考にしやすいことから、当該科目を設定した。
授業担当教員	京都保育福祉専門学院　副学院長　岡本　匡弘氏(本事業委員会委員／作業部会委員)

なお、本実施内容については、「第 6 章　模擬授業の撮影及び教員研修会の実施」に掲載している。

②教員研修会の実施について

教員研修会については、以下 3 点を意義・目的として実施した。

図表 7： 教員研修会開催の意義・目的

① 本事業で作成している「指導のポイント」を活用して講義を行う際の実践例の提示
- 授業内でどのような言葉を使用しながら講義の必要があるのか、具体的な言い回し等を理解し、教員の皆様が作成物である「指導のポイント」の理解を促進することが必要。

② 具体的な「指導のポイント」の内容について講義を行う
- 「指導のポイント」の記載事項についての講義を行い、教員の皆様に指導のポイント全体を理解してもらうことが必要。

③ 指導のポイントに教員の皆様の声（課題等）を反映させる
- 作成する「指導のポイント」にコラム等で教員研修会で上がった意見（課題等）について反映させ、現場目線で課題解決できるように内容に厚みを持たせる。

実施概要、プログラムは以下の通りである。

図表 8： 教員研修会 実施概要

項目	内容
開催日	令和4年3月6日(日)14時～18時(4時間)
開催形式	Zoom Meeting機能を利用したオンライン講習形式
参加者数	全国の当協会会員校から介護教員(講師)・日本語教員(講師)合わせ65名が参加

図表 9： 教員研修会 プログラム

時間	研修会トピック
13：30～14：00	**受付(Zoom上)**
14：00～14：15	**開会挨拶・事務局説明**
14：15～14：25	**本日の講義の説明** ・講師 岡本 匡弘氏(京都保育福祉専門学院 副学院長)
14：25～15：25	**模擬授業の視聴** ・講師 岡本 匡弘氏(京都保育福祉専門学院 副学院長)
休憩 (10分)15：25-15：35	
15：35～16：35	**模擬授業の解説** ・講師 岡本 匡弘氏(京都保育福祉専門学院 副学院長)
休憩 (5分)16：35-16：40	
16：40～17：40	**留学生指導に関する教員同士の意見交換(GW)**
17：40～18：00	**まとめ**
18：00	**終了**

本研修会には、本事業作業部会委員に全課程出席頂いたうえで、研修会終了後、第 4 回作業部会を実施している。前述のとおり、本研修会開催の意義・目的として、上記①②の全国の教員(講師)に向けた「指導のポイント」内容啓発も重要であるが、③の現場の声を「指導のポイント」に反映させるという点も同様に重要である。このことから、当該研修会では、現場教員(講師)の声を作業部会委員に確認いただき、それらの声を踏まえて「指導のポイント」をどのように修正していくかという点を議論するための検討材料を抽出いただくことも目的として開催している。このため、現場の声を確認した後加速的速やかに作業部会を実施する必要があり、本研修会と第 4 回作業部会は同日開催とした。

なお、本実施内容については、「第 6 章 模擬授業の撮影及び教員研修会の実施」に掲載している。

(6)「指導のポイント」の作成

先述(1)～(5)の実施結果を踏まえ、養成校教員(講師)が留学生に対し、日ごろの授業のなかで国家試験受験を意識しながら、どのように指導していけばよいか等を記載した「指導のポイント」(別冊)を作成した。

なお、「指導のポイント」(別冊)を作成するため、実際に留学生の指導を行っている教員(講師)のうち、留学生の国家試験合格率が高い等先進的に取組を行う養成校に所属の教員(講師)に対するヒアリングを 4 件実施した。対象者については、介護福祉士国家試験の各領域についての内容を網羅できるよう、各 4 領域に係る事柄を網羅的に確認できるよう、担当科目を確認して選定した。

なお、ヒアリング結果については、「付属資料」に掲載しており、「指導のポイント」概要については「第 7 章 「指導のポイント」の作成」に掲載している。

図表 10：事前ヒアリング概要

実施時期	実施対象	ヒアリング項目
令和 3 年 12 月 および 令和 4 年 1 月	① 「領域：人間と社会」を担当する教員(講師) ② 「領域：介護」を担当する教員(講師) ③ 「領域：こころとからだのしくみ」を担当する教員(講師) ④ 「領域：医療的ケア」を担当する教員(講師)	・授業で工夫されている点(教科書以外で教えるルールやマナー、演習グループの組み分けの仕方、留学生の事前知識の把握等) ・国家試験に向けた対応(言葉の言い換え、ストーリーある解説、我が事にさせる工夫、聞き取りやすい話し方) 等 ・外国人介護人材への指導での困難点や留意点授業で工夫されている点(専門用語の漢字の読みの学習に重点、学習体系を区分化)等 ・授業で工夫されている点(理解度確認のため質疑応答を多用、書き取りしやすい明瞭な板書)等 ・授業で工夫されている点(社会情勢や時代背景などから理解を促進、社会保険は身近な話題から想像) 等

3. 実施体制

本事業では有識者、実務関係者等の 8 名で構成する検討委員会を設置するとともに、検討委員会の直下に、主に授業内容分析のための実務者等 8 名で構成する作業部会を設置し、各調査の設計・結果分析・とりまとめについて検討を行った。

(1) 検討委員会・作業部会名簿

＜検討委員会名簿＞※◎:委員長、五十音順、敬称略、所属等は令和 4 年 3 月時点

氏名	所属・役職
◎井之上　芳雄	日本介護福祉士養成施設協会　副会長
石川　由美	浦和大学短期大学部　特任教授
伊藤　優子	北海道医療大学先端研究センター　客員教授
今村　文典	日本介護福祉士会　副会長
岡本　匡弘	京都保育福祉専門学院　副学院長
黒田　英敏	旭川福祉専門学校　副校長
橋本　由紀江	国際交流＆日本語支援 Y　代表理事
矢口　浩也	国際厚生事業団　国際・研修事業部　部長

＜作業部会名簿＞※◎:作業部会長、五十音順、敬称略、所属等は令和 4 年 3 月時点

氏名	所属・役職
◎黒田　英敏	旭川福祉専門学校　副校長
石川　由美	浦和大学短期大学部　特任教授
伊藤　優子	北海道医療大学先端研究センター　客員教授
岡本　匡弘	京都保育福祉専門学院　副学院長
笹沼　昌子	国際厚生事業団　国際・研修事業部　部長代理
品川　智則	東京 YMCA 医療福祉専門学校　専任教員
嶋田　直美	和歌山 YMCA 国際福祉門学校　教員
橋本　由紀江	国際交流＆日本語支援 Y　代表理事

＜オブザーバー＞※敬称略、所属等は令和 4 年 3 月時点

氏名	所属・役職
冨原　博	厚生労働省　社会・援護局　福祉基盤課　福祉人材確保対策室　室長補佐
翁川　純尚	同　室長補佐
鈴木　真智子	同　介護福祉専門官
羽染　敬規	同　外国人介護人材受入企画調整係長・介護技能実習支援係長

＜事務局＞

氏名	所属・役職
山田　洋輔	日本介護福祉士養成施設協会　事務局長
田中　佐千代	同　事務局員

＜事務局補助＞

氏名	所属・役職
布施　和美	(株)日本能率協会総合研究所　福祉・医療・労働政策研究部　主任研究員
岡田　泰治	同　研究員

(2) 委員会・作業部会開催実績及び検討内容

以下の通り、検討委員会は 4 回、作業部会は 4 回実施した。

＜検討委員会　開催実績及び検討内容＞

回数	日程・場所	議事内容
第１回	令和 3 年 8 月 23 日(月) 19：00-21：00 @日本能率協会総合研究所 第１会議室 (Zoom 併用)	・ 本調査・研究にかかる背景および事業の全体概要について ・ 本年度の実施事項について
第２回	令和 3 年 12 月 23 日(木) 18：00-21：00 @日本能率協会総合研究所 第１会議室 (Zoom 併用)	・ 「指導のポイント」項目・内容(案)について ・ 教員研修会の概要(案)について
第３回	令和 4 年 2 月 25 日(金) 19：00-21：00 @日本能率協会総合研究所 第１会議室 (Zoom 併用)	・ 「指導のポイント」項目・内容(案)について ・ 教員研修会での講義教案について
第 4 回	令和 4 年 3 月 20 日(日) 14：00-16：00 @日本能率協会総合研究所 第１会議室 (Zoom 併用)	・ 「指導のポイント」最終案について ・ 事業報告書について

＜作業部会　開催実績及び検討内容＞

回数	日程・場所	議事内容
第１回	令和 3 年 9 月 7 日(火) 19：00-21：00 @日本能率協会総合研究所 第１会議室 (Zoom 併用)	・ 本調査・研究にかかる背景および事業の全体概要について ・ アンケート調査票について ・ 授業参観について
第２回	令和 3 年 12 月 2 日(木) 18：00-21：00 @日本能率協会総合研究所 第１会議室 (Zoom 併用)	・ 先行研究・調査分析結果について ・ アンケート結果の確認 ・ 試験データ分析結果について ・ 授業参観シート分析結果の確認 ・ 指導のポイント項目・内容(案)について
第３回	令和 4 年 2 月 8 日(火) 19：00-21：00 @日本能率協会総合研究所 第１会議室 (Zoom 併用)	・ 「指導のポイント」初案について ・ 模擬授業について
第 4 回	令和 4 年 3 月 6 日(日) 18：00-19：00 @日本能率協会総合研究所 第１会議室 (Zoom 併用)	・ 「指導のポイント」修正案について

※第4回作業部会は、教員研修会の同日開催であり、研修会開催後に行った

第２章　外国人医療・介護人材の指導に関する先行調査・研究　分析結果

1. 高度な専門性を持つ介護人材の確保に関する施策と外国人介護人材の関係

介護人材の確保については、これまでの専門性や機能分化に乏しい「まんじゅう型」の状態から、多様な人材の参入を促し裾野を広げつつ、介護福祉士等による高度な専門性を担保する機能分化を実現する「富士山型」へと構造転換が進められている。このために、人材の層に応じたきめ細かな方策を講じることとされている一方、介護の専門人材である介護福祉士には、介護業務のマネジメントや、現場でのチームリーダー等、社会福祉のスペシャリストとしてのキャリア形成を重視していくことが望まれている。これは、介護福祉士国家資格の受験対象となる在留資格「特定活動」の外国人介護人材(以下、EPA 介護福祉士候補者という)、在留資格「介護」の外国人介護人材(以下、留学生という)においても同様であるが、第 32 回(令和元年度)介護福祉士国家試験の合格率をみたところ、**介護福祉士養成施設を卒業した外国人介護人材で 26.8%、EPA 介護福祉士候補者で 44.5%となり、低水準**となっている。これらの在留資格が国家資格取得を踏まえて制定されたことを鑑みると、**EPA 介護福祉士候補者、留学生については、国家試験合格率の向上が喫緊の課題**であると言える。

図表 11：第 32 回(令和元年度)の介護福祉士国家試験合格率[2]

属性	区分	卒業生数	受験者数	合格者数	合格率
養成校留学生	全卒業生	6,028 人	5,698 人	4,961 人	87.1%
	うち留学生	391 人	362 人	97 人	**26.8%**
EPA 候補者	3 か国合計	758 人	758 人	337 人	**44.5%**

2. 本調査・研究事業での先行調査・研究の目的

国家試験合格率向上の為には、外国人介護人材が介護を学び、理解することが必要となるが、日本を母国としない方への教育・指導については、日本人を対象とした教育・指導とのギャップを埋めるものとして日本語と日本文化の教育をすればよいというのではなく、各専門分野特有の教育があり、そのため、各分野の専門研究者によって意識的な摘出の努力が行われるべきものである[3]とされている。このため、**介護福祉士養成においても、当然どのような教育・指導を行っていくべきかを検討することが重要**と考えられる。

これを本調査・研究事業にあてはめて考えてみると、今回の研究で対象とする外国人介護人材である EPA 介護福祉士、留学生のみならず、一般的に日本で就労する、また就労を予定している外国人介護人材全般においてどのような教育・指導が行われているかを確認していく必要があるといえる。また、介護分野の EPA や在留資格「介護」においては制度が制定されてからさほど年月が経過しておらず、文献数も多くないことが想定されるため、介護福祉士と同じく医療・福祉系国家資格取得を目的としている EPA 看護師等への教育・指導についても参考にすべきと考えられる。

ついては、以下の観点を確認することを目的に、先行調査・研究の分析を行うこととした。

図表 12：本先行調査・研究の目的

目的
・ 外国人介護人材、および看護人材への指導に関し、専門性を高めるための効果的な指導について明らかにする。また、現時点で明らかになっていないことは何かについても明らかにする。

2 養成校留学生においては当協会が独自に集計、EPA については厚生労働省「(別添1)第 32 回介護福祉士国家試験結果」(令和 2 年 3 月)より作成。
3 佐藤 進. 留学生教育とは何か？ーその専門性と役割についてー. 留学生教育, 1997, 1, pp.45-46

3. 先行研究の検索方法

「2. 本調査・研究事業での先行調査・研究の目的」で述べた目的をふまえ、介護・医学系論文が数多く掲載されている医学中央雑誌にて、外国人介護人材、看護人材の指導に関連するキーワードに該当する文献を検索した[4]ところ、介護にかかる文献 32 件、看護にかかる文献 117 件、計 149 件が該当した。なお、文献数が少なかったため、査読の有無は問わず収集した。

図表 13：検索結果(全体)

検索カテゴリ	検索件数
外国人 & 介護 & 指導	32 件
外国人 & 看護 & 指導	117 件

※いずれも R3.8.05 時点で医中誌 Web にて検索を行った結果の件数を表示

4. 介護にかかる先行調査・研究の分析結果

介護にかかる 32 文献の研究内容は、大きく 4 カテゴリ、【介護知識・技術指導】、【日本語にかかる指導】、【異文化相違等をふまえた指導】、【その他】に分けられた。【その他】に関する文献は 9 件あったが、外国人介護人材の法制の紹介や、居住外国人に関する介護に関する内容であり、確認対象から除外した。

以下、対象となる 23 文献について、カテゴリの名称と該当する文献数を示す。

図表 14：介護にかかる文献 カテゴリ

文献カテゴリ	文献数
介護知識・技術指導	8 件
日本語にかかる指導	15 件
異文化相違等をふまえた指導	11 件

※1 文献に複数テーマのトピックが記載されている場合があり、同一文献を複数カウントしていることに留意

以下、上記文献の記載内容を述べるが、文章内には、当該文献にて参考文献として紹介された文献の内容に関しても触れていることにご留意いただきたい。

(1) 介護知識・技術関連に関する文献内容

介護知識に関しては国家試験対策、介護技術に対しては主に介護記録の指導についての文献が多かった。

国家試験対策においては、合格のためには教育担当者を据えて対策をすべきであるとされていた。しかしながら、このケースでは、教育担当者は自部署を離れて対応する必要があり、担当者だけが対応するのではなく、受入れ法人全体においての支援・サポートを行っていくことが重要であるとされていた[5]。

介護記録指導においては、外国人介護人材の介護記録の誤用を分析した結果、日本語に関する誤用を行っていても、概ね読解者にとっては理解ができ、介護記録の全体的な意味理解を妨げないこととされている。ここでは、日本語の誤りのない完璧な文章を目指すのではなく、文法的な誤用や分類不能とされる表現がどのような場面の記録に見られるかを分析し、それらの表現を優先的に指導することが重要であり、また、これらの指導は OJT で指導されるべきであるとされていた[6]。

こういった個別の指導を行っていくうえで重要であるのは、指導の方向性として、段階に沿った対応をしていくこととされていた[7]。また、介護の方法を理論と実践で一致させることも重要とされ、例えばケアプランをもとに、どのように介護を実践していくかの個別の会議等を設けて発表する研究会を行うことで効果があった等の事例が挙げられた[8]。

4 文献検索は R3.8.05 に行い、当該文献について R3.8 月に収集した。
5 酒井 良英・暮石 重政・須藤 慶己・近藤 正人. 経済連携協定に基づく外国人介護福祉士候補者受け入れ. 日本農村医学会雑誌, 2020, 69(1), pp.95-97
6 豊田 宗裕・中村 道子・中村 直人・松井 志麻・寺沢 清子. 外国籍介護従事者の介護記録における誤用分析. 聖徳大学研究紀要(聖徳大学・聖徳大学短期大学部), 2019, 29(51), pp.53-57
7 二渡 努.【介護技能実習制度について】介護職種の技能実習生の適正受入れに向けた示唆. 地域ケアリング, 2019, 21(3), pp.12-17
8 矢部 徹.【介護技能実習制度について】EPA の教育事例について. 地域ケアリング, 2019, 21(3), pp.18-24

また、指導をより効率化すること、外国人介護人材の介護への理解をより深めることを目的とし、各種テクノロジー等のツールを使用することの効果も紹介されていた。概要については以下の通りである。

図表 15：外国人介護人材の指導に効果のあるテクノロジー等のツール

ツールの内容
・ スマートフォンを利用した多言語翻訳を活用し、指導の理解を助ける[9] ・ スマートフォンで検索した画像を示して視覚的に理解してもらい、理解を深めてもらう[9] ・ 難易度の高い業務についてもらうには記録システムや見守り機器の導入が不可欠[10] ・ 音声入力システムを利用することで記録入力を効率化させることで、書くべき記録内容を明確にできる[10]　　等

なお、指導の結果については検証される必要があり、介護施設において『職員心得』『自己管理シート』『プロセス評価シート』など、外国人介護人材の個別状況をふまえて確認し、その結果をさらなる指導に活かしている[11]といったケースが挙げられた。また、指導の結果、外国人介護人材の技術取得に要する時間は日本人職員より長いものの、介護技術等における総合的評価は日本人職員より高い傾向が見られたケース[12]もあった。

一方で、指導者においては外国人介護人材に対し、日本人介護人材と比べ、賞賛と許容といった特別な思いを抱く傾向があるとの指摘[13]もあり、外国人介護人材を指導するにあたり、技術が正しく評価されるための公正な評価基準を整えていく必要があることがうかがえた。

その他、施設においては、部署間で特定の介護行為に関する業務内容や指導の差異があることも明らかとなった[14]。行うべき介護行為が同施設内でも異なるという傾向は、施設内だけなく、施設が変わった場合、また例えば養成校での授業と現場の施設でも想定され、外国人介護人材が混乱しないよう、あらかじめこういったケースが存在することについて説明しておくことの必要性がうかがえた。

指導体制においては、主に介護施設・事業所内での体制についての研究に関する文献が主であったが、孤立感を生まないよう個別に事情を確認し、プリセプター制度等で個々人の状況を確認しながら進捗する[11]こと、また介護する喜びや誇りを自分自身で見出す力を養う学びが必要[15]であること等の指摘がなされていた。

(2) 日本語にかかる指導に関する文献内容

日本語そのものの学習にかかる文献ではなく、介護業務を行ううえで、また介護の専門知識を修得するうえで必要となる日本語学習に特化した研究にかかる文献が主であった。

まず、外国人介護人材が自律的に語学学習を行えるようサポートすること、また当該サポートにおいては担当者を設定して対応していることが望ましいとされていた[16]。また、国家試験対策としての語学学習においては、漢字理解の重要性が述べられており、介護福祉士の国家試験には毎回 1,000 字の異なる漢字が用いられているが、そのうち日本語能力検定 2 級レベルの漢字が 50%を占め、目安として 500～600 字が分かればよい[17]とされているほか、国家試験で頻度の高い漢字に絞って学習するのが有効であるとされていた[18]。

また、語学学習を行った結果、日本語能力が高い外国人介護人材においては、そうでない外国人介護人材より、利用者の意図をくみ取り、それを日本語で伝えることができているとされる考察[19]もあり、外国人介護

9 菊池 健志.【外国人材の採用・育成・定着　完全ガイド】こうすればうまくいく 教育・育成のポイント 外国人介護人材の受け入れを契機に、チームとして成長する. おはよう 21, 2019, 30(12), pp.80-87
10 糠谷 和弘.【外国人材の採用・育成・定着　完全ガイド】受け入れにあたっての留意点と心構え. おはよう 21, 2019, 30(12), pp.54-59
11 矢部 徹.【介護技能実習制度について】EPA の教育事例について. 地域ケアリング, 2019, 21(3), pp.18-24
12 伊藤 鏡. 介護現場における外国人介護労働者の評価と意欲 インドネシア第一陣介護福祉士候補者受け入れ施設のアンケート調査をもとに. 厚生の指標, 2014, 61(11), pp.27-35
13 小田 栄子.介護福祉士養成課程における外国人留学生の介護実習(実習区分 I) 円滑で効果的な在り方の検討. 神戸医療福祉大学紀要, 2016, 17(1), pp.117-129
14 松田 久雄.外国人研修生を通してみた介護福祉施設. 応用老年学, 2011, 5(1), pp.70-77
15 中村 裕子.【介護業界における人材確保と育成】介護や介護職に対する国民の意識改革の必要性. 地域ケアリング, 2015, 17(8), pp.6-15
16 野田 由佳里･古川 和稔･落合 克能･村上 逸人. ベトナム人介護労働者との協働を目指した研修プログラム ベトナム人関係者を対象とした実態調査からの考察. 聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要, 2019, 17, pp.43-50
17 中川 健司. 介護福祉士候補者が国家試験を受験するうえで必要な漢字知識の検証 調査報告書. 日本語教育, 2010, 147, pp.69-74
18 田邉 伸一･折居 明日香･中野 幹子･川井 小百合. 留学生が記述した実習日誌の現状と課題. 介護福祉教育, 2018, 23(2), pp.130-140
19 佐藤 恵･千葉 直子.福祉の現場から 認知症教育のあり方を考える ミャンマーからの介護技能実習生の目線から. 地域ケアリング, 2021, 23(3) , pp.44-47

人材が介護の専門性を構築していくうえで、日本語能力が多分に影響していることがうかがえた。

一方、語学学習を指導していくうえで、外国人介護人材と指導者がコミュニケーションを取る際、指導者側として「ゆっくり話す」、「方言も含めた言葉の言い換え」など配慮が必要であることが大前提であるものの、外国人介護人材側でも、外国人としての不利益を自己解決するための一定のコミュニケーション能力が求められる[13]とされていた。

さらに、語学学習を行うための教材としては、以下のような教材が適切であるとされていた。

図表 16：外国人介護人材の語学学習において使用すべき教材

教材種別
・文章を少なくし、写真を多くしたマニュアル[10] ・復習ができるような教材の用意(例、動画をネット上にあげておき、いつでも復習できるようにする。オンライン教材の活用など)[10] ・音声機能付きの教材[20] ・振り仮名付きの教材[21] ・手書きの文章はさらに理解しづらいため、複雑な文章構成は避けるなどといった工夫がなされた教材[21]　　等

(3) 異文化相違等をふまえた指導に関する文献内容

日本が母国でない外国人介護人材においては、日本語の理解だけなく、日本文化の理解が難しいケースがあり、これに起因して介護の理解が進まないことが考えられる。このため、指導者としては、国民性や国の文化をよく理解し配慮することが必要[10]とされている。具体的には、家族介護の必要性に関する価値観[14]や、食事の習慣[13]などの国家間による相違は影響が大きいとされていた。この他、異文化間の相違があることを前提に、国民性に配慮した役割を与えることも大事とされ、例えば社交的な国民性の外国人介護人材には施設にてレクリエーションを担当してもらう[10]などして介護に関するモチベーションを上げている、等のケースも紹介されていた。

5. 看護にかかる先行調査・研究の分析結果

看護にかかる 117 件の研究内容は、介護のカテゴリと同じく、大きく 4 カテゴリ、【看護知識・技術指導】、【日本語にかかる指導】、【異文化相違等をふまえた指導】、【その他】に分けられた。看護の文献全体では【その他】に分類されるものが最も多く 92 件となり、内容は外国人患者、在日外国人に関するケア、健康意識等に関する文献であったため、確認対象から除外した。

以下、対象となる 25 文献について、カテゴリの名称と該当する文献数を示す。

図表 17：看護にかかる文献　カテゴリ

文献カテゴリ	文献数
看護知識・技術指導	7 件
日本語にかかる指導	18 件
異文化相違等をふまえた指導	12 件

※1 文献に複数テーマのトピックが記載されている場合があり、同一文献を複数カウントしている

以下、上記文献の記載内容について、外国人看護人材を指導するにおいて関連する点のみ抽出して述べるが、文章内には、当該文献にて参考文献として紹介された文献の内容に関しても触れていることにご留意いただきたい。

20 石本 淳也. 外国人介護人材の受け入れを支える取り組み. 介護福祉, 2019, 114, pp.46-52
21 村上 隆宏. 外国人介護人材の受け入れ方・育て方(第 5 回) 受け入れ前の準備. おはよう 21, 2018, 29(10), pp.68-71

(1) 看護知識・技術関連に関する文献内容

看護師においては、基本的には母国となる海外でも同様の看護師資格を保持している外国人看護人材が対象となるため、日本との制度の相違や、それに関する相違点に起因する課題についての文献が多かった。特に、日本語能力以外では、出身国と日本との保健医療システムなど社会制度の相違や慣習の相違[22]、看護教育カリキュラム[23]、及び看護師の役割の相違に関して困惑しているケースが散見された。例えば、ある国では、文化間の相違等々に起因し、「療養上の世話に関する業務」、「インシデント報告」、「防災管理」等が看護師の業務としてあまり行われないことから、当該国出身の看護師においては、これらの重要性が理解できない場合がある[24]等のケースが挙げられた。これらの問題については、個々の能力や国の事情に合わせた研修が必要であり、その研修も単一ではなく、外国人看護人材の個別性を考慮し、さらに学校教育や看護教育、日本語能力などいくつもの質保証システムを構築することが必要である[25]とされている。

(2) 日本語にかかる指導に関する文献内容

日本語そのものの学習にかかる文献ではなく、看護業務を行ううえで、また看護の専門知識を修得するうえで必要となる日本語学習に特化した研究にかかる文献が主であった。

まず、複数の文献で、国家資格に合格するために最も必要なのは日本語能力であるとされていた[26][27]ことから、看護の専門性を構築するうえでも、一定の日本語能力が必須であることがうかがえた。一方、日本語能力に関しては、日常会話や同僚との会話では言語の問題がない場合が多いものの、看護記録、国家試験問題の読解・回答においては問題があるケースも散見され [26]、専門用語の理解をどのように行っていくかが課題であることがうかがえた。

専門用語の理解に関しては、母国語が英語でない場合、専門用語のみの英語表記は、日本語以上に意味が推測しにくいとの指摘 [27]もあり、外国人看護人材の個別性を鑑みて、指導方法や教材を選定していく必要性がうかがえた。

なお、語学学習で使用する教材については、複数ある教材の中から、出身国の言語で記載された看護用語集が必要であるとの意見が有意に高い結果も出ており[28]、複雑な看護用語・概念を理解するためには、母国語で記載された教材も一定程度は必要ではないかという示唆がなされた。

(3) 異文化相違等をふまえた指導に関する文献内容

「(1) 看護知識・技術関連に関する文献内容」で述べたような日本との制度の相違や、それに関する相違点に起因する課題に関する文献が多いが、看護技術の根底となる文化間の相違に起因する事柄では、家族介護の必要性に関する価値観や、それに紐づく看護師としての役割に相違があるとの指摘があった。これらを解決するために、臨床現場で時間をかけて日本の看護を理解してもらう必要がある[29]とされていた。

---

22 川口 貞親･川口 貞･平野 裕子･小川 玲子･大野 俊. 外国人看護師候補者の教育と研修の課題－フィリピン人候補者を対象とした国家試験模擬試験調査を通して－. 九州大学アジア総合政策センター紀要, 2010, 5, pp.141-146

23 池田 敦史･深谷 計子･堀場 裕紀江･他. 経済連携協定に基づき来日した看護師候補生の現状と問題点. 聖路加看護大学紀要, 2010, 36, pp.86-90

24 石井 千晴･森 淑江. 経済連携協定に基づいたインドネシア人看護師に望ましい指導. The Kitakanto Medical Journal, 2014, 64(2), pp.205-213

25 成瀬 和子･石川 陽子. 英国における外国人看護師の受け入れ制度と教育. 国際保健医療, 2013, 28(1), pp.13-20

26 古川 恵美･瀬戸 加奈子･松本 邦愛･長谷川 友紀. 経済連携協定(EPA)に基づく外国人看護師候補者受け入れ施設の現況と課題. 日本医療マネジメント学会雑誌, 2012, 12(4), pp.255-260

27 福武 まゆみ. 外国人看護師とその指導者の国家試験に対する思い 看護師国家試験合格にむけての課題. インターナショナル Nursing Care Research, 2011, 10(3), pp.73-79

28 平野 裕子･小川 玲子･川口 貞親･大野 俊. 2 国間経済連携協定に基づくインドネシア人看護師候補者導入に関する研究 受け入れ病院に対する調査から,看護管理, 2010, 20(6), pp.509-515

29 井野 恭子･渡邉順子. 経済連携協定で来日した外国人看護師の看護技術の実践に関する研究. 日本看護技術学会誌, 2014, 13, pp.75-83

6. 先行調査・研究についてのまとめ

(1) 先行調査・研究の分析で明らかになったこと

介護分野、看護分野とも、外国人人材を受け入れて指導するうえでの共通の課題があることが明らかとなった。知識や技術については文化間の相違により理解が難しい点が存在するほか、各種専門分野に即した日本語を一定程度勉強しないと専門知識の習得そのものが難しいことなどである。文化間の相違においては、主に看護の文献で、国別にも多分に相違があることが指摘されており、ひとえに「外国人」と言っても、国籍、個別事情等に即し、一人ひとりきめ細かい個別指導が必要であることがうかがえた。しかしながら、**具体的な専門分野の細かい科目、専門知識等において、どのような指導上の課題、また外国人が専門知識を理解するうえでの課題があるかについては、看護分野では研究されている文献が見られたが、介護分野では、見られなかった**。

また、個別指導をしていくうえでは、専門知識を具体的に想起しやすいよう、母国語の教材や、視覚的に理解しやすい教材を活用すべきことが示唆されていたが、**対面で外国人を指導する際、専門知識の説明や声掛け等について、どのような点に注意すべきかについて取り上げた研究は見られず、今後明らかにされるべき点と考えらえる**。

(2) 先行調査・研究の分析結果をふまえ本調査・研究事業で行うこと

専門分野の科目・領域等に即した指導上の課題、および対面で外国人を指導する際の注意点については、教員(講師)への質問紙調査(「第 4 章　外国人介護人材を指導される教員(講師)の皆様に対する指導内容に関する調査結果」参照)、養成校へのヒアリング(「付属資料　領域ごとのヒアリングまとめ」参照)、模擬授業の分析(「第 6 章　模擬授業の撮影及び教員研修会の実施」参照)等を通して明らかにしていき、抽出したエッセンスを、成果物である「指導のポイント」(「第 7 章　「指導のポイント」の作成」参照)に反映させることとする。

第 3 章　第 33 回国家試験データ分析 分析結果

1. 国家試験結果に関する仮説の設定と検証

当協会が独自に作成した、「第 33 回介護福祉士国家試験(令和 2 年度実施)の外国人留学生の解答状況」のデータを活用し、留学生における第 33 回介護福祉士国家試験における正答における傾向を科目別、小項目別等で分析した。

(1) 仮説の設定

① 仮説 1 について

昨年度事業にて、日本人学生と留学生の介護福祉士国家試験の得点傾向を科目別に確認したところ、特定の科目において留学生の得点率が低いことが分かった(以下図)。このため、留学生においては特定科目を苦手としていることを前提に、介護福祉士国家試験におけるどのような科目の得点率が総得点に影響しているか、また、影響度が大きい科目について、どのような大項目の得点率が当該科目の得点率に影響しているかを明らかにすることを目的として、得点の分析を行う。

図表 18：仮説 1 について

仮説 1 の内容
・ 科目ごとの得点率は、総得点率に影響する。また、大項目別の得点率は、科目の得点率に影響する。

【参考】図表：データ分析結果(高数値が赤、低数値が青)

		R1国家試験			R2学力評価試験	
領域	科目群	日本人(※1)	留学生(※2)	留学生(※3)	日本人(※4)	留学生(※5)
人間と社会	人間の尊厳と自立	92.9%	79.0%	64.8%	89.9%	67.4%
	人間関係とコミュニケーション	88.0%	76.7%	65.3%	84.1%	52.7%
	社会の理解	51.7%	40.0%	47.7%	49.5%	30.5%
介護	介護の基本	76.2%	67.3%	55.5%	57.6%	39.6%
	コミュニケーション技術	73.5%	66.4%	53.9%	74.4%	42.3%
	生活支援技術	82.8%	65.6%	52.0%	73.9%	45.8%
	介護過程	91.0%	67.0%	54.1%	69.0%	40.2%
こころとからだのしくみ	発達と老化の理解	76.9%	60.9%	55.2%	53.9%	35.6%
	認知症の理解	76.8%	59.4%	49.6%	69.3%	47.4%
	障害の理解	59.4%	47.7%	44.4%	68.9%	43.6%
	こころとからだのしくみ	65.5%	49.6%	45.4%	63.4%	42.5%
医療的ケア	医療的ケア	92.4%	76.7%	62.9%	67.4%	47.8%
総合問題	総合問題	62.5%	49.9%	43.5%	49.4%	33.4%

※1 令和元年度卒業の高校生のデータ(文科省提供)
※2 令和元年度卒業の留学生のデータ(当協会にてデータ作成)
※3 令和2年度卒業予定の留学生のデータ(当協会にてデータ作成)
※4 令和2年度卒業予定の日本人学生のデータ(当協会にてデータ作成)
※5 令和 2 年度卒業予定の留学生のデータ(当協会にてデータ作成)

出典：(公社)日本介護福祉士養成施設協会,外国人介護人材の質の向上等に資する学習支援等調査研究事業報告書,p164(2021.3)

② 仮説 2 について

昨年度事業にて、養成校教員(講師)間で、特定の科目間の連携を行うことで、留学生の理解が進むという意見が多数見られ、ガイドラインにも記載した[30]ところである。このため、養成校教員(講師)間で連携すべきと見なされている科目においては、留学生の理解が進んでいる(試験結果にも影響がある)ことを前提に、得点の分析を行う。

図表 19：仮説 2 について

仮説 2 の内容
・ 養成校教員(講師)間で科目間の連携が必要とされている科目間においては、留学生の介護福祉士国家試験の得点においても、正の相関がみられる。

(2) 仮説の検証(仮説1)

① 仮説 1 の検証手順

仮説 1 の検証においては、以下の手順で実施した。

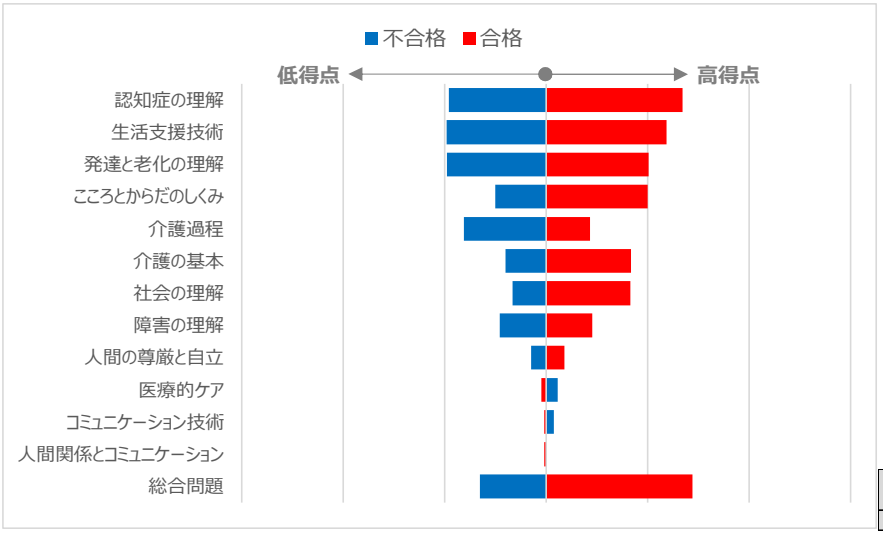
図表 20：仮説 1 に対する分析の手順

分析の手順	
ステップ 1	・ 第 33 回介護福祉士国家試験のデータのうち、留学生の回答データのみ抽出。科目別、大項目別に、留学生 1 人 1 人の得点率を算出。 ・ 当該得点率において、第 33 回国家試験の合格得点となる 6 割(125 点中 75 点)以上の得点率の項目は 1、それ未満の項目は 0 とし、データセットを作成。
ステップ 2	・ ステップ 1 で作成した科目別得点率のデータにおける数量化Ⅱ類[31]を実施。
ステップ 3	・ ステップ 2 の結果を参考に、影響度が大きい科目に関し、大項目別の得点率のデータにおける数量化Ⅱ類を実施。

② 仮説 1 の検証結果

「① 仮説1の検証手順」－ステップ 1 にて記載したデータのうち、科目別得点率のデータについて、数量化Ⅱ類を実施した(ステップ 2)。

図表 21：総得点の多寡への個別項目の正答の影響(科目別)



		予測値		判別的中率
		合格点	不合格点	
観測値	合格点	190	15	92.68%
	不合格点	18	291	94.17%
			全体	93.58%

30 (公社)日本介護福祉士養成施設協会,介護福祉士国家資格取得に向けた留学生指導についてのガイドライン,pp26-31「科目別の指導のポイント」にて、複数の科目で、特定の科目と連携することが重要であるとの記載有。

31 数量化Ⅱ類は、目的変数と説明変数との関係を調べて関係式を作成し、その関係式を用いて次のことを明らかにする手法である。
① 説明変数カテゴリーと目的変数カテゴリーとの関連性
② 説明変数の重要度ランキング
③ 判別(予測)

科目別に見ると、最も得点への影響度が高い科目は、「認知症の理解」、次いで、「生活支援技術」、「発達と老化の理解」、「こころとからだのしくみ」、「介護過程」と続いた。

上位 3 科目である「認知症の理解」、「生活支援技術」、「発達と老化の理解」については、高得点であれば合格(6 割以上＝125 点中 75 点以上)への影響度が高く、同時に低得点であれば不合格(6 割未満＝125 点中 75 点未満)への影響度が高い傾向にあり、この科目において得点できているかいないかは、合否に大きく影響することがうかがえた。**これらの科目は、介護福祉士国家試験の科目の中でも、机上の学習だけでなく、実習や介護施設・事業所等でのアルバイト等を通して総合的に理論と実践を学ぶべき科目であることから、これらの科目が得点できていないということは、知識と実践を結びつけて理解する力が十分ではないことが類推される。**

また、「こころとからだのしくみ」については、高得点であれば合格(6 割以上＝125 点中 75 点以上)への影響度が高かったが、低得点であれば不合格(6 割未満＝125 点中 75 点未満)へ与える影響度は高くなかった。

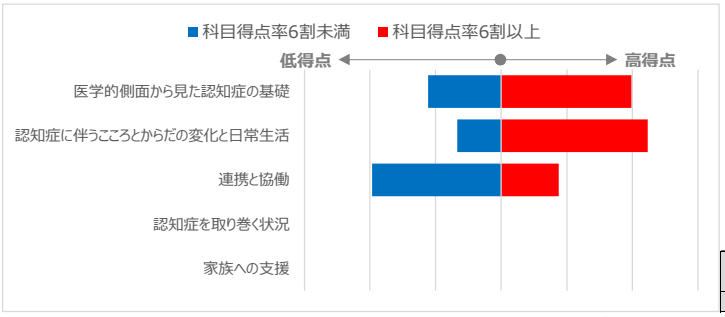
また、「介護過程」については、低得点であれば不合格(6 割未満＝125 点中 75 点未満)へ与える影響度が高かったが、高得点であれば合格(6 割以上＝125 点中 75 点以上)へ与える影響は高くなかった。

最後に、「総合問題」においては、高得点であれば合格(6 割以上＝125 点中 75 点以上)への影響度が高いが、低得点であれば不合格(6 割未満＝125 点中 75 点未満)へ与える影響度は高くなかった。高得点に与える影響においては、その他のどの科目より高い影響度であり、**「総合問題」においては、科目全般的な理解が必要、かつ事例問題であることから一定以上の日本語読解力も有していないと得点できないといった問題特性があり、この科目が得点できる留学生には、その他の科目も得点できる介護知識・日本語能力が備わっていることが想定される。**

次いで、総合問題を除く影響度上位 5 つの科目ついて、「① 仮説1の検証手順」－ステップ 1 にて記載したデータのうち、大項目別の得点率のデータにおける数量化Ⅱ類を実施した(ステップ 3)。

なお、大項目によっては第 33 回介護福祉士国家試験に出題されていない場合があり、その場合は項目のみとし、グラフは表示していない。

図表 22：科目得点率の多寡への個別項目の正答の影響(認知症の理解)

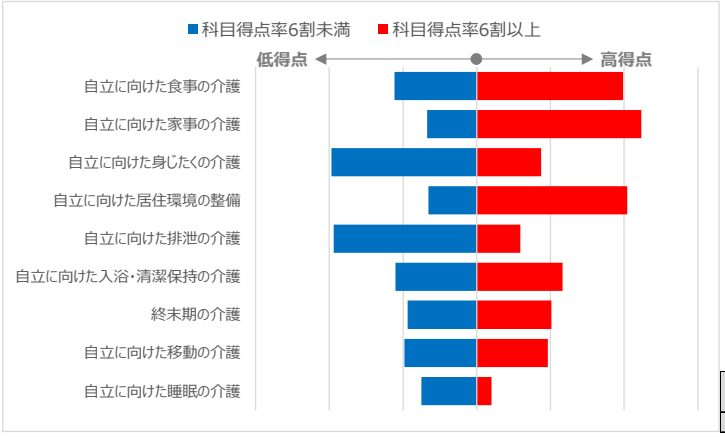


		予測値		判別的中率
		合格点	不合格点	
観測値	合格点	177	37	82.71%
	不合格点	22	278	92.67%
			全体	88.52%

「科目：認知症の理解」の大項目で、科目得点率に最も影響度が高い大項目は、「医学的側面から見た認知症の基礎」であり、高得点であれば高い科目得点率(6 割以上＝認知症の理解 10 点中 6 点以上[32])への影響度が高かったが、低得点であれば低い科目得点率(6 割未満＝認知症の理解 10 点中 6 点未満 [32])へ与える影響度が高くなかった。

32 第 33 回介護福祉士国家試験では、125 点中 75 点の 6 割が合格とされているため、科目別の得点でも、6 割の得点を合格とし、合否結果と見なしている。

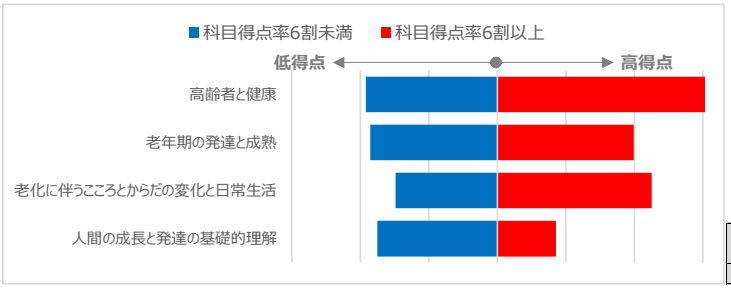
図表 23：科目得点率の多寡への個別項目の正答の影響(生活支援技術)



		予測値		判別的中率
		合格点	不合格点	
観測値	合格点	220	13	94.42%
	不合格点	30	251	89.32%
			全体	91.63%

「科目：生活支援技術」の大項目で、科目得点率に最も影響度が高い大項目は、「自立に向けた食事の介護」であり、高得点であれば高い科目得点率(6 割以上＝生活支援技術 26 点中 15.6 点以上 [32])への影響度が高かったが、低得点であれば低い科目得点率(6 割未満＝生活支援技術 26 点中 15.6 点未満 [32])へ与える影響度が高くなかった。

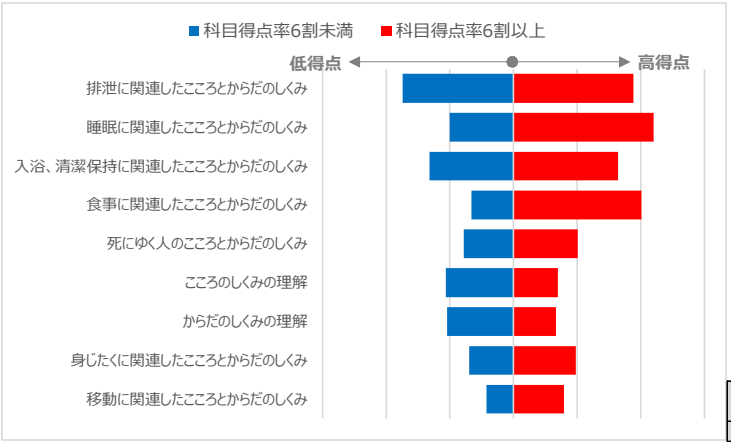
図表 24：科目得点率の多寡への個別項目の正答の影響(発達と老化の理解)



		予測値		判別的中率
		合格点	不合格点	
観測値	合格点	216	37	85.38%
	不合格点	13	248	95.02%
			全体	90.27%

「科目：発達と老化の理解」の大項目で、科目得点率に最も影響度が高い大項目は、「高齢者と健康」であり、高得点であれば高い科目得点率(6 割以上＝発達と老化の理解 8 点中 4.8 点以上 [32])への影響度が極めて高く、同時に低得点であれば低い科目得点率(6 割未満＝発達と老化の理解 8 点中 4.8 点未満 [32])へ与える影響度が高かった。

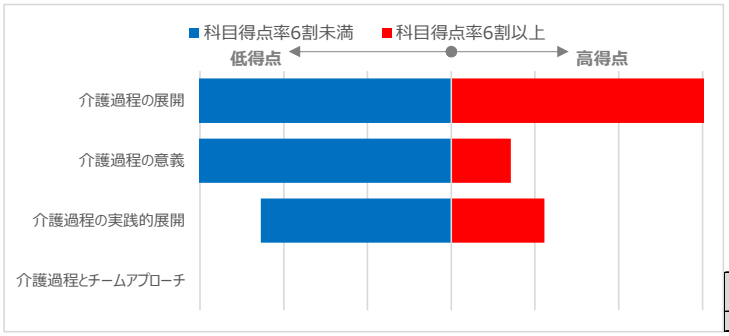
図表 25：科目得点率の多寡への個別項目の正答の影響(こころとからだのしくみ)



		予測値		判別的中率
		合格点	不合格点	
観測値	合格点	322	20	94.15%
	不合格点	6	166	96.51%
			全体	94.94%

「科目：こころとからだのしくみ」の大項目で、科目得点率に最も影響度が高い大項目は、「排泄に関連したこころとからだのしくみ」であり、高得点であれば高い科目得点率(6 割以上＝こころとからだのしくみ 12 点中 7.2 点以上 [32])への影響度が高く、同時に低得点であれば低い科目得点率(6 割未満＝こころとからだのしくみ 12 点中 7.2 点未満 [32])へ与える影響度が高かった。

図表 26：科目得点率の多寡への個別項目の正答の影響(介護過程)



		予測値		判別的中率
		合格点	不合格点	
観測値	合格点	271	65	80.65%
	不合格点	0	178	100.00%
			全体	87.35%

「科目:介護過程」の大項目で、科目得点率に最も影響度が高い大項目は、「介護過程の展開」であり、高得点であれば高い科目得点率(6 割以上＝介護過程 8 点中 4.8 点以上 [32])への影響度が高く、同時に低得点であれば低い科目得点率(6 割未満＝介護過程 8 点中 4.8 点未満 [32])へ与える影響度が高かった。

なお、介護過程においてはどの大項目も低い科目得点率(6 割未満＝介護過程 8 点中 4.8 点未満 [32])に与える影響が高く、この科目では、ほぼ全問正解できなければ低い科目得点率となることがうかがえる。

(3) 仮説の検証(仮説 2)

① 仮説 2 の検証手順

仮説 2 の検証においては、以下の手順で実施した。

図表 27：仮説 2 に対する分析の手順

分析の手順	
ステップ 1	・ 第 33 回介護福祉士国家試験のデータのうち、科目別得点率について、12 科目それぞれの相関を確認。
ステップ 2	・「第 4 章　外国人介護人材を指導される教員(講師)の皆様に対する指導内容に関する調査結果」問 4 にて回答のあった担当科目／他科目の教員(講師)との連携科目に関し、科目間連携の組み合わせパターン(全数)のデータを作成。
ステップ 3	・ ステップ 2 のデータのうち、2 科目間連携となった組み合わせパターンの上位となった科目に関し、第 33 回介護福祉士国家試験のデータの科目別得点率において科目間の相関があるかを確認。

② 仮説 2 の検証結果

「① 仮説 2 の検証手順」－第 33 回介護福祉士国家試験のデータのうち、科目別得点率について、12 科目それぞれの相関を確認した(ステップ 1)。

図表 28：科目間の得点率の相関係数(高数値が赤、低数値が青)

	人間の尊厳と自立	人間関係とコミュニケーション	社会の理解	介護の基本	コミュニケーション技術	生活支援技術	介護過程	発達と老化の理解	認知症の理解	障害の理解	こころとからだのしくみ	医療的ケア	総合問題
人間の尊厳と自立	1.00	0.26	0.26	0.25	0.23	0.28	0.27	0.22	0.28	0.21	0.22	0.16	0.20
人間関係とコミュニケーション	0.26	1.00	0.31	0.26	0.16	0.34	0.25	0.30	0.29	0.26	0.31	0.18	0.27
社会の理解	0.26	0.31	1.00	0.58	0.52	0.61	0.53	0.57	0.56	0.49	0.55	0.46	0.50
介護の基本	0.25	0.26	0.58	1.00	0.52	0.60	0.50	0.52	0.48	0.44	0.47	0.45	0.43
コミュニケーション技術	0.23	0.16	0.52	0.52	1.00	0.66	0.61	0.54	0.57	0.55	0.53	0.52	0.54
生活支援技術	0.28	0.34	0.61	0.60	0.66	1.00	0.66	0.65	0.64	0.63	0.65	0.54	0.62
介護過程	0.27	0.25	0.53	0.50	0.61	0.66	1.00	0.59	0.57	0.56	0.58	0.50	0.58
発達と老化の理解	0.22	0.30	0.57	0.52	0.54	0.65	0.59	1.00	0.64	0.56	0.62	0.51	0.56
認知症の理解	0.28	0.29	0.56	0.48	0.57	0.64	0.57	0.64	1.00	0.57	0.64	0.49	0.60
障害の理解	0.21	0.26	0.49	0.44	0.55	0.63	0.56	0.56	0.57	1.00	0.56	0.49	0.54
こころとからだのしくみ	0.22	0.31	0.55	0.47	0.53	0.65	0.58	0.62	0.64	0.56	1.00	0.57	0.59
医療的ケア	0.16	0.18	0.46	0.45	0.52	0.54	0.50	0.51	0.49	0.49	0.57	1.00	0.49
総合問題	0.20	0.27	0.50	0.43	0.54	0.62	0.58	0.56	0.60	0.54	0.59	0.49	1.00

※　相関係数＝ 0.7～1　　かなり強い相関がある
※　相関係数＝ 0.4～0.7　　相関あり
※　相関係数＝ 0.2～0.4　　弱い相関あり
※　相関係数＝ 0～0.2　　ほとんど相関なし

「生活支援技術」が、最も多くの他科目と試験結果の得点率において相関がある結果となった。また、「人間の尊厳と自立」、「人間関係とコミュニケーション」については、他科目との相関はあるものの、強くない結果となった。

「生活支援技術」については、その他科目の理解ができていることを前提に、どのような生活支援をしていくかを学ぶ項目であるため、多くの科目との相関が高かったと考えられる。また、「人間の尊厳と自立」、「人間関係とコミュニケーション」においては、今回、得点率の割合で確認したものの、もともとの設問の科目数が少ないため、正確な確認ができにくかったと考えられる。

次いで、「第 4 章　外国人介護人材を指導される教員(講師)の皆様に対する指導内容に関する調査結果」問 4 にて回答のあった担当科目／他科目の教員(講師)との連携科目に関し、科目間連携の組み合わせパターン(全数)のデータを作成したところ(ステップ 2)、科目間連携の組み合わせパターン数は計 278 件(回答者 252 名中)となった。以下、上記 25 位の組み合わせパターンを示す。

図表 29：科目間連携の科目組み合わせパターン(上記 25 組)

回答数	連携科目
20	人間の尊厳と自立/人間関係とコミュニケーション/社会の理解/介護の基本/コミュニケーション技術/生活支援技術/介護過程/こころとからだのしくみ/発達と老化の理解/認知症の理解/障害の理解/医療的ケア
16	生活支援技術/こころとからだのしくみ
13	社会の理解/介護の基本
13	生活支援技術/介護過程
12	介護の基本/生活支援技術
10	介護の基本/生活支援技術/介護過程
8	人間の尊厳と自立/人間関係とコミュニケーション/社会の理解/介護の基本/コミュニケーション技術/生活支援技術/介護過程/こころとからだのしくみ/発達と老化の理解/認知症の理解/障害の理解
8	人間関係とコミュニケーション/コミュニケーション技術
7	介護の基本/介護過程
7	こころとからだのしくみ/発達と老化の理解
6	人間関係とコミュニケーション/介護の基本/コミュニケーション技術/生活支援技術/介護過程
6	生活支援技術/介護過程/こころとからだのしくみ
6	こころとからだのしくみ/医療的ケア
5	生活支援技術/介護過程/こころとからだのしくみ/発達と老化の理解/認知症の理解/障害の理解/医療的ケア
4	介護の基本/コミュニケーション技術/生活支援技術/介護過程/こころとからだのしくみ/発達と老化の理解/認知症の理解/障害の理解
4	人間の尊厳と自立/人間関係とコミュニケーション/社会の理解/介護の基本/コミュニケーション技術/生活支援技術/介護過程
4	社会の理解/介護の基本/生活支援技術/介護過程
4	介護の基本/生活支援技術/介護過程/こころとからだのしくみ
4	生活支援技術/こころとからだのしくみ/発達と老化の理解/医療的ケア
4	コミュニケーション技術/生活支援技術/介護過程
4	コミュニケーション技術/生活支援技術/こころとからだのしくみ
4	こころとからだのしくみ/発達と老化の理解/医療的ケア
4	人間の尊厳と自立/介護の基本
4	コミュニケーション技術/生活支援技術
4	生活支援技術/医療的ケア

回答者 252 名中、最も多い回答としては、「12 科目すべて」で連携しているケースの 20 件、次いで多いのは「生活支援技術／こころとからだのしくみ」で連携している 16 件であった。

これら上位項目のうち、2 科目間連携となった組み合わせパターンの科目を抜き出し、ステップ 1 のデータを確認すると、以下の通りである。

図表 30：2 科目間での相関(教員(講師)が良く連携している科目)

科目	相関係数
生活支援技術／こころとからだのしくみ	0.65(相関あり)
社会の理解／介護の基本	0.58(相関あり)
生活支援技術／介護過程	0.66(相関あり)
介護の基本／生活支援技術	0.60(相関あり)
人間関係とコミュニケーション／コミュニケーション技術	0.16(ほとんど相関無し)
介護の基本／介護過程	0.50(相関あり)
こころとからだのしくみ／発達と老化の理解	0.62(相関あり)

実際に教員(講師)が多く連携している科目においては、留学生の試験結果においても相関があるといえる結果となった。

なお、「人間関係とコミュニケーション／コミュニケーション技術」においては、前ページでも説明した通り、今回、得点率の割合で確認したため、もともとの設問の科目数が少なく、正確な確認ができにくかったと考えられる。

2. 第 33 回国家試験データ分析についてのまとめ

今回は、第 33 回国家試験データについて、以下 2 点の仮説を検証した。

図表 31：仮説

仮説 1	科目ごとの得点率は、総得点率に影響する。また、大項目別の得点率は、科目の得点率に影響する。
仮説 2	養成校教員(講師)間で科目間の連携が必要とされている科目間においては、留学生の介護福祉士国家試験の得点においても、正の相関がみられる。

結果、いずれの仮説においても概ね正しいことが証明された。

まず、仮説 1 に関しては、科目によって、総得点に与える影響度の差があることが明らかとなった。昨年度事業でも、大まかに見ると留学生に関しては苦手科目の傾向があることが明らかになっていたが、具体的にどのような科目、ひいては大項目の内容が分かっていないと国試全体の試験結果に影響するかという点に関しては、今回の分析の結果である程度は明らかになったといえる。ただし、これに関しては留学生の国籍や個別特性も多分に影響することから、教育現場でも意識して確認していくべき事柄と思われる。

また、仮説 2 に関しては、養成校教員(講師)が日ごろ連携することが望ましいと考える科目において、実際に留学生の国家試験得点率に正の相関があることが明らかとなった。つまり、教員(講師)が必要と考える科目間連携は、留学生の理解度を深めていくために効果的であるということができ、科目間連携を既に実践されている養成校に関しては、今後も引き続き継続いただきたいとともに、連携が不十分である養成校に関しては、今後早急に強化すべき事柄であると思われる。

第４章　外国人介護人材を指導される教員(講師)の皆様に対する指導内容に関する調査結果

※クロス集計表については、以下の通り色付けを行っています。
平均 10%以上　　：赤網掛け赤文字
平均 5%以上 10%未満　：赤文字
平均 5%以下 10%未満　：青文字
平均 10%以下　　：青網掛け青文字

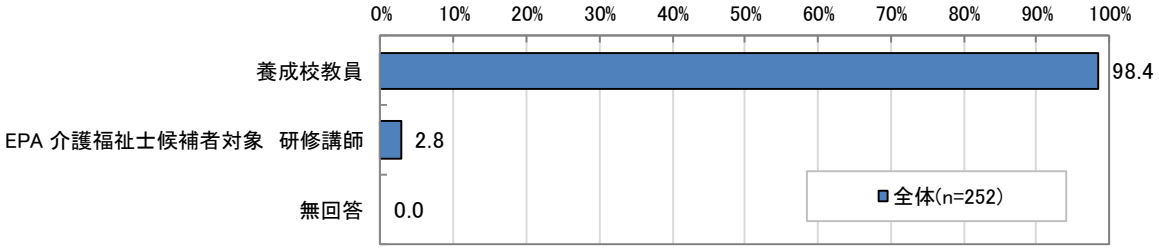
※クロス集計に関しては、何らかの傾向があった箇所を中心に添付していますが、実態を示すことを目的にｎ数が少ない場合も添付している箇所があります。

1. 貴職の情報

(1) 教員(講師)としての属性

問 1:あなたの教員(講師)としての属性を教えてください。

・「養成校教員」が 98.4%、「EPA 介護福祉士候補者対象　研修講師」が 2.8%であった。

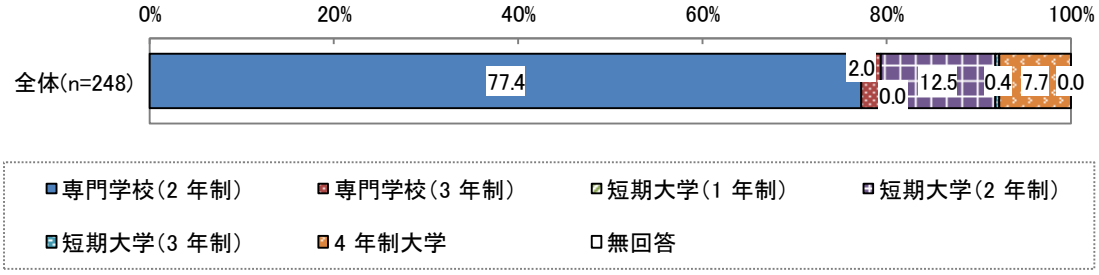


(2) 所属する養成校の種別

【問 1 で「1.養成校教員」と回答の方】

問 1-2:あなたが所属する養成校の種別を教えてください。

・「専門学校(2 年制)」が 77.4%と最も高く、次いで「短期大学(2 年制)」が 12.5%、「4 年制大学」が 7.7%であった。



(3) 養成校の教員(講師)としての経験年数と、外国人介護人材を指導した経験年数

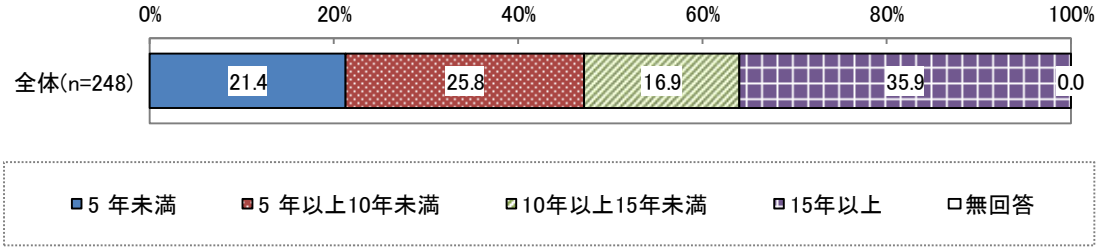
【問 1 で「1.養成校教員」と回答の方】

問 1-3:あなたの養成校の教員(講師)としての経験年数と、外国人介護人材を指導した経験が何年あるかについて、それぞれ教えてください。

・養成校の教員(講師)としての経験年数は、「15 年以上」が 35.9%と最も高く、次いで「5 年以上 10 年未満」が 25.8%、「5 年未満」が 21.4%であった。

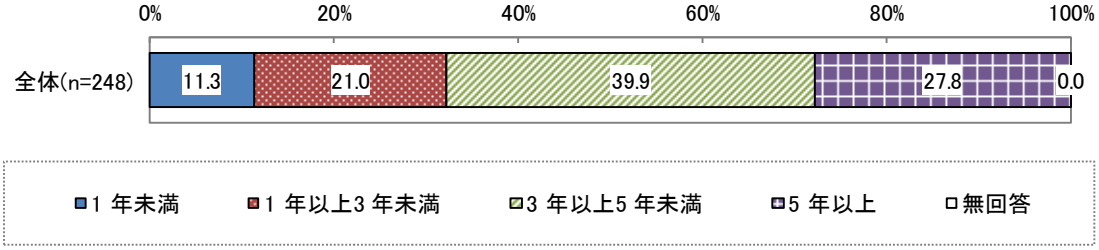
・外国人介護人材を指導した経験年数は、「3 年以上 5 年未満」が 39.9%と最も高く、次いで「5 年以上」が 27.8%、「1 年以上 3 年未満」が 21.0%であった。

＜養成校の教員(講師)としての経験年数(通算年数)＞



		調査数	5 年未満	5 年以上10年未満	10年以上15年未満	15年以上	無回答
全体		248	21.4	25.8	16.9	35.9	0.0
養成校の種類	専門学校	197	23.9	25.9	16.8	33.5	0.0
	短期大学	32	12.5	28.1	21.9	37.5	0.0
	4 年制大学	19	10.5	21.1	10.5	57.9	0.0

＜外国人介護人材を指導した経験年数(通算年数)＞



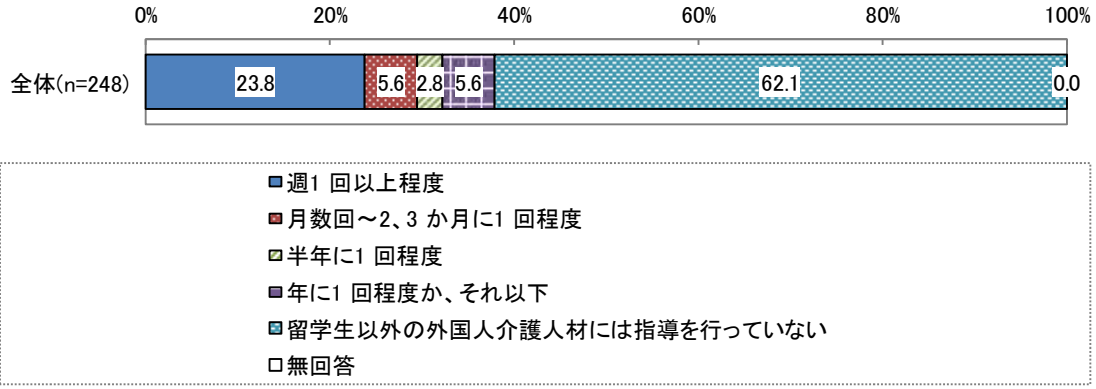
		調査数	1 年未満	1 年以上3年未満	3 年以上5年未満	5 年以上	無回答
全体		248	11.3	21.0	39.9	27.8	0.0
養成校の種類	専門学校	197	11.7	20.8	42.6	24.9	0.0
	短期大学	32	6.3	28.1	37.5	28.1	0.0
	4 年制大学	19	15.8	10.5	15.8	57.9	0.0
養成校教員経験年数	5 年未満	53	11.3	45.3	41.5	1.9	0.0
	5 年以上10年未満	64	14.1	20.3	46.9	18.8	0.0
	10年以上15年未満	42	14.3	16.7	35.7	33.3	0.0
	15年以上	89	7.9	9.0	36.0	47.2	0.0

(4) 自校の留学生以外の外国人介護人材(EPA 介護福祉士候補生等)に対する指導頻度

【問 1 で「1.養成校教員」と回答の方】

問 1-4:あなたが、現在、養成校に所属しながら、自校の留学生以外の外国人介護人材(EPA 介護福祉士候補生等)に対し、どれくらいの頻度で指導をされているか、教えてください。

・「留学生以外の外国人介護人材には指導を行っていない」が 62.1%と最も高く、次いで「週 1 回以上程度」が 23.8%、「月数回～2、3 か月に 1 回程度」と「年に 1 回程度か、それ以下」が 5.6%であった。



		調査数	週1 回以上程度	月数回～2・3 か月に1 回程度	半年に1 回程度	年に1 回程度か、それ以下	留学生以外の外国人介護人材には指導を行っていない	無回答
全体		248	23.8	5.6	2.8	5.6	62.1	0.0
養成校の種類	専門学校	197	22.3	5.6	3.0	5.6	63.5	0.0
	短期大学	32	34.4	6.3	0.0	3.1	56.3	0.0
	4 年制大学	19	21.1	5.3	5.3	10.5	57.9	0.0
養成校教員経験年数	5 年未満	53	28.3	5.7	1.9	1.9	62.3	0.0
	5 年以上10年未満	64	29.7	1.6	1.6	4.7	62.5	0.0
	10年以上15年未満	42	19.0	9.5	2.4	7.1	61.9	0.0
	15年以上	89	19.1	6.7	4.5	7.9	61.8	0.0
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	3.6	0.0	0.0	3.6	92.9	0.0
	1 年以上3 年未満	52	26.9	9.6	0.0	5.8	57.7	0.0
	3 年以上5 年未満	99	27.3	2.0	2.0	9.1	59.6	0.0
	5 年以上	69	24.6	10.1	7.2	1.4	56.5	0.0

(5) 現在所属する養成校の教員(講師)としての立場

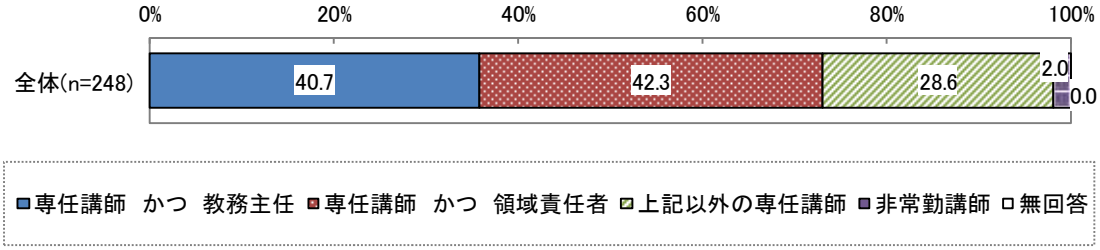
【問 1 で「1.養成校教員」と回答の方】

問 1-5:あなたが、現在所属する養成校で、教員(講師)としてどのようなお立場にあるか、教えてください。

【問 1-5 で「1.専任講師」と回答の方】

問 1-5-1:あなたが、現在所属する養成校で、以下の職務に従事しているかについて教えてください。

・「専任講師　かつ　領域責任者」が 42.3%と最も高く、次いで「専任講師　かつ　教務主任」が 40.7%、「上記以外の専任講師」が 28.6%であった。



(6) EPA 介護福祉士候補者対象研修講師の経験年数と外国人介護人材を指導した経験年数

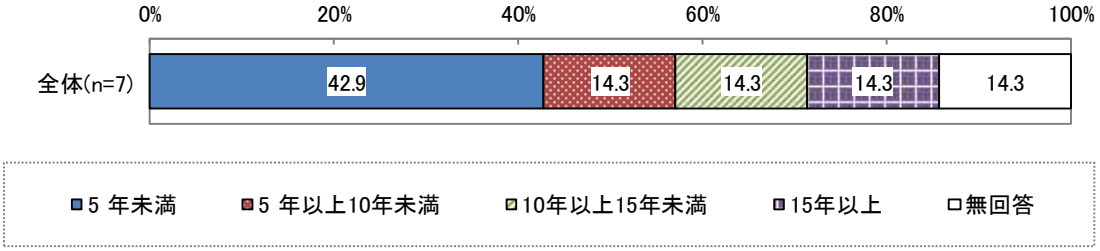
【問 1 で「2. EPA 介護福祉士候補者対象　研修講師」と回答の方】

問 1-6:あなたの EPA 介護福祉士候補者対象　研修講師の経験年数と、外国人介護人材を指導した経験が何年あるかについて、それぞれ教えてください。

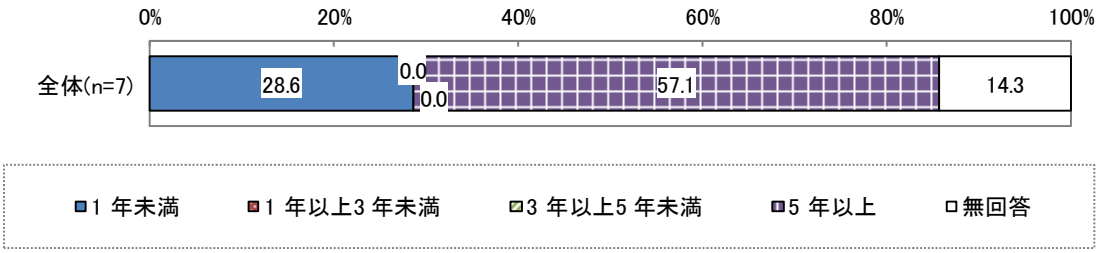
・研修講師としての経験年数は、「5 年未満」が 42.9%と最も高く、次いで「5 年以上 10 年未満」と「10 年以上 15 年未満」と「15 年以上」が 14.3%であった。

・外国人介護人材を指導した経験年数は、「5 年以上」が 57.1%と最も高く、次いで「1 年未満」が 28.6%であった。

＜研修講師としての経験年数(通算年数)＞



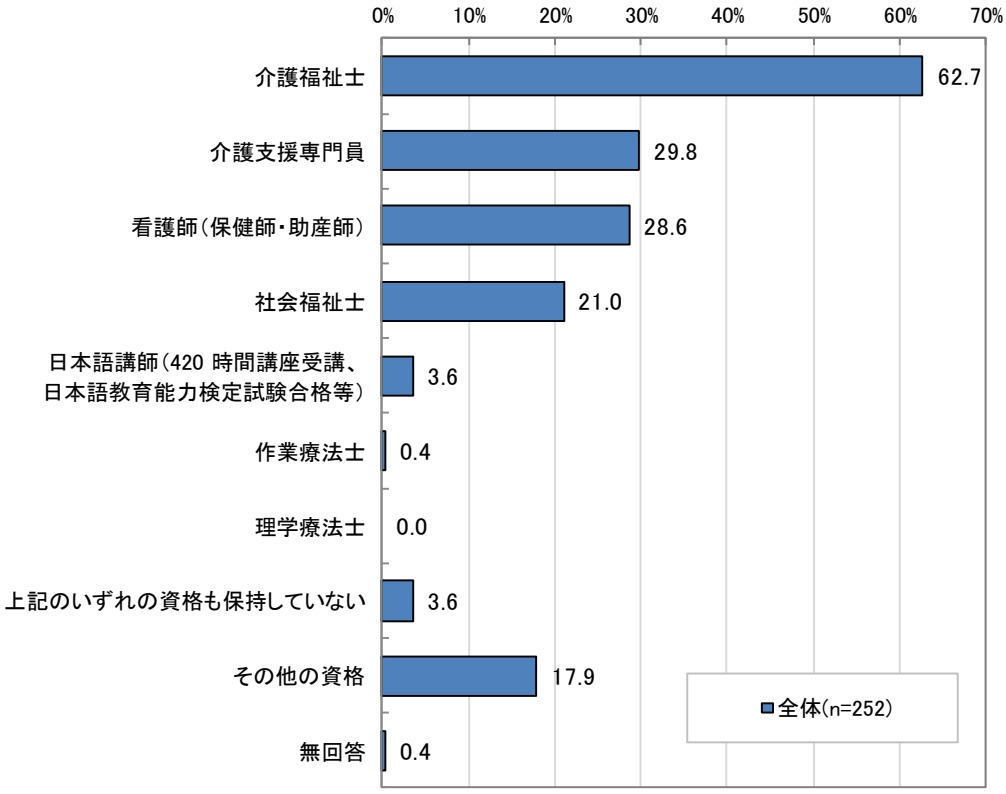
＜外国人介護人材を指導した経験年数(通算年数)＞



(7) 保持する資格

問 2:あなたの保持する資格について、以下に該当するものがあるか教えてください。

・「介護福祉士」が 62.7%と最も高く、次いで「介護支援専門員」が 29.8%、「看護師(保健師・助産師)」が 28.6%であった。



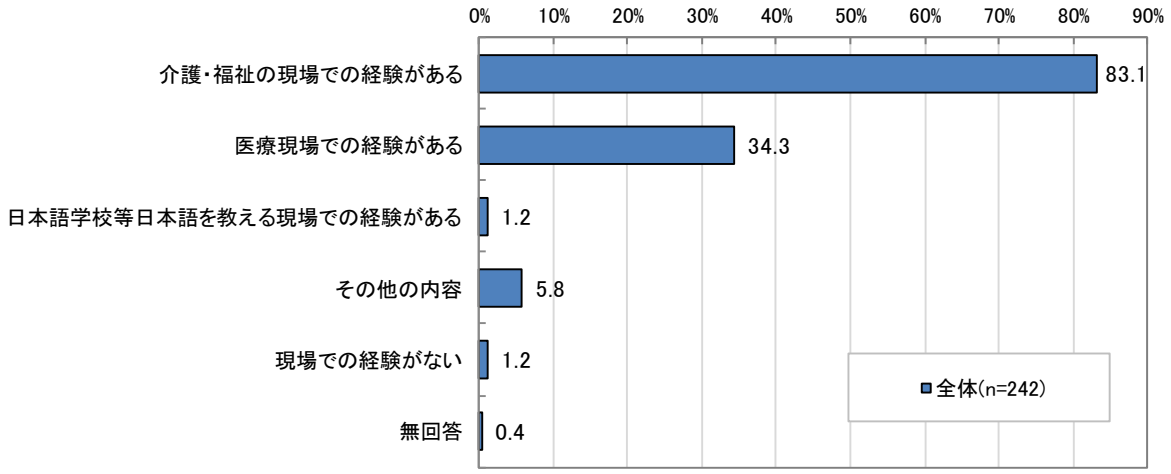
		調査数	介護福祉士	社会福祉士	介護支援専門員	看護師(保健師・助産師)	作業療法士	理学療法士	日本語講師(420 時間講座受講、日本語教育能力検定試験合格等)	上記のいずれの資格も保持していない	その他の資格	無回答
	全体	252	62.7	21.0	29.8	28.6	0.4	0.0	3.6	3.6	17.9	0.4
養成校の種類	専門学校	197	65.5	16.8	28.9	27.4	0.0	0.0	4.1	3.0	18.3	0.0
	短期大学	32	59.4	31.3	25.0	28.1	3.1	0.0	3.1	6.3	15.6	0.0
	4 年制大学	19	47.4	47.4	42.1	42.1	0.0	0.0	0.0	5.3	21.1	0.0

・養成校の種類別に見ると、4 年制大学の場合、介護福祉士の割合が少なく、社会福祉士・介護支援専門員・看護師(保健師・助産師)の割合が高かった。

【問 2 で「7.日本語講師」以外と回答の方】

問 2-1:あなたが、問2. で回答いただいた保持資格を活かした現場経験があるかについて教えてください。

・「介護・福祉の現場での経験がある」が 83.1%と最も高く、次いで「医療現場での経験がある」が 34.3%、「その他の内容」が 5.8%であった。

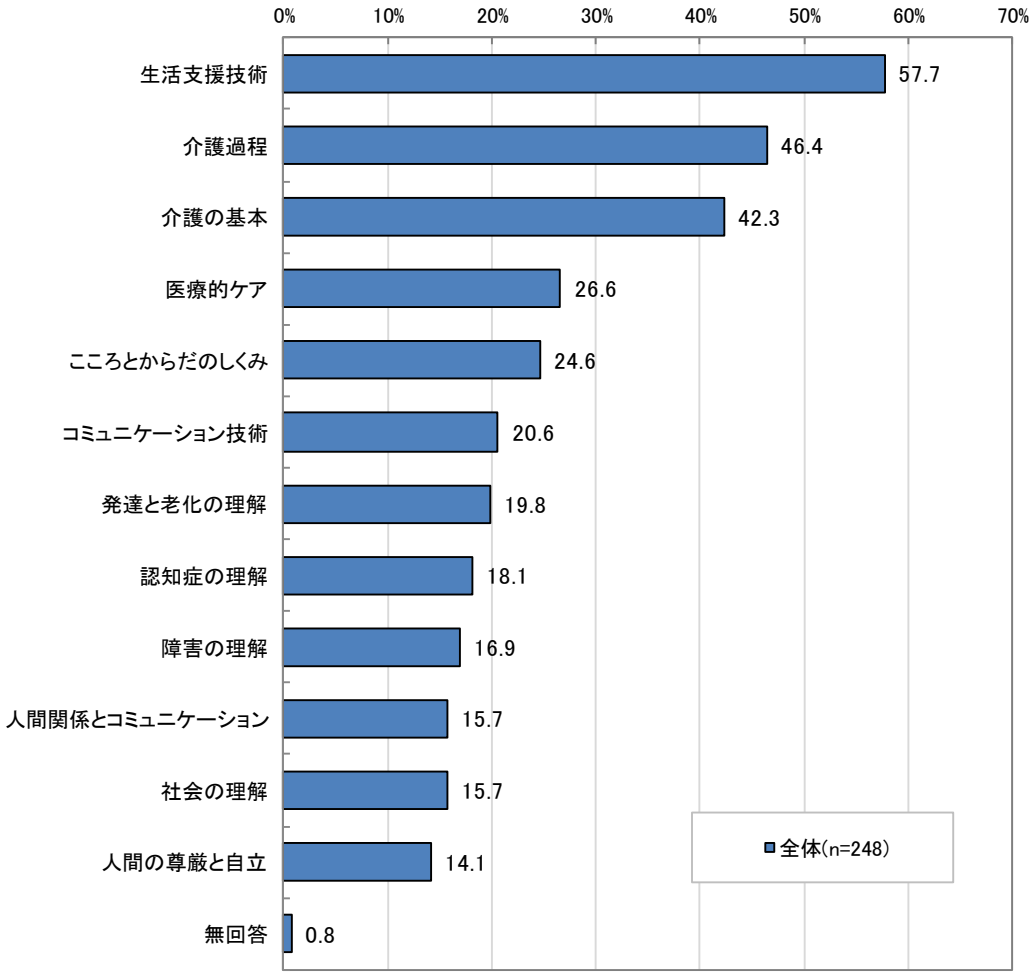


2. 講義内(時間割内)で行っている指導内容　※養成校教員に該当する方のみ

(1) 教えている科目と開講時期

問 3:あなたが教員(講師)として留学生に教えている科目(補講を除く、時間割内の講義に該当するもの)を教えてください。

・「生活支援技術」が 57.7%と最も高く、次いで「介護過程」が 46.4%、「介護の基本」が 42.3%であった。



		調査数	人間の尊厳と自立	人間関係とコミュニケーション	社会の理解	介護の基本	コミュニケーション技術	生活支援技術	介護過程	こころとからだのしくみ	発達と老化の理解	認知症の理解	障害の理解	医療的ケア	無回答
	全体	248	14.1	15.7	15.7	42.3	20.6	57.7	46.4	24.6	19.8	18.1	16.9	26.6	0.8
養成校教員経験年数	5 年未満	53	9.4	9.4	15.1	34.0	24.5	56.6	20.8	30.2	24.5	17.0	15.1	24.5	3.8
	5 年以上10年未満	64	7.8	15.6	14.1	40.6	15.6	65.6	43.8	26.6	25.0	25.0	17.2	34.4	0.0
	10年以上15年未満	42	21.4	16.7	11.9	33.3	23.8	57.1	61.9	14.3	16.7	19.0	11.9	23.8	0.0
	15年以上	89	18.0	19.1	19.1	52.8	20.2	52.8	56.2	24.7	14.6	13.5	20.2	23.6	0.0
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	17.9	10.7	10.7	46.4	17.9	57.1	39.3	14.3	17.9	21.4	10.7	21.4	0.0
	1 年以上3 年未満	52	13.5	7.7	17.3	28.8	15.4	55.8	38.5	34.6	26.9	21.2	17.3	30.8	3.8
	3 年以上5 年未満	99	8.1	20.2	16.2	44.4	23.2	56.6	50.5	23.2	21.2	19.2	18.2	26.3	0.0
	5 年以上	69	21.7	17.4	15.9	47.8	21.7	60.9	49.3	23.2	13.0	13.0	17.4	26.1	0.0

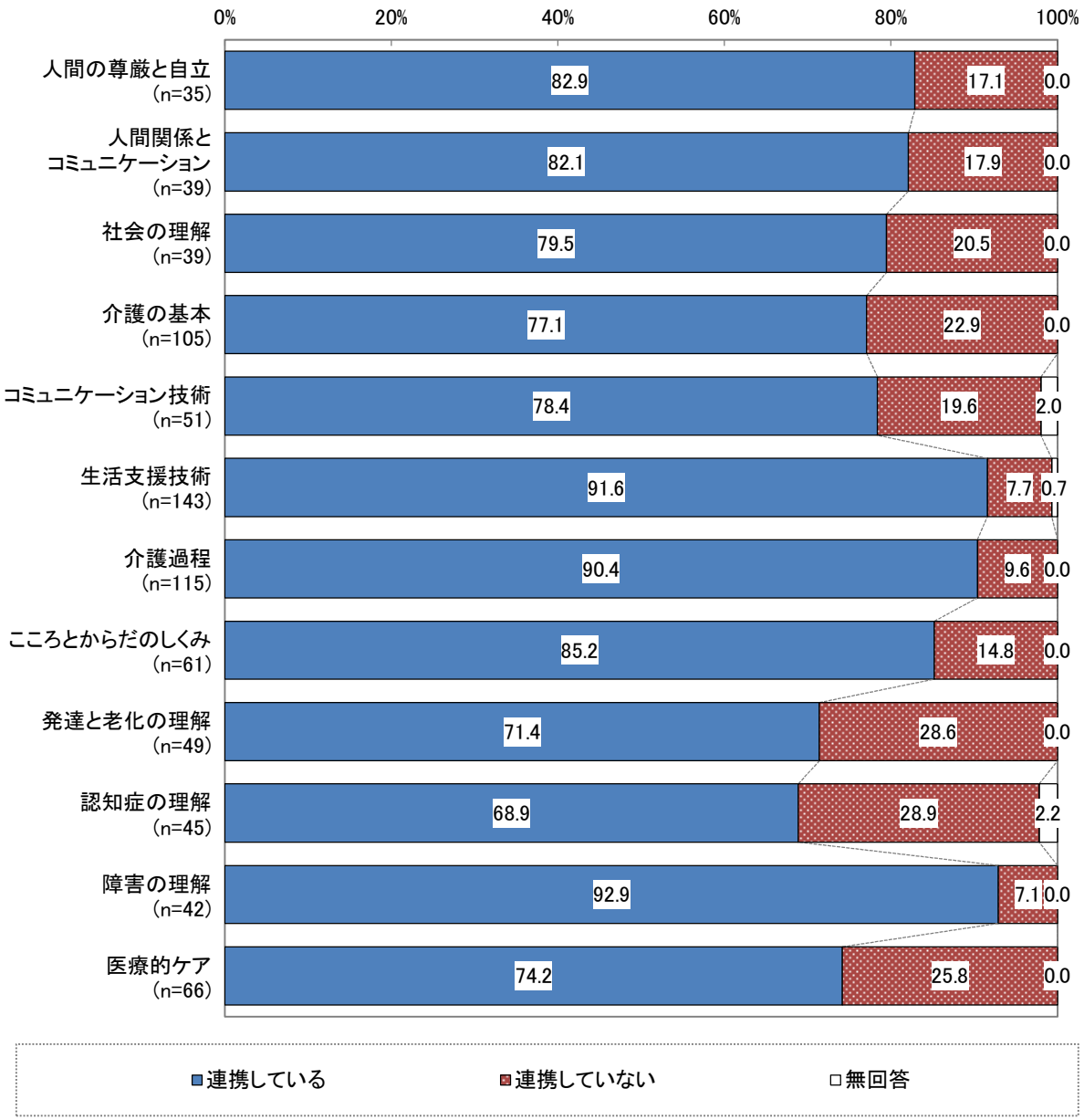
・養成校教員経験年数別に見ると、経験年数が長い教員(講師)においては、「介護の基本」、「介護過程」を担当している割合が高かった。

(2) 他科目の教員(講師)との指導内容や指導方法等の連携について

問 4.1:あなたが、問3. でお答えいただいた留学生に教えている科目(補講を除く、時間割内の講義に該当するもの)について、他科目の教員(講師)と指導内容や指導方法等を連携しているかどうか教えてください。

- 12 科目を担当される教員(講師)に、担当するそれぞれの科目 1 つ 1 つにおいて、いずれかの他科目の教員(講師)と連携しているかたずねたところ、「障害の理解」が 92.9%と他科目の教員(講師)と連携している割合が最も高く、次いで「生活支援技術」が 91.6%、「介護過程」が 90.4%であった。
- 他科目の教員(講師)と連携していない割合は、「認知症の理解」が 28.9%と最も高く、次いで「発達と老化の理解」が 28.6%、「医療的ケア」が 25.8%であった。

＜他科目の教員(講師)との指導内容や指導方法等の連携有無＞



● 人間の尊厳と自立

		調査数	連携している	連携していない	無回答
	全体	35	82.9	17.1	0.0
養成校教員経験年数	5 年未満	5	80.0	20.0	0.0
	5 年以上10年未満	5	100.0	0.0	0.0
	10年以上15年未満	9	77.8	22.2	0.0
	15年以上	16	81.3	18.8	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	15	86.7	13.3	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	18	88.9	11.1	0.0
	上記以外の専任講師	8	75.0	25.0	0.0
	非常勤講師	－	0.0	0.0	0.0

● 人間関係とコミュニケーション

		調査数	連携している	連携していない	無回答
	全体	39	82.1	17.9	0.0
養成校教員経験年数	5 年未満	5	40.0	60.0	0.0
	5 年以上10年未満	10	80.0	20.0	0.0
	10年以上15年未満	7	100.0	0.0	0.0
	15年以上	17	88.2	11.8	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	20	85.0	15.0	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	17	82.4	17.6	0.0
	上記以外の専任講師	10	80.0	20.0	0.0
	非常勤講師	－	0.0	0.0	0.0

● 社会の理解

		調査数	連携している	連携していない	無回答
	全体	39	79.5	20.5	0.0
養成校教員経験年数	5 年未満	8	62.5	37.5	0.0
	5 年以上10年未満	9	88.9	11.1	0.0
	10年以上15年未満	5	80.0	20.0	0.0
	15年以上	17	82.4	17.6	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	17	94.1	5.9	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	19	84.2	15.8	0.0
	上記以外の専任講師	12	58.3	41.7	0.0
	非常勤講師	－	0.0	0.0	0.0

● 介護の基本

		調査数	連携している	連携していない	無回答
	全体	105	77.1	22.9	0.0
養成校教員経験年数	5 年未満	18	66.7	33.3	0.0
	5 年以上10年未満	26	80.8	19.2	0.0
	10年以上15年未満	14	85.7	14.3	0.0
	15年以上	47	76.6	23.4	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	52	75.0	25.0	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	43	79.1	20.9	0.0
	上記以外の専任講師	28	82.1	17.9	0.0
	非常勤講師	1	100.0	0.0	0.0

● コミュニケーション技術

		調査数	連携している	連携していない	無回答
	全体	51	78.4	19.6	2.0
養成校教員経験年数	5 年未満	13	53.8	38.5	7.7
	5 年以上10年未満	10	90.0	10.0	0.0
	10年以上15年未満	10	80.0	20.0	0.0
	15年以上	18	88.9	11.1	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	19	78.9	21.1	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	17	76.5	23.5	0.0
	上記以外の専任講師	21	76.2	19.0	4.8
	非常勤講師	1	100.0	0.0	0.0

● 生活支援技術

		調査数	連携している	連携していない	無回答
	全体	143	91.6	7.7	0.7
養成校教員経験年数	5 年未満	30	76.7	20.0	3.3
	5 年以上10年未満	42	97.6	2.4	0.0
	10年以上15年未満	24	87.5	12.5	0.0
	15年以上	47	97.9	2.1	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	58	98.3	1.7	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	58	96.6	3.4	0.0
	上記以外の専任講師	45	77.8	20.0	2.2
	非常勤講師	3	100.0	0.0	0.0

● 介護過程

		調査数	連携している	連携していない	無回答
	全体	115	90.4	9.6	0.0
養成校教員経験年数	5 年未満	11	72.7	27.3	0.0
	5 年以上10年未満	28	92.9	7.1	0.0
	10年以上15年未満	26	88.5	11.5	0.0
	15年以上	50	94.0	6.0	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	60	93.3	6.7	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	46	91.3	8.7	0.0
	上記以外の専任講師	24	83.3	16.7	0.0
	非常勤講師	1	100.0	0.0	0.0

● こころとからだのしくみ

		調査数	連携している	連携していない	無回答
	全体	61	85.2	14.8	0.0
養成校教員経験年数	5 年未満	16	75.0	25.0	0.0
	5 年以上10年未満	17	94.1	5.9	0.0
	10年以上15年未満	6	100.0	0.0	0.0
	15年以上	22	81.8	18.2	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	25	80.0	20.0	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	28	92.9	7.1	0.0
	上記以外の専任講師	15	80.0	20.0	0.0
	非常勤講師	-	0.0	0.0	0.0

● 発達と老化の理解

		調査数	連携している	連携していない	無回答
	全体	49	71.4	28.6	0.0
養成校教員経験年数	5 年未満	13	84.6	15.4	0.0
	5 年以上10年未満	16	68.8	31.3	0.0
	10年以上15年未満	7	71.4	28.6	0.0
	15年以上	13	61.5	38.5	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	20	75.0	25.0	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	22	72.7	27.3	0.0
	上記以外の専任講師	10	60.0	40.0	0.0
	非常勤講師	1	100.0	0.0	0.0

● 認知症の理解

		調査数	連携している	連携していない	無回答
	全体	45	68.9	28.9	2.2
養成校教員経験年数	5 年未満	9	55.6	33.3	11.1
	5 年以上10年未満	16	62.5	37.5	0.0
	10年以上15年未満	8	100.0	0.0	0.0
	15年以上	12	66.7	33.3	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	21	66.7	33.3	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	19	78.9	21.1	0.0
	上記以外の専任講師	10	70.0	20.0	10.0
	非常勤講師	–	0.0	0.0	0.0

● 障害の理解

		調査数	連携している	連携していない	無回答
	全体	42	92.9	7.1	0.0
養成校教員経験年数	5 年未満	8	87.5	12.5	0.0
	5 年以上10年未満	11	90.9	9.1	0.0
	10年以上15年未満	5	100.0	0.0	0.0
	15年以上	18	94.4	5.6	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	24	91.7	8.3	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	18	94.4	5.6	0.0
	上記以外の専任講師	8	87.5	12.5	0.0
	非常勤講師	–	0.0	0.0	0.0

● 医療的ケア

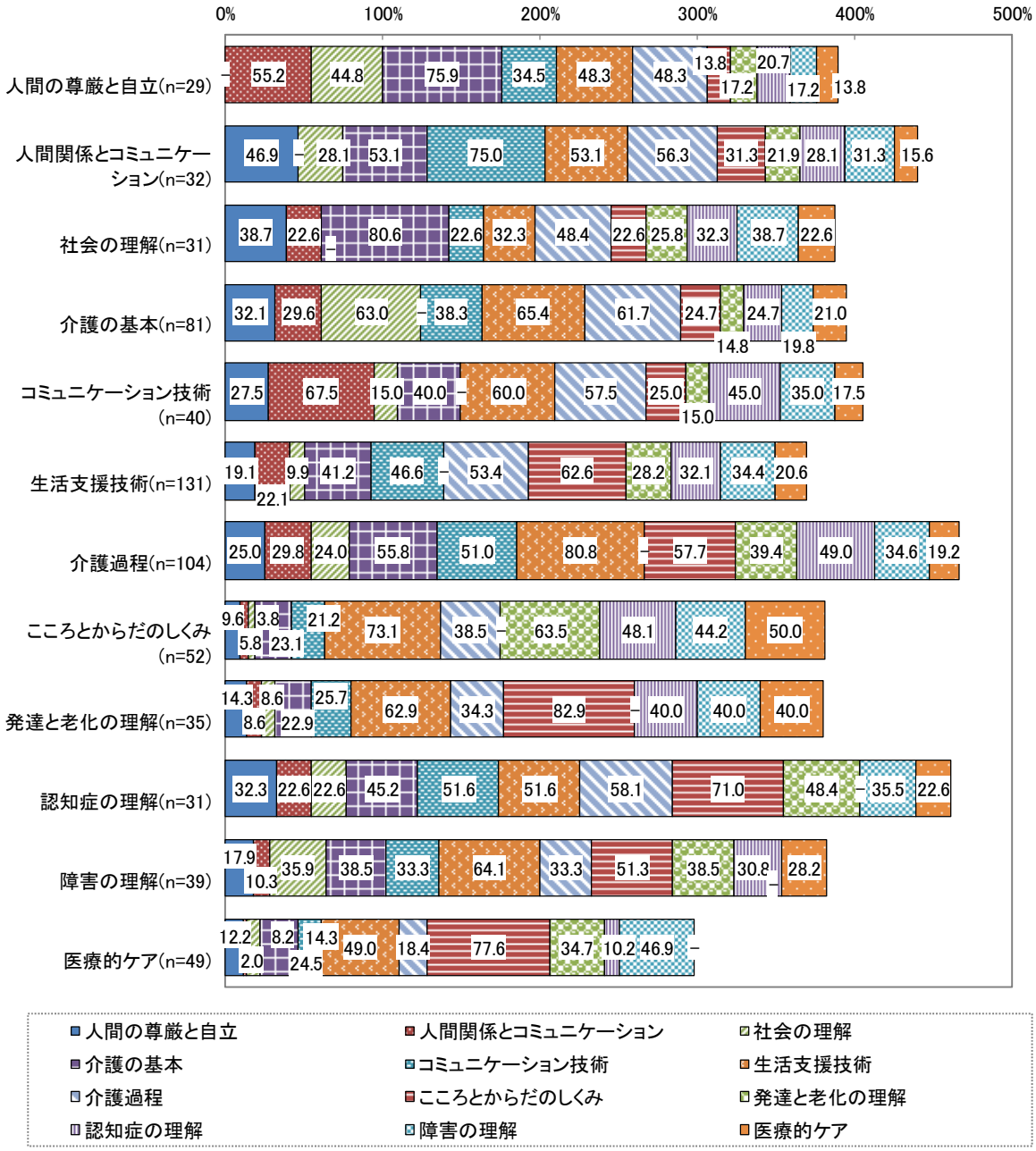
		調査数	連携している	連携していない	無回答
	全体	66	74.2	25.8	0.0
養成校教員経験年数	5 年未満	13	76.9	23.1	0.0
	5 年以上10年未満	22	59.1	40.9	0.0
	10年以上15年未満	10	90.0	10.0	0.0
	15年以上	21	81.0	19.0	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	30	70.0	30.0	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	31	80.6	19.4	0.0
	上記以外の専任講師	13	69.2	30.8	0.0
	非常勤講師	1	100.0	0.0	0.0

・養成校教員経験年数別に見ると、概ねどの科目においても、教員(講師)経験が長い教員(講師)の方が、短い教員(講師)より連携している割合が高い傾向にあった。
・教員種別で見ると、概ねどの科目においても、教務主任や領域責任者である教員(講師)の方が、その他の教員(講師)より連携している割合が高い傾向にあった。

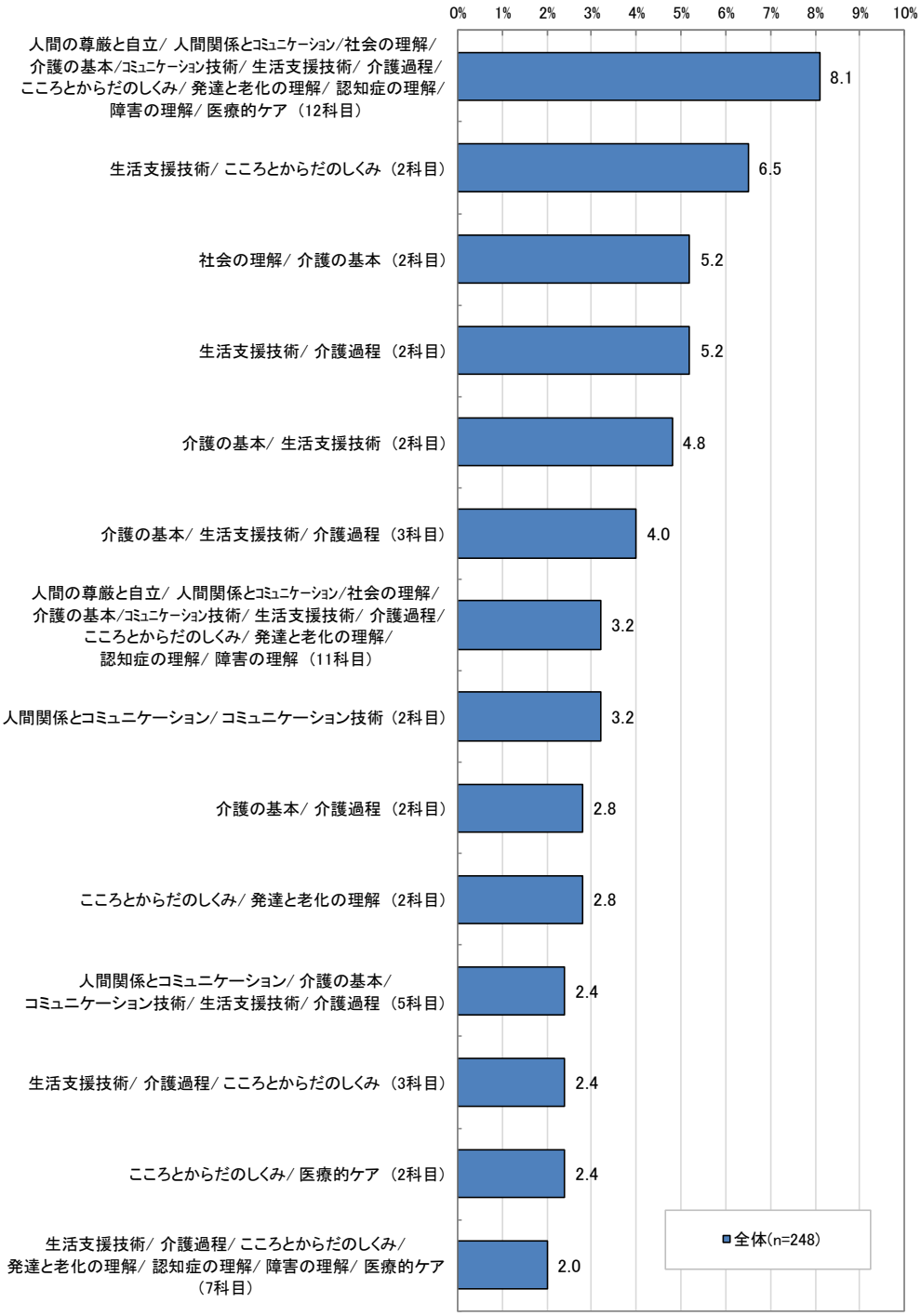
問 4.2:他科目の教員(講師)から指導内容や指導方法等が連携されている科目

・12 科目それぞれを担当される教員(講師)に、どの科目と連携しているかをたずねたところ、12 科目の中では、「介護過程」、「認知症の理解」、「人間関係とコミュニケーション」が他科目と連携されているケースが多く、「介護過程」においては「生活支援技術」(80.8%)、「認知症の理解」においては「こころとからだのしくみ」(71.0%)、「人間関係とコミュニケーション」においては「コミュニケーション技術」(75.0%)が、最も連携されている科目であった。

＜他科目の教員(講師)から指導内容や指導方法等が連携されている科目＞



・各教員(講師)同士で連携している科目について、その組み合わせを確認したところ、組み合わせパターン総数は 278 件となった。以下、パターン全体のうち 2%以上となった上位 14 パターンを図として表示する。
・組み合わせパターンでは、「12 科目」すべてで連携している割合が 8.1%と最も高く、次いで「生活支援技術/ こころとからだのしくみ(2 科目)」が 6.5%、「社会の理解/ 介護の基本(2 科目)」と「生活支援技術/ 介護過程(2 科目)」が 5.2%であった。



【問 4 の何らかの科目で「1.連携している」と回答の方】

問 4-1:あなたが、留学生に教えている科目について、他科目の教員(講師)とどのようなことを連携されているかを教えてください。

・学生に関する事柄では、進捗・学力・理解度についての回答が多かった。
・授業そのものについては、講義内容・同類単元について(開講時期・内容・進捗等)の回答が多かった。

【他科目の教員(講師)との連携内容】

		回答数
学生について		計　223
	進捗・学力・理解度について	140
	日本語力について	53
	性格・意欲・授業態度等について	18
	日常生活力について	5
	その他（個別対応の必要性等）	7
授業そのものについて		計　112
	講義内容・同類単元について（開校時期・内容・進捗等）	86
	講義ノウハウ・知見・事例の共有について	21
	その他（連携方法等）	5

(3) 科目間連携の課題

問 5:あなたが感じる、科目間連携の課題について教えてください。

・環境要因として、情報共有する時間がない、連携が浅い、との課題が多く挙がった。
・また、講義内容・講義知識・指導法等、何を共有すればよいか分からない、またどのように共有してよいか分からない、との課題も多く挙がった。

【科目間連携の課題】

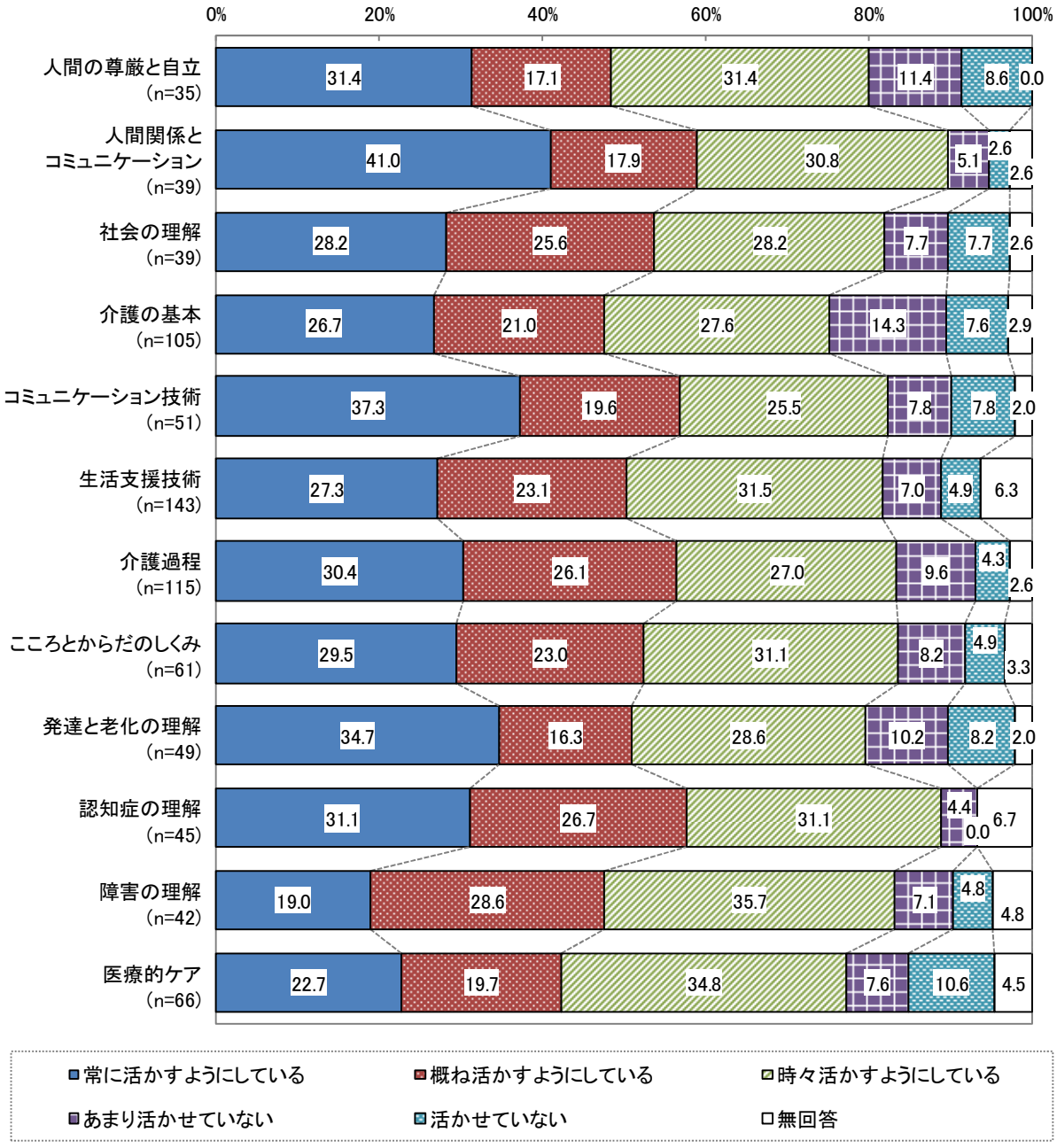
		回答数
環境要因についての課題		計 100
	情報共有する時間が無い、連携が浅い	61
	非常勤講師との連携が難しい	24
	講師側にレベル差や価値観に差がある	15
共有内容についての課題		計 78
	講義内容・講義知識・指導法の共有について	42
	学生情報の共有について	9
	正確性に欠ける、共有・連携しても意味がない	5
	講義の進度に差が出る、求める講義の順番・流れにならない	5
	科目間連携をしている内容であるにもかかわらず学生に認識してもらえない	17

(4) 他科目の教員(講師)と指導内容や指導方法等の連携状況

問 6:あなたが、留学生に教えている科目の講義を行う際、介護実習や留学生の行う介護施設・事業所等のアルバイトでの出来事を授業での説明に活かしているかについて教えてください。

・「常に活かすようにしている」、「概ね活かすようにしている」、「時々活かすようにしている」を合算すると、「人間関係とコミュニケーション」が 89.7%と最もアルバイトでの出来事を授業での説明に活かしている。次いで「認知症の理解」が 88.9%であった。

＜活用頻度＞



● 人間の尊厳と自立

		調査数	常に活かすようにしている	概ね活かすようにしている	時々活かすようにしている	あまり活かせていない	活かせていない	無回答
	全体	35	31.4	17.1	31.4	11.4	8.6	0.0
養成校教員経験年数	5 年未満	5	20.0	20.0	20.0	40.0	0.0	0.0
	5 年以上10年未満	5	60.0	20.0	20.0	0.0	0.0	0.0
	10年以上15年未満	9	55.6	0.0	33.3	0.0	11.1	0.0
	15年以上	16	12.5	25.0	37.5	12.5	12.5	0.0
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	5	20.0	0.0	60.0	0.0	20.0	0.0
	1 年以上3 年未満	7	14.3	28.6	42.9	14.3	0.0	0.0
	3 年以上5 年未満	8	25.0	37.5	12.5	25.0	0.0	0.0
	5 年以上	15	46.7	6.7	26.7	6.7	13.3	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	15	33.3	20.0	33.3	13.3	0.0	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	18	27.8	16.7	38.9	0.0	16.7	0.0
	上記以外の専任講師	8	37.5	12.5	25.0	25.0	0.0	0.0
	非常勤講師	–	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

● 人間関係とコミュニケーション

		調査数	常に活かすようにしている	概ね活かすようにしている	時々活かすようにしている	あまり活かせていない	活かせていない	無回答
	全体	39	41.0	17.9	30.8	5.1	2.6	2.6
養成校教員経験年数	5 年未満	5	20.0	40.0	40.0	0.0	0.0	0.0
	5 年以上10年未満	10	60.0	20.0	20.0	0.0	0.0	0.0
	10年以上15年未満	7	57.1	0.0	14.3	0.0	14.3	14.3
	15年以上	17	29.4	17.6	41.2	11.8	0.0	0.0
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	3	33.3	33.3	33.3	0.0	0.0	0.0
	1 年以上3 年未満	4	25.0	0.0	75.0	0.0	0.0	0.0
	3 年以上5 年未満	20	45.0	25.0	20.0	0.0	5.0	5.0
	5 年以上	12	41.7	8.3	33.3	16.7	0.0	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	20	40.0	20.0	35.0	5.0	0.0	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	17	29.4	29.4	23.5	5.9	5.9	5.9
	上記以外の専任講師	10	60.0	10.0	30.0	0.0	0.0	0.0
	非常勤講師	–	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

● 社会の理解

		調査数	常に活かすようにしている	概ね活かすようにしている	時々活かすようにしている	あまり活かせていない	活かせていない	無回答
	全体	39	28.2	25.6	28.2	7.7	7.7	2.6
養成校教員経験年数	5 年未満	8	12.5	37.5	37.5	0.0	12.5	0.0
	5 年以上10年未満	9	55.6	11.1	11.1	11.1	0.0	11.1
	10年以上15年未満	5	60.0	0.0	40.0	0.0	0.0	0.0
	15年以上	17	11.8	35.3	29.4	11.8	11.8	0.0
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	3	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
	1 年以上3 年未満	9	22.2	22.2	33.3	11.1	11.1	0.0
	3 年以上5 年未満	16	31.3	37.5	12.5	12.5	0.0	6.3
	5 年以上	11	36.4	18.2	27.3	0.0	18.2	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	17	23.5	35.3	23.5	17.6	0.0	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	19	26.3	26.3	31.6	5.3	10.5	0.0
	上記以外の専任講師	12	33.3	16.7	33.3	0.0	8.3	8.3
	非常勤講師	–	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

● 介護の基本

		調査数	常に活かすようにしている	概ね活かすようにしている	時々活かすようにしている	あまり活かせていない	活かせていない	無回答
	全体	105	26.7	21.0	27.6	14.3	7.6	2.9
養成校教員経験年数	5 年未満	18	50.0	16.7	16.7	5.6	11.1	0.0
	5 年以上10年未満	26	30.8	26.9	11.5	19.2	3.8	7.7
	10年以上15年未満	14	21.4	14.3	35.7	14.3	14.3	0.0
	15年以上	47	17.0	21.3	38.3	14.9	6.4	2.1
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	13	30.8	7.7	30.8	15.4	15.4	0.0
	1 年以上3 年未満	15	33.3	20.0	33.3	6.7	6.7	0.0
	3 年以上5 年未満	44	25.0	22.7	20.5	15.9	9.1	6.8
	5 年以上	33	24.2	24.2	33.3	15.2	3.0	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	52	13.5	28.8	30.8	15.4	7.7	3.8
	専任講師　かつ　領域責任者	43	27.9	20.9	27.9	14.0	4.7	4.7
	上記以外の専任講師	28	35.7	10.7	32.1	14.3	7.1	0.0
	非常勤講師	1	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

● コミュニケーション技術

		調査数	常に活かすようにしている	概ね活かすようにしている	時々活かすようにしている	あまり活かせていない	活かせていない	無回答
	全体	51	37.3	19.6	25.5	7.8	7.8	2.0
養成校教員経験年数	5 年未満	13	30.8	23.1	30.8	0.0	7.7	7.7
	5 年以上10年未満	10	40.0	30.0	10.0	20.0	0.0	0.0
	10年以上15年未満	10	60.0	10.0	10.0	0.0	20.0	0.0
	15年以上	18	27.8	16.7	38.9	11.1	5.6	0.0
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	5	40.0	20.0	40.0	0.0	0.0	0.0
	1 年以上3 年未満	8	25.0	0.0	50.0	12.5	0.0	12.5
	3 年以上5 年未満	23	34.8	30.4	13.0	4.3	17.4	0.0
	5 年以上	15	46.7	13.3	26.7	13.3	0.0	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	19	36.8	31.6	21.1	5.3	5.3	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	17	41.2	23.5	17.6	5.9	11.8	0.0
	上記以外の専任講師	21	28.6	14.3	38.1	9.5	4.8	4.8
	非常勤講師	1	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

● 生活支援技術

		調査数	常に活かすようにしている	概ね活かすようにしている	時々活かすようにしている	あまり活かせていない	活かせていない	無回答
	全体	143	27.3	23.1	31.5	7.0	4.9	6.3
養成校教員経験年数	5 年未満	30	36.7	23.3	13.3	6.7	13.3	6.7
	5 年以上10年未満	42	33.3	19.0	26.2	7.1	2.4	11.9
	10年以上15年未満	24	29.2	29.2	25.0	8.3	4.2	4.2
	15年以上	47	14.9	23.4	51.1	6.4	2.1	2.1
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	16	37.5	6.3	37.5	12.5	0.0	6.3
	1 年以上3 年未満	29	20.7	27.6	34.5	6.9	6.9	3.4
	3 年以上5 年未満	56	28.6	28.6	17.9	5.4	7.1	12.5
	5 年以上	42	26.2	19.0	45.2	7.1	2.4	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	58	19.0	25.9	39.7	8.6	3.4	3.4
	専任講師　かつ　領域責任者	58	24.1	27.6	31.0	3.4	5.2	8.6
	上記以外の専任講師	45	28.9	17.8	31.1	8.9	6.7	6.7
	非常勤講師	3	66.7	33.3	0.0	0.0	0.0	0.0

● 介護過程

		調査数	常に活かすようにしている	概ね活かすようにしている	時々活かすようにしている	あまり活かせていない	活かせていない	無回答
	全体	115	30.4	26.1	27.0	9.6	4.3	2.6
養成校教員経験年数	5 年未満	11	36.4	36.4	18.2	0.0	9.1	0.0
	5 年以上10年未満	28	42.9	17.9	17.9	14.3	3.6	3.6
	10年以上15年未満	26	30.8	23.1	23.1	15.4	3.8	3.8
	15年以上	50	22.0	30.0	36.0	6.0	4.0	2.0
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	11	27.3	9.1	36.4	18.2	9.1	0.0
	1 年以上3 年未満	20	25.0	35.0	25.0	10.0	5.0	0.0
	3 年以上5 年未満	50	30.0	28.0	22.0	8.0	6.0	6.0
	5 年以上	34	35.3	23.5	32.4	8.8	0.0	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	60	26.7	23.3	33.3	10.0	5.0	1.7
	専任講師　かつ　領域責任者	46	34.8	32.6	15.2	6.5	6.5	4.3
	上記以外の専任講師	24	29.2	25.0	25.0	16.7	4.2	0.0
	非常勤講師	1	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0

● こころとからだのしくみ

		調査数	常に活かすようにしている	概ね活かすようにしている	時々活かすようにしている	あまり活かせていない	活かせていない	無回答
	全体	61	29.5	23.0	31.1	8.2	4.9	3.3
養成校教員経験年数	5 年未満	16	31.3	31.3	25.0	6.3	6.3	0.0
	5 年以上10年未満	17	35.3	23.5	29.4	0.0	0.0	11.8
	10年以上15年未満	6	50.0	16.7	16.7	16.7	0.0	0.0
	15年以上	22	18.2	18.2	40.9	13.6	9.1	0.0
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	4	25.0	0.0	0.0	25.0	25.0	25.0
	1 年以上3 年未満	18	22.2	11.1	50.0	11.1	5.6	0.0
	3 年以上5 年未満	23	39.1	34.8	26.1	0.0	0.0	0.0
	5 年以上	16	25.0	25.0	25.0	12.5	6.3	6.3
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	25	32.0	20.0	24.0	12.0	8.0	4.0
	専任講師　かつ　領域責任者	28	21.4	25.0	28.6	10.7	7.1	7.1
	上記以外の専任講師	15	33.3	20.0	40.0	6.7	0.0	0.0
	非常勤講師	–	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

● 発達と老化の理解

		調査数	常に活かすようにしている	概ね活かすようにしている	時々活かすようにしている	あまり活かせていない	活かせていない	無回答
	全体	49	34.7	16.3	28.6	10.2	8.2	2.0
養成校教員経験年数	5 年未満	13	30.8	30.8	23.1	7.7	7.7	0.0
	5 年以上10年未満	16	43.8	18.8	18.8	12.5	0.0	6.3
	10年以上15年未満	7	28.6	0.0	42.9	0.0	28.6	0.0
	15年以上	13	30.8	7.7	38.5	15.4	7.7	0.0
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	5	40.0	0.0	0.0	20.0	20.0	20.0
	1 年以上3 年未満	14	21.4	7.1	42.9	21.4	7.1	0.0
	3 年以上5 年未満	21	33.3	28.6	33.3	0.0	4.8	0.0
	5 年以上	9	55.6	11.1	11.1	11.1	11.1	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	20	35.0	20.0	30.0	10.0	5.0	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	22	22.7	18.2	27.3	13.6	13.6	4.5
	上記以外の専任講師	10	50.0	10.0	20.0	10.0	10.0	0.0
	非常勤講師	1	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

● 認知症の理解

		調査数	常に活かすようにしている	概ね活かすようにしている	時々活かすようにしている	あまり活かせていない	活かせていない	無回答
	全体	45	31.1	26.7	31.1	4.4	0.0	6.7
養成校教員経験年数	5 年未満	9	33.3	33.3	22.2	0.0	0.0	11.1
	5 年以上10年未満	16	50.0	25.0	12.5	6.3	0.0	6.3
	10年以上15年未満	8	0.0	25.0	62.5	0.0	0.0	12.5
	15年以上	12	25.0	25.0	41.7	8.3	0.0	0.0
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	6	16.7	33.3	50.0	0.0	0.0	0.0
	1 年以上3 年未満	11	18.2	27.3	36.4	9.1	0.0	9.1
	3 年以上5 年未満	19	42.1	26.3	21.1	0.0	0.0	10.5
	5 年以上	9	33.3	22.2	33.3	11.1	0.0	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	21	23.8	23.8	42.9	9.5	0.0	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	19	36.8	31.6	26.3	0.0	0.0	5.3
	上記以外の専任講師	10	30.0	30.0	20.0	0.0	0.0	20.0
	非常勤講師	-	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

● 障害の理解

		調査数	常に活かすようにしている	概ね活かすようにしている	時々活かすようにしている	あまり活かせていない	活かせていない	無回答
	全体	42	19.0	28.6	35.7	7.1	4.8	4.8
養成校教員経験年数	5 年未満	8	37.5	12.5	25.0	0.0	25.0	0.0
	5 年以上10年未満	11	27.3	45.5	9.1	9.1	0.0	9.1
	10年以上15年未満	5	20.0	40.0	40.0	0.0	0.0	0.0
	15年以上	18	5.6	22.2	55.6	11.1	0.0	5.6
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	3	0.0	33.3	33.3	0.0	0.0	33.3
	1 年以上3 年未満	9	22.2	11.1	33.3	11.1	22.2	0.0
	3 年以上5 年未満	18	22.2	33.3	27.8	11.1	0.0	5.6
	5 年以上	12	16.7	33.3	50.0	0.0	0.0	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	24	25.0	25.0	37.5	8.3	0.0	4.2
	専任講師　かつ　領域責任者	18	5.6	33.3	44.4	5.6	5.6	5.6
	上記以外の専任講師	8	12.5	37.5	37.5	0.0	12.5	0.0
	非常勤講師	-	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

● 医療的ケア

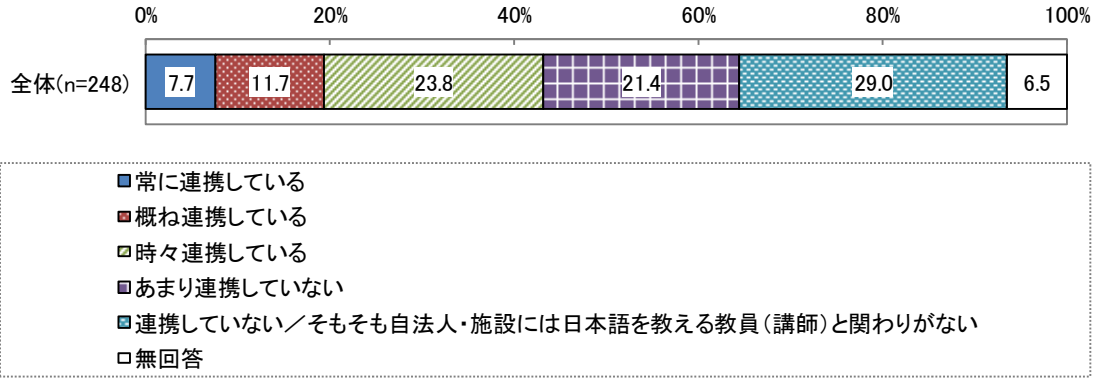
		調査数	常に活かすようにしている	概ね活かすようにしている	時々活かすようにしている	あまり活かせていない	活かせていない	無回答
	全体	66	22.7	19.7	34.8	7.6	10.6	4.5
養成校教員経験年数	5 年未満	13	23.1	15.4	53.8	0.0	7.7	0.0
	5 年以上10年未満	22	31.8	18.2	27.3	4.5	4.5	13.6
	10年以上15年未満	10	20.0	20.0	30.0	20.0	10.0	0.0
	15年以上	21	14.3	23.8	33.3	9.5	19.0	0.0
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	6	16.7	16.7	0.0	16.7	33.3	16.7
	1 年以上3 年未満	16	18.8	25.0	31.3	12.5	12.5	0.0
	3 年以上5 年未満	26	23.1	19.2	46.2	7.7	0.0	3.8
	5 年以上	18	27.8	16.7	33.3	0.0	16.7	5.6
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	30	26.7	20.0	26.7	10.0	13.3	3.3
	専任講師　かつ　領域責任者	31	12.9	19.4	35.5	12.9	12.9	6.5
	上記以外の専任講師	13	15.4	23.1	38.5	0.0	15.4	7.7
	非常勤講師	1	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

・養成校教員経験年数別に見ると、概ねどの科目においても、教員(講師)経験が長い教員(講師)の方が、短い講師より、活かすようにしている割合が高い傾向にあった。
・外国人介護人材を指導した経験年数別に見ると、概ねどの科目においても、指導経験が長い教員(講師)の方が、短い教員(講師)より、活かすようにしている割合が高い傾向にあった。
・教員種別で見ると、概ねどの科目においても、教務主任や領域責任者である教員(講師)の方が、その他の教員(講師)より、活かすようにしている割合が高い傾向にあった。

(5) 日本語教員(講師)と連携について

問 7:あなたが、講義(補講を除く、時間割内の講義に該当するもの)を行う際に、日本語を教える教員(講師)と連携しているかについて教えてください。

・「連携していない／そもそも自法人・施設には日本語を教える教員(講師)と関わりがない」が 29.0%と最も高く、次いで「時々連携している」が 23.8%、「あまり連携していない」が 21.4%であった



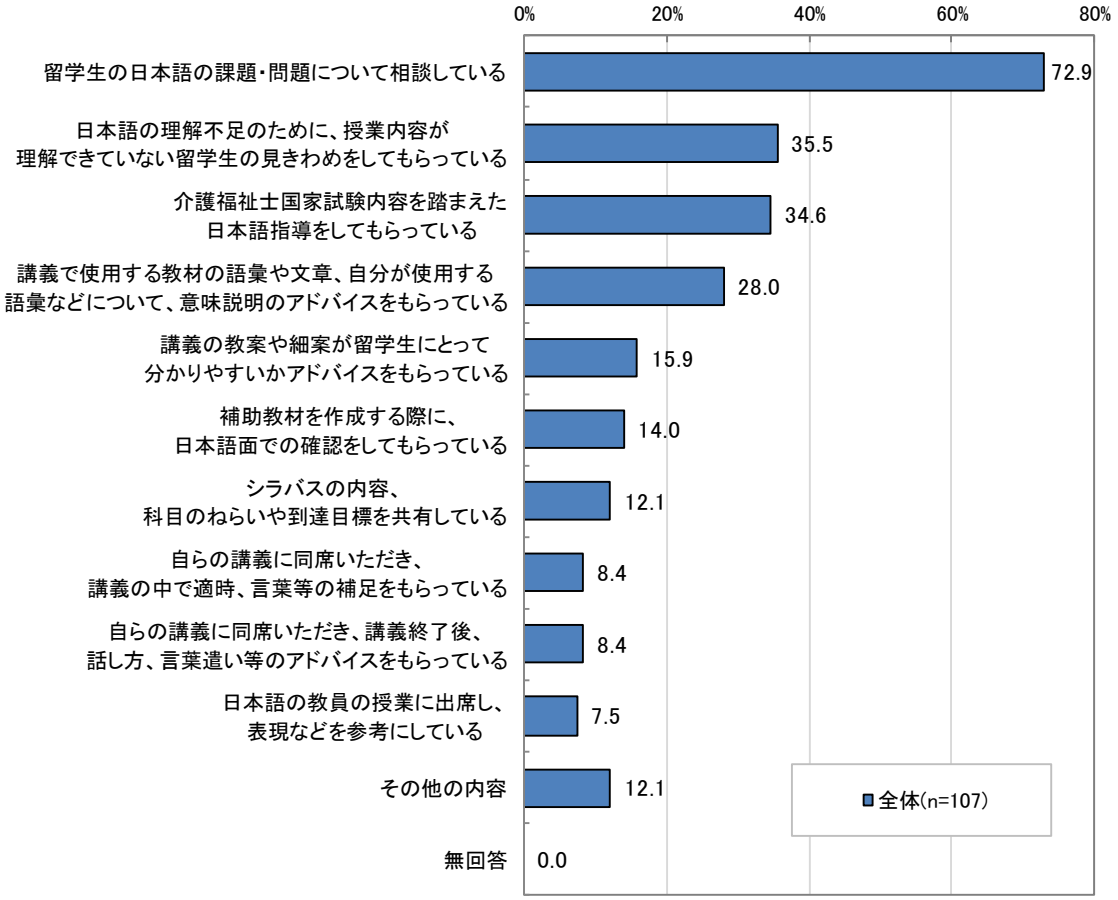
		調査数	常に連携している	概ね連携している	時々連携している	あまり連携していない	連携していない／そもそも自法人・施設には日本語を教える教員(講師)と関わりがない	無回答
全体		248	7.7	11.7	23.8	21.4	29.0	6.5
養成校の種類	専門学校	197	8.1	11.7	23.4	19.3	29.4	8.1
	短期大学	32	6.3	18.8	31.3	21.9	21.9	0.0
	4 年制大学	19	5.3	0.0	15.8	42.1	36.8	0.0

・ 養成校の種類別に見ると、「4 年制大学」の場合、連携していない割合が高かった。

【問 7 で「1. 常に連携している」「2.概ね連携している」「3.時々連携している」と回答の方】

問 7-1:あなたが、日本語を教える教員(講師)と講義内(時間割内)でどのように連携しているかについて教えてください。

・「留学生の日本語の課題・問題について相談している」が 72.9%と最も高く、次いで「日本語の理解不足のために、授業内容が理解できていない留学生の見きわめをしてもらっている」が 35.5%、「介護福祉士国家試験内容を踏まえた日本語指導をしてもらっている」が 34.6%であった。



		調査数	自らの講義に同席いただき、講義の中で適時、言葉等の補足をもらっている	自らの講義に同席いただき、講義終了後、話し方、言葉遣い等のアドバイスをもらっている	講義で使用する教材の語彙や文章、自分が使用する語彙などについて、意味説明のアドバイスをもらっている	補助教材を作成する際に、日本語面での確認をしてもらっている	講義の教案や細案が留学生にとって分かりやすいかアドバイスをもらっている	留学生の日本語の課題・問題について相談している	シラバスの内容、科目のねらいや到達目標を共有している	介護福祉士国家試験内容を踏まえた日本語指導をしてもらっている	日本語の教員の授業に出席し、表現などを参考にしている	日本語の理解不足のために、授業内容が理解できていない留学生の見きわめをしてもらっている	その他の内容	無回答
全体		107	8.4	8.4	28.0	14.0	15.9	72.9	12.1	34.6	7.5	35.5	12.1	0.0
養成校教員経験年数	5 年未満	22	4.5	0.0	31.8	9.1	13.6	**54.5**	**0.0**	31.8	4.5	**22.7**	**22.7**	0.0
	5 年以上10年未満	23	4.3	8.7	26.1	17.4	13.0	73.9	4.3	39.1	0.0	34.8	4.3	0.0
	10年以上15年未満	24	12.5	8.3	25.0	16.7	12.5	**83.3**	12.5	25.0	4.2	**45.8**	12.5	0.0
	15年以上	38	10.5	13.2	28.9	13.2	21.1	76.3	**23.7**	39.5	15.8	36.8	10.5	0.0
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	13	0.0	0.0	30.8	7.7	15.4	**61.5**	15.4	**46.2**	0.0	**23.1**	15.4	0.0
	1 年以上3 年未満	25	8.0	0.0	24.0	16.0	20.0	**60.0**	4.0	**24.0**	8.0	28.0	20.0	0.0
	3 年以上5 年未満	39	2.6	10.3	25.6	10.3	12.8	**84.6**	15.4	38.5	5.1	43.6	10.3	0.0
	5 年以上	30	**20.0**	16.7	33.3	20.0	16.7	73.3	13.3	33.3	13.3	36.7	6.7	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	48	6.3	12.5	27.1	16.7	18.8	70.8	20.8	39.6	8.3	35.4	10.4	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	44	13.6	9.1	18.2	13.6	15.9	**86.4**	13.6	31.8	9.1	40.9	13.6	0.0
	上記以外の専任講師	27	7.4	0.0	37.0	**3.7**	18.5	63.0	**0.0**	37.0	3.7	25.9	14.8	0.0
	非常勤講師	3	0.0	0.0	33.3	**66.7**	**0.0**	**33.3**	**0.0**	**0.0**	**33.3**	**0.0**	**0.0**	0.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	7	0.0	0.0	28.6	**28.6**	**0.0**	**85.7**	14.3	42.9	14.3	28.6	**0.0**	0.0
	日本語講師の資格なし	100	9.0	9.0	28.0	13.0	17.0	72.0	12.0	34.0	7.0	36.0	13.0	0.0

・養成校教員経験年数別、教員種別で見ると、教員(講師)経験が長い教員(講師)、教務主任等の立場が上の教員(講師)の方が、そうでない教員(講師)より、「シラバスの内容、科目のねらいや到達目標を共有している」、「日本語の理解不足のために、授業内容が理解できていない留学生の見きわめをしてもらっている」等、**授業の立て付けや考え方等に関する内容連携をしている割合が高い傾向**にあった。

・外国人介護人材を指導した経験年数別に見ると、指導経験が長い教員(講師)の方が、短い教員(講師)より、「自らの講義に同席いただき、講義の中で適時、言葉等の補足をもらっている」、「自らの講義に同席いただき、講義終了後、話し方、言葉遣い等のアドバイスをもらっている」、「講義で使用する教材の語彙や文章、自分が使用する語彙などについて、意味説明のアドバイスをもらっている」等、**具体的な指導手法についての内容連携している割合が高い**傾向にあった。

・日本語教員(講師)の資格有無別で見ると、「補助教材を作成する際に、日本語面での確認をしてもらっている」、「留学生の日本語の課題・問題について相談している」等の割合が高い傾向にあった。

問 8:あなたが感じる、日本語を教える教員(講師)との連携についての課題を教えてください。

・既に日本語教員(講師)と連携できている教員(講師)においては、実際に外国人介護人材へ指導をしていくうえでの日本語の教え方、専門用語の伝え方・解説方法等に関する課題が最も多く挙がった。
・一方、所属校の事情等で既に日本語教員(講師)と連携できていない教員(講師)に関しては、連携そのものについての課題や、日本語教員(講師)と交流がないことで、教員(講師)間での日本語教育レベルの認識差がある、等の意見が多く挙がった。

【日本語教員(講師)との連携についての課題】

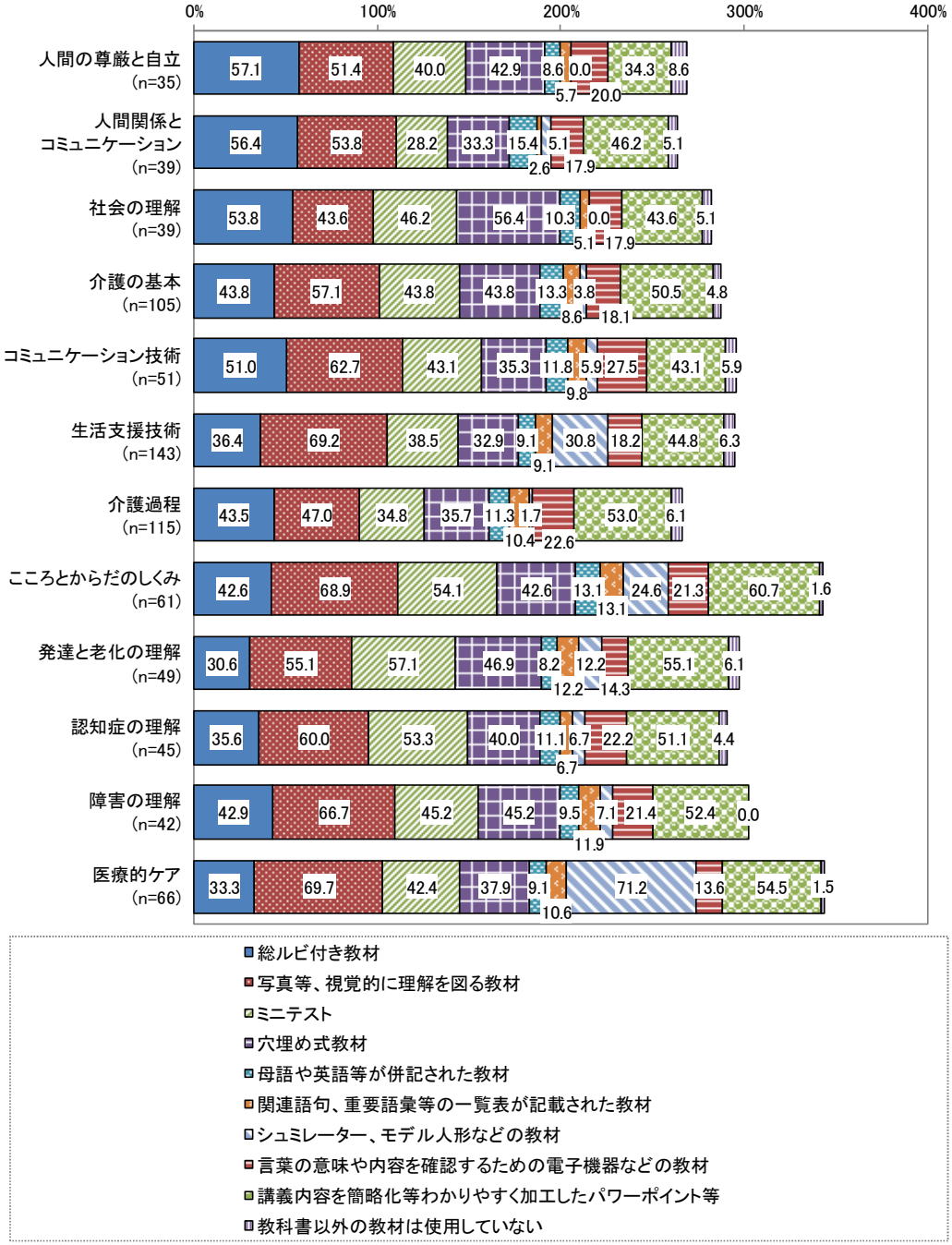
		回答数
日本語を教える教員（講師）と連携できている教員（講師）の課題		計 90
	日本語の教え方に課題がある、専門用語の解説・説明ができない	23
	共有・連携するための時間、環境がない	17
	講師の中で、必要な日本語教育レベルの認識差がある	12
	教育観・専門用語の統一が必要	11
	非常勤講師との連携が難しい	7
	学生の日本語習熟度・文化・習慣差・意欲の共有が難しい	6
	その他	14
日本語を教える教員（講師）と連携できていない教員（講師）の課題		計 113
	日本語教員がいない・不足している、常勤ではない	24
	共有するための時間・環境がない	19
	日本語の教え方に課題がある、専門用語の解説・説明ができない	18
	連携をしていない	16
	講師の中での日本語教育レベルの認識差がある	7
	学生の日本語教育レベルが授業レベルに達していない	7
	学生の日本の常識・ルールの知識が不足	3
	教育観・専門用語の統一が必要	2
	その他	17

(6) 留学生の理解度を高めるために使用している教科書以外の教材種別

問 9:あなたが講義で留学生の理解度を高めるために使用している教科書以外の教材について、担当科目ごとに教えてください。

・「こころとからだのしくみ」、「医療的ケア」については、多種類の教材が多く使用されていた。
・教材については、いずれの科目でも「講義内容を簡略化等わかりやすく加工したパワーポイント等」が活用されているが、「医療的ケア」で「シュミレーター、モデル人形などの教材」(71.2%)、「医療的ケア」「生活支援技術」「こころとからだのしくみ」で「写真等、視覚的に理解を図る教材」を使用するが 7 割弱と、その他の科目に比べて高い割合となった。

＜講義で留学生の理解度を高めるために使用している教科書以外の教材種別＞



● 人間の尊厳と自立

		調査数	総ルビ付き教材	写真等、視覚的に理解を図る教材	ミニテスト	穴埋め式教材	母語や英語等が併記された教材	関連語句、重要語彙等の一覧表が記載された教材	シュミレーター、モデル人形などの教材	言葉の意味や内容を確認するための電子機器などの教材	講義内容を簡略化等わかりやすく加工したパワーポイント等	教科書以外の教材は使用していない	無回答
	全体	35	57.1	51.4	40.0	42.9	8.6	5.7	0.0	20.0	34.3	8.6	5.7
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	5	60.0	40.0	60.0	60.0	20.0	40.0	0.0	40.0	40.0	0.0	0.0
	1 年以上3 年未満	7	71.4	57.1	42.9	28.6	0.0	0.0	0.0	28.6	71.4	28.6	0.0
	3 年以上5 年未満	8	50.0	62.5	37.5	37.5	12.5	0.0	0.0	12.5	25.0	12.5	0.0
	5 年以上	15	53.3	46.7	33.3	46.7	6.7	0.0	0.0	13.3	20.0	0.0	13.3

● 人間関係とコミュニケーション

		調査数	総ルビ付き教材	写真等、視覚的に理解を図る教材	ミニテスト	穴埋め式教材	母語や英語等が併記された教材	関連語句、重要語彙等の一覧表が記載された教材	シュミレーター、モデル人形などの教材	言葉の意味や内容を確認するための電子機器などの教材	講義内容を簡略化等わかりやすく加工したパワーポイント等	教科書以外の教材は使用していない	無回答
	全体	39	56.4	53.8	28.2	33.3	15.4	2.6	5.1	17.9	46.2	5.1	5.1
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	3	33.3	33.3	33.3	0.0	0.0	33.3	0.0	0.0	33.3	0.0	0.0
	1 年以上3 年未満	4	75.0	50.0	50.0	50.0	25.0	0.0	0.0	25.0	50.0	25.0	0.0
	3 年以上5 年未満	20	55.0	55.0	25.0	25.0	20.0	0.0	10.0	25.0	45.0	5.0	5.0
	5 年以上	12	58.3	58.3	25.0	50.0	8.3	0.0	0.0	8.3	50.0	0.0	8.3

● 社会の理解

		調査数	総ルビ付き教材	写真等、視覚的に理解を図る教材	ミニテスト	穴埋め式教材	母語や英語等が併記された教材	関連語句、重要語彙等の一覧表が記載された教材	シュミレーター、モデル人形などの教材	言葉の意味や内容を確認するための電子機器などの教材	講義内容を簡略化等わかりやすく加工したパワーポイント等	教科書以外の教材は使用していない	無回答
	全体	39	53.8	43.6	46.2	56.4	10.3	5.1	0.0	17.9	43.6	5.1	5.1
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	3	33.3	33.3	66.7	66.7	0.0	33.3	0.0	33.3	33.3	0.0	0.0
	1 年以上3 年未満	9	55.6	44.4	66.7	55.6	0.0	11.1	0.0	11.1	55.6	11.1	0.0
	3 年以上5 年未満	16	56.3	50.0	25.0	37.5	12.5	0.0	0.0	18.8	56.3	6.3	6.3
	5 年以上	11	54.5	36.4	54.5	81.8	18.2	0.0	0.0	18.2	18.2	0.0	9.1

● 介護の基本

		調査数	総ルビ付き教材	写真等、視覚的に理解を図る教材	ミニテスト	穴埋め式教材	母語や英語等が併記された教材	関連語句、重要語彙等の一覧表が記載された教材	シュミレーター、モデル人形などの教材	言葉の意味や内容を確認するための電子機器などの教材	講義内容を簡略化等わかりやすく加工したパワーポイント等	教科書以外の教材は使用していない	無回答
	全体	105	43.8	57.1	43.8	43.8	13.3	8.6	3.8	18.1	50.5	4.8	5.7
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	13	30.8	46.2	53.8	53.8	15.4	7.7	7.7	15.4	53.8	7.7	0.0
	1 年以上3 年未満	15	46.7	46.7	46.7	60.0	13.3	6.7	6.7	6.7	33.3	6.7	0.0
	3 年以上5 年未満	44	47.7	61.4	45.5	45.5	15.9	6.8	4.5	20.5	52.3	2.3	11.4
	5 年以上	33	42.4	60.6	36.4	30.3	9.1	12.1	0.0	21.2	54.5	6.1	3.0

● コミュニケーション技術

		調査数	総ルビ付き教材	写真等、視覚的に理解を図る教材	ミニテスト	穴埋め式教材	母語や英語等が併記された教材	関連語句、重要語彙等の一覧表が記載された教材	シュミレーター、モデル人形などの教材	言葉の意味や内容を確認するための電子機器などの教材	講義内容を簡略化等わかりやすく加工したパワーポイント等	教科書以外の教材は使用していない	無回答
	全体	51	51.0	62.7	43.1	35.3	11.8	9.8	5.9	27.5	43.1	5.9	3.9
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	5	60.0	60.0	0.0	20.0	0.0	40.0	0.0	0.0	60.0	0.0	0.0
	1 年以上3 年未満	8	12.5	62.5	50.0	12.5	0.0	0.0	12.5	0.0	25.0	25.0	12.5
	3 年以上5 年未満	23	60.9	60.9	56.5	39.1	17.4	13.0	8.7	30.4	39.1	4.3	0.0
	5 年以上	15	53.3	66.7	33.3	46.7	13.3	0.0	0.0	46.7	53.3	0.0	6.7

● 生活支援技術

		調査数	総ルビ付き教材	写真等、視覚的に理解を図る教材	ミニテスト	穴埋め式教材	母語や英語等が併記された教材	関連語句、重要語彙等の一覧表が記載された教材	シュミレーター、モデル人形などの教材	言葉の意味や内容を確認するための電子機器などの教材	講義内容を簡略化等わかりやすく加工したパワーポイント等	教科書以外の教材は使用していない	無回答
	全体	143	36.4	69.2	38.5	32.9	9.1	9.1	30.8	18.2	44.8	6.3	9.1
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	16	43.8	68.8	31.3	62.5	6.3	12.5	18.8	12.5	43.8	0.0	6.3
	1 年以上3 年未満	29	34.5	65.5	37.9	41.4	3.4	10.3	24.1	17.2	37.9	10.3	6.9
	3 年以上5 年未満	56	39.3	66.1	39.3	25.0	10.7	7.1	44.6	19.6	42.9	3.6	16.1
	5 年以上	42	31.0	76.2	40.5	26.2	11.9	9.5	21.4	19.0	52.4	9.5	2.4

● 介護過程

		調査数	総ルビ付き教材	写真等、視覚的に理解を図る教材	ミニテスト	穴埋め式教材	母語や英語等が併記された教材	関連語句、重要語彙等の一覧表が記載された教材	シュミレーター、モデル人形などの教材	言葉の意味や内容を確認するための電子機器などの教材	講義内容を簡略化等わかりやすく加工したパワーポイント等	教科書以外の教材は使用していない	無回答
	全体	115	43.5	47.0	34.8	35.7	11.3	10.4	1.7	22.6	53.0	6.1	6.1
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	11	27.3	36.4	45.5	54.5	18.2	9.1	9.1	27.3	45.5	9.1	0.0
	1 年以上3 年未満	20	40.0	55.0	30.0	35.0	0.0	15.0	0.0	20.0	55.0	10.0	0.0
	3 年以上5 年未満	50	48.0	44.0	38.0	38.0	12.0	8.0	2.0	18.0	54.0	4.0	10.0
	5 年以上	34	44.1	50.0	29.4	26.5	14.7	11.8	0.0	29.4	52.9	5.9	5.9

● こころとからだのしくみ

		調査数	総ルビ付き教材	写真等、視覚的に理解を図る教材	ミニテスト	穴埋め式教材	母語や英語等が併記された教材	関連語句、重要語彙等の一覧表が記載された教材	シュミレーター、モデル人形などの教材	言葉の意味や内容を確認するための電子機器などの教材	講義内容を簡略化等わかりやすく加工したパワーポイント等	教科書以外の教材は使用していない	無回答
	全体	61	42.6	68.9	54.1	42.6	13.1	13.1	24.6	21.3	60.7	1.6	3.3
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	4	50.0	50.0	25.0	25.0	0.0	50.0	0.0	0.0	25.0	0.0	25.0
	1 年以上3 年未満	18	55.6	77.8	83.3	55.6	5.6	5.6	27.8	27.8	72.2	0.0	0.0
	3 年以上5 年未満	23	34.8	73.9	56.5	52.2	21.7	8.7	30.4	21.7	60.9	4.3	0.0
	5 年以上	16	37.5	56.3	25.0	18.8	12.5	18.8	18.8	18.8	56.3	0.0	6.3

● 発達と老化の理解

		調査数	総ルビ付き教材	写真等、視覚的に理解を図る教材	ミニテスト	穴埋め式教材	母語や英語等が併記された教材	関連語句、重要語彙等の一覧表が記載された教材	シュミレーター、モデル人形などの教材	言葉の意味や内容を確認するための電子機器などの教材	講義内容を簡略化等わかりやすく加工したパワーポイント等	教科書以外の教材は使用していない	無回答
	全体	49	30.6	55.1	57.1	46.9	8.2	12.2	12.2	14.3	55.1	6.1	4.1
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	5	60.0	40.0	0.0	40.0	0.0	40.0	20.0	0.0	40.0	0.0	20.0
	1 年以上3 年未満	14	21.4	64.3	71.4	50.0	7.1	21.4	14.3	21.4	57.1	0.0	7.1
	3 年以上5 年未満	21	28.6	66.7	71.4	52.4	9.5	0.0	14.3	14.3	61.9	14.3	0.0
	5 年以上	9	33.3	22.2	33.3	33.3	11.1	11.1	0.0	11.1	44.4	0.0	0.0

● 認知症の理解

		調査数	総ルビ付き教材	写真等、視覚的に理解を図る教材	ミニテスト	穴埋め式教材	母語や英語等が併記された教材	関連語句、重要語彙等の一覧表が記載された教材	シュミレーター、モデル人形などの教材	言葉の意味や内容を確認するための電子機器などの教材	講義内容を簡略化等わかりやすく加工したパワーポイント等	教科書以外の教材は使用していない	無回答
	全体	45	35.6	60.0	53.3	40.0	11.1	6.7	6.7	22.2	51.1	4.4	8.9
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	6	0.0	50.0	33.3	33.3	0.0	0.0	0.0	33.3	66.7	0.0	0.0
	1 年以上3 年未満	11	45.5	81.8	72.7	54.5	0.0	0.0	18.2	18.2	63.6	0.0	9.1
	3 年以上5 年未満	19	42.1	57.9	52.6	36.8	15.8	5.3	5.3	21.1	47.4	10.5	15.8
	5 年以上	9	33.3	44.4	44.4	33.3	22.2	22.2	0.0	22.2	33.3	0.0	0.0

● 障害の理解

		調査数	総ルビ付き教材	写真等、視覚的に理解を図る教材	ミニテスト	穴埋め式教材	母語や英語等が併記された教材	関連語句、重要語彙等の一覧表が記載された教材	シュミレーター、モデル人形などの教材	言葉の意味や内容を確認するための電子機器などの教材	講義内容を簡略化等わかりやすく加工したパワーポイント等	教科書以外の教材は使用していない	無回答
	全体	42	42.9	66.7	45.2	45.2	9.5	11.9	7.1	21.4	52.4	0.0	4.8
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	3	33.3	33.3	0.0	0.0	0.0	33.3	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3
	1 年以上3 年未満	9	55.6	55.6	77.8	77.8	11.1	22.2	22.2	11.1	77.8	0.0	0.0
	3 年以上5 年未満	18	38.9	72.2	50.0	38.9	5.6	0.0	5.6	33.3	55.6	0.0	5.6
	5 年以上	12	41.7	75.0	25.0	41.7	16.7	16.7	0.0	16.7	41.7	0.0	0.0

● 医療的ケア

		調査数	総ルビ付き教材	写真等、視覚的に理解を図る教材	ミニテスト	穴埋め式教材	母語や英語等が併記された教材	関連語句、重要語彙等の一覧表が記載された教材	シュミレーター、モデル人形などの教材	言葉の意味や内容を確認するための電子機器などの教材	講義内容を簡略化等わかりやすく加工したパワーポイント等	教科書以外の教材は使用していない	無回答
	全体	66	33.3	69.7	42.4	37.9	9.1	10.6	71.2	13.6	54.5	1.5	4.5
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	6	16.7	50.0	16.7	16.7	0.0	16.7	66.7	0.0	33.3	0.0	16.7
	1 年以上3 年未満	16	37.5	68.8	62.5	62.5	6.3	12.5	68.8	18.8	56.3	0.0	0.0
	3 年以上5 年未満	26	34.6	80.8	50.0	42.3	11.5	7.7	69.2	11.5	57.7	3.8	3.8
	5 年以上	18	33.3	61.1	22.2	16.7	11.1	11.1	77.8	16.7	55.6	0.0	5.6

・外国人介護人材を指導した経験年数別に見ると、指導経験が長い教員(講師)の傾向は科目によって異なっており、以下の傾向が見られた。

- 人間の尊厳と自立
- 「人間関係とコミュニケーション」、「社会の理解」、「コミュニケーション技術」で、「穴埋め式教材」を活用している割合が高い。
- 「コミュニケーション技術」、「介護過程」で、「言葉の意味や内容を確認するための電子機器などの教材」を活用している割合が高い。
- 「社会の理解」、「認知症の理解」で、「母語や英語等が併記された教材」を活用している割合が高い。
- 「こころとからだのしくみ」、「認知症の理解」で、「関連語句、重要語彙等の一覧表が記載された教材」を活用している割合が高い。
- 「医療的ケア」で、「シュミレーター、モデル人形などの教材」を活用している割合が高い。

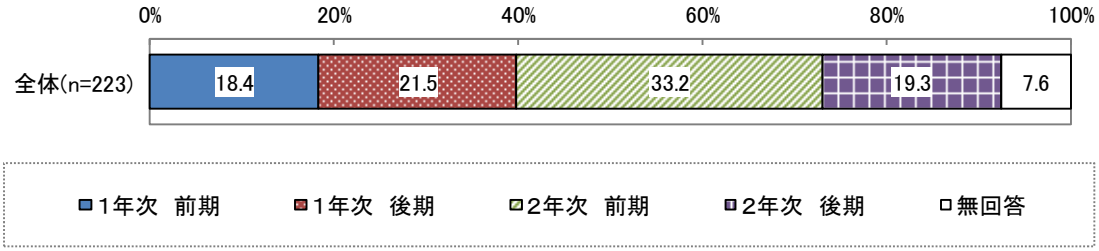
(7) 国家試験対策

問 10:あなたが、国家試験対策について、ご自身の担当科目の開講後どの時期から行っているか教えてください。また、それぞれの時期ごとに、授業で国家試験対策として行っている取組について教えてください。

・2 年制の養成校(専門学校、短期大学)の国試対策開始時期は、「2 年次　前期」が 33.2%と最も高く、次いで「1 年次　後期」が 21.5%、「2 年次　後期」が 19.3%であった。
・3 年制の養成校(専門学校、短期大学)の国試対策開始時期は、「3 年次　後期」が 50.0%と最も高く、次いで「3 年次　前期」が 33.3%、「2 年次　後期」が 16.7%であった。
・4 年制の養成校の国試対策開始時期は、「3 年次　後期」が 42.1%と最も高く、次いで「4 年次　前期」と「4 年次　後期」が 15.8%であった。
・いずれも、最終年度とその前年からの開始が多い。

● 2年制の養成校(専門学校、短期大学)

＜国試対応時期(全科目共通)＞

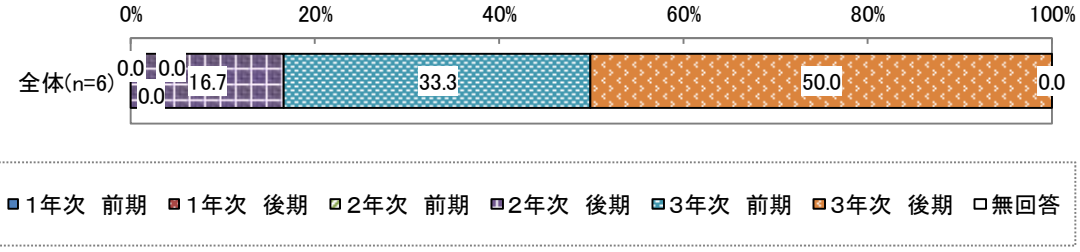


＜国試対応時期(科目別)＞

	調査数	1年次　前期	1年次　後期	2年次　前期	2年次　後期	無回答
全体	223	18.4	21.5	33.2	19.3	7.6
人間の尊厳と自立	6	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0
人間関係とコミュニケーション	6	0.0	16.7	0.0	83.3	0.0
社会の理解	19	15.8	5.3	42.1	36.8	0.0
介護の基本	28	21.4	32.1	35.7	10.7	0.0
コミュニケーション技術	8	37.5	25.0	12.5	25.0	0.0
生活支援技術	46	26.1	26.1	37.0	10.9	0.0
介護過程	32	12.5	25.0	43.8	18.8	0.0
こころとからだのしくみ	32	25.0	25.0	34.4	15.6	0.0
発達と老化の理解	4	0.0	0.0	25.0	75.0	0.0
認知症の理解	9	11.1	33.3	22.2	33.3	0.0
障害の理解	3	33.3	33.3	33.3	0.0	0.0
医療的ケア	13	0.0	23.1	46.2	30.8	0.0

● 3年制の養成校(専門学校、短期大学)

＜国試対応時期(全科目共通)＞

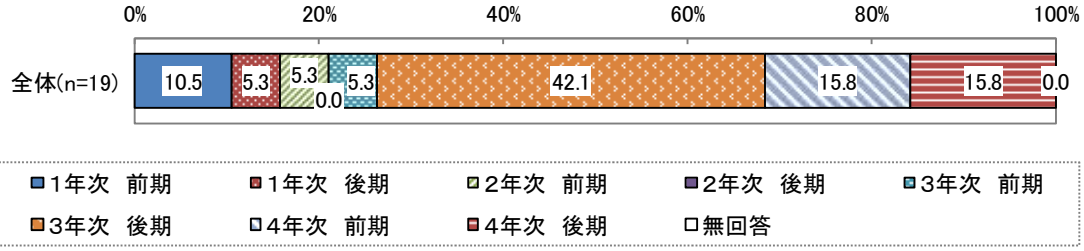


＜国試対応時期(科目別)＞

	調査数	1年次 前期	1年次 後期	2年次 前期	2年次 後期	3年次 前期	3年次 後期	無回答
全体	6	0.0	0.0	0.0	16.7	33.3	50.0	0.0
人間の尊厳と自立	1	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
人間関係とコミュニケーション	−	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
社会の理解	1	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0
介護の基本	−	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
コミュニケーション技術	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0
生活支援技術	−	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
介護過程	−	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
こころとからだのしくみ	1	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0
発達と老化の理解	−	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
認知症の理解	−	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
障害の理解	−	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
医療的ケア	2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0

● 4年制の養成校(大学)

＜国試対応時期(全科目共通)＞



＜国試対応時期(科目別)＞

	調査数	1年次 前期	1年次 後期	2年次 前期	2年次 後期	3年次 前期	3年次 後期	4年次 前期	4年次 後期	無回答
全体	19	10.5	5.3	5.3	0.0	5.3	42.1	15.8	15.8	0.0
人間の尊厳と自立	2	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0
人間関係とコミュニケーション	−	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
社会の理解	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0
介護の基本	2	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0
コミュニケーション技術	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
生活支援技術	3	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3	0.0	33.3	33.3	0.0
介護過程	4	0.0	25.0	25.0	0.0	0.0	0.0	25.0	25.0	0.0
こころとからだのしくみ	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
発達と老化の理解	2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0	0.0	50.0	0.0
認知症の理解	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
障害の理解	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
医療的ケア	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0

問 10.3:それぞれの時期ごとに、授業で国家試験対策として行っている取組について教えてください。

・国家試験対策として行う項目については、特定の科目ごとの傾向は見られなかったが、過去問・類似問題等、試験の形式に沿った対策に関する意見が多く挙がった。

【国試対策として行っている取組】

		回答数
授業で国家試験対策として行っている取組		計　302
	過去問・類似問題に挑戦・解説	134
	模擬試験作成・受験・解説	45
	小テスト	27
	補講・個別授業	24
	試験対策講座開講	22
	日本語授業、日本語表現の確認	15
	一問一答（○×形式）	8
	特定の科目・特定の内容の振り返り	8
	その他	19

(8) 留学生の理解度を高める課題と工夫

問 11:あなたが、留学生の理解度を高めることを目的として宿題や課題を出している場合、その内容と、あなたが宿題や課題を作成する際に行っている工夫を教えてください。

・宿題や課題については、日本人と同様であるとの意見が多く挙がったものの、具体的には、理解度に合わせた課題設定が行われていることがうかがえた。
・留学生に対しての対応としては、ルビふりや年次に合わせた対応等、日本語レベルや理解度に合わせた対応を行っている意見が多く挙げられた。

【宿題や課題の内容】

		回答数
宿題や課題の具体的内容について		計 119
	ルビをふる	35
	わかりやすい言葉を用いる、担当する学生の年次に合わせた言葉を用いる	23
	日本語力を上げる課題にする（記述式にする等）	11
	視覚に訴える教材を使う（イラストを入れる・色を使う等）	8
	課題・問題のポイントが理解できるようする	7
	出来そうな問題にする、教科書を見ればわかる設問にする	6
	具体的例を提示する	6
	短時間で取り組める量にする	5
	自身で考えさせる・調べさせる問題とする、自身で解答の解説をさせる、読解力・説明力が上がる内容とする	5
	穴埋め問題にする	4
	課題の見栄えに気を付ける（文字を大きくする、記述欄を大きくする等）	5
	試験の頻出の傾向の高い内容にする	4
宿題や課題の出し方について		計 40
	日本人学生と同様である、留学生に特別なことはしていない	24
	宿題・課題は出さない	11
	個別に対応する、その人のレベルに合わせた内容にする	5
その他		計 53
	宿題・課題をチェックする、理解度に合わせて対応する	12
	期日を明確にする	4
	その他	37

【宿題や課題を作成する際に行っている工夫】

		回答数
出し方について		計 40
	日本人学生と同様である、留学生に特別なことはしていない	24
	宿題・課題は出さない	11
	個別に対応する、その人のレベルに合わせた内容にする	5
具体的な工夫について		計 119
	ルビをふる	35
	わかりやすい言葉を用いる、担当する学生の年次に合わせた言葉を用いる	23
	日本語力を上げる課題にする（記述式にする等）	11
	視覚に訴える教材を使う（イラストを入れる・色を使う等）	8
	課題・問題のポイントが理解できるようする	7
	出来そうな問題にする、教科書を見ればわかる設問にする	6
	具体的例を提示する	6
	短時間で取り組める量にする	5
	自身で考えさせる・調べさせる問題とする、自身で解答の解説をさせる、読解力・説明力が上がる内容とする	5
	穴埋め問題にする	4
	課題の見栄えに気を付ける（文字を大きくする、記述欄を大きくする等）	5
	試験の頻出の傾向の高い内容にする	4
その他		計 53
	宿題・課題をチェックする、理解度に合わせて対応する	12
	期日を明確にする	4
	その他	37

(9) 留学生の自己学習に対する指導

問 12:あなたが、留学生が行う自己学習に対し、どのような指導を行っているかについて教えてください。

・指導内容については、大きく、学び方に関する指導、理解度に合わせた指導、指導環境の整備の 3 種の意見が挙がった。
・学び方に関する指導に関しては、介護学習においての調べ方・覚え方に対する事柄や、日本語の学び方等に関する、学びを行うための指導を行っているといった意見が多く挙がった。
・理解度に合わせた指導については、面談や個別指導を通しての理解度の確認、留学生がどのような部分で学びを深められていないかを把握したうえでの指導等の意見が挙がった。
・指導環境の整備については自習のための教室開放、コミュニケーションの機会を設けるなどの意見が挙がった。

【留学生の自己学習についての指導内容】

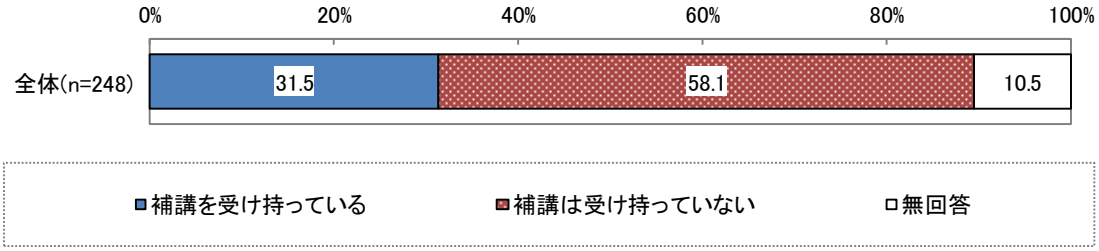
		回答数
学び方に関する指導		計 130
	調べ方・覚え方・勉強の仕方を教える	51
	日本語の学び方に関する指導をする	24
	復習・反復練習をさせる	12
	宿題・課題を出す	9
	学ぶべき内容を具体的に伝える	9
	資料・教材情報を提供する	7
	習慣づけについて指導する	6
	質問に対し回答・解説する	6
	ルール・期限を守るよう指導する	5
	視覚に訴える教材を使う（イラスト・写真等を使う）	1
理解度に合わせた指導		計 72
	学習状況や理解度を確認・アドバイス・フィードバックする	28
	個別面談・個別指導・補講・特別授業を行う	21
	困っていることやわからないことは質問する・聞きに来るよう指導する、質問できる環境を作る	18
	学生のレベルに合わせた内容・量で指導を行う	5
指導環境の整備		計 22
	時間外に教室を開放する、学ぶ環境を作る	6
	コミュニケーションを取る機会を設ける（対学生、対講師）	2
	その他	14
その他		計 23
	日本人学生と同様である、留学生に特別なことはしていない	16
	褒める	2
	その他	5

3. 補講(時間割外)で行っている指導内容　※養成校教員(講師)に該当する方のみ

(1) 現在所属する養成校での補講担当

問 13:あなたが、現在所属する養成校にて、補講を担当されているかについて、教えてください。

・「補講は受け持っていない」が 58.1%、「補講を受け持っている」が 31.5%であった。



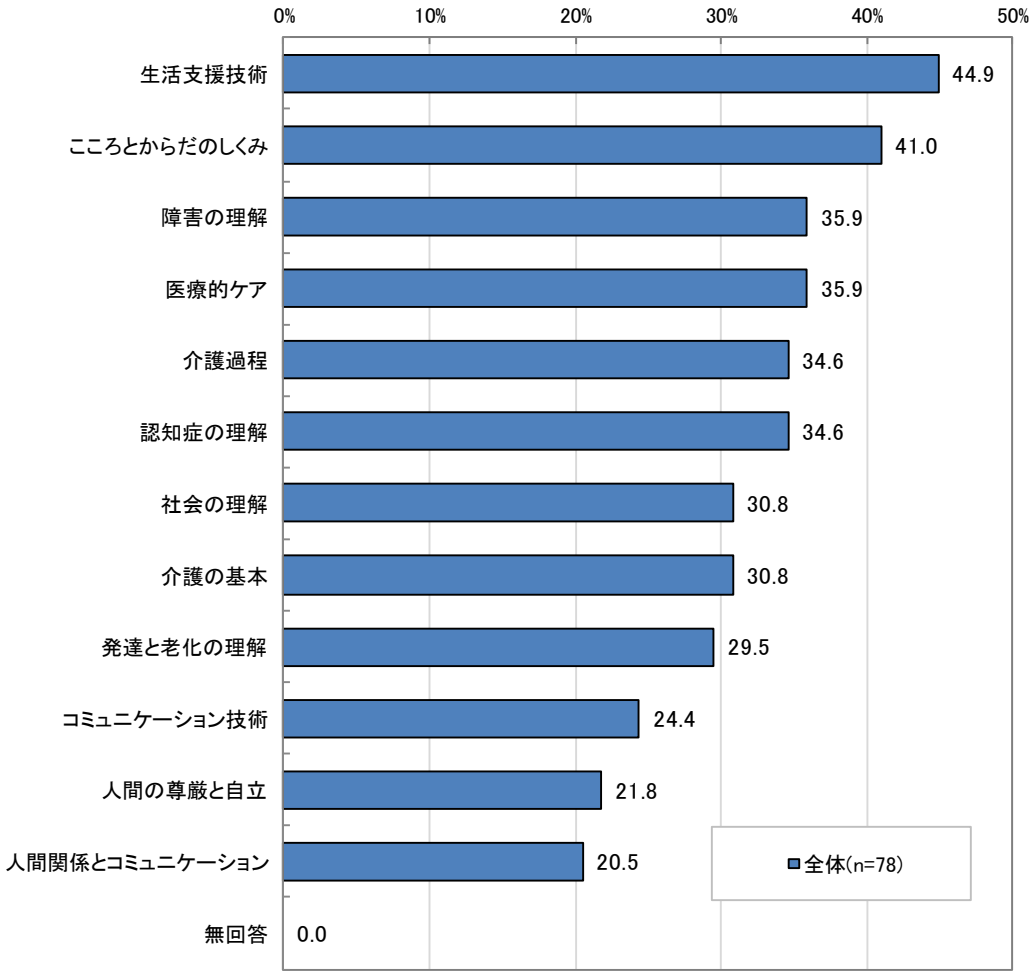
		調査数	補講を受け持っている	補講は受け持っていない	無回答
全体		248	31.5	58.1	10.5
養成校の種類	専門学校	197	33.5	54.8	11.7
	短期大学	32	28.1	65.6	6.3
	4 年制大学	19	15.8	78.9	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	39.6	49.1	11.3
	5 年以上10年未満	64	32.8	53.1	14.1
	10年以上15年未満	42	35.7	57.1	7.1
	15年以上	89	23.6	67.4	9.0
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	21.4	75.0	3.6
	1 年以上3 年未満	52	36.5	51.9	11.5
	3 年以上5 年未満	99	32.3	53.5	14.1
	5 年以上	69	30.4	62.3	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	30.7	61.4	7.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	36.2	51.4	12.4
	上記以外の専任講師	71	28.2	62.0	9.9
	非常勤講師	5	20.0	60.0	20.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	9	33.3	66.7	0.0
	日本語講師の資格なし	239	31.4	57.7	10.9

【問 13 で「1.補講を受け持っている」と回答の方】

問 13-1:あなたが教員(講師)として留学生に教えている補講の科目と、なぜその科目が補講として開講されているかについての理由を教えてください。

・教員(講師)として留学生に教えている補講の科目は、「生活支援技術」が 44.9%と最も高く、次いで「こころとからだのしくみ」が 41.0%、「障害の理解」と「医療的ケア」が 35.9%であった。

＜教員(講師)が担当する補講科目＞

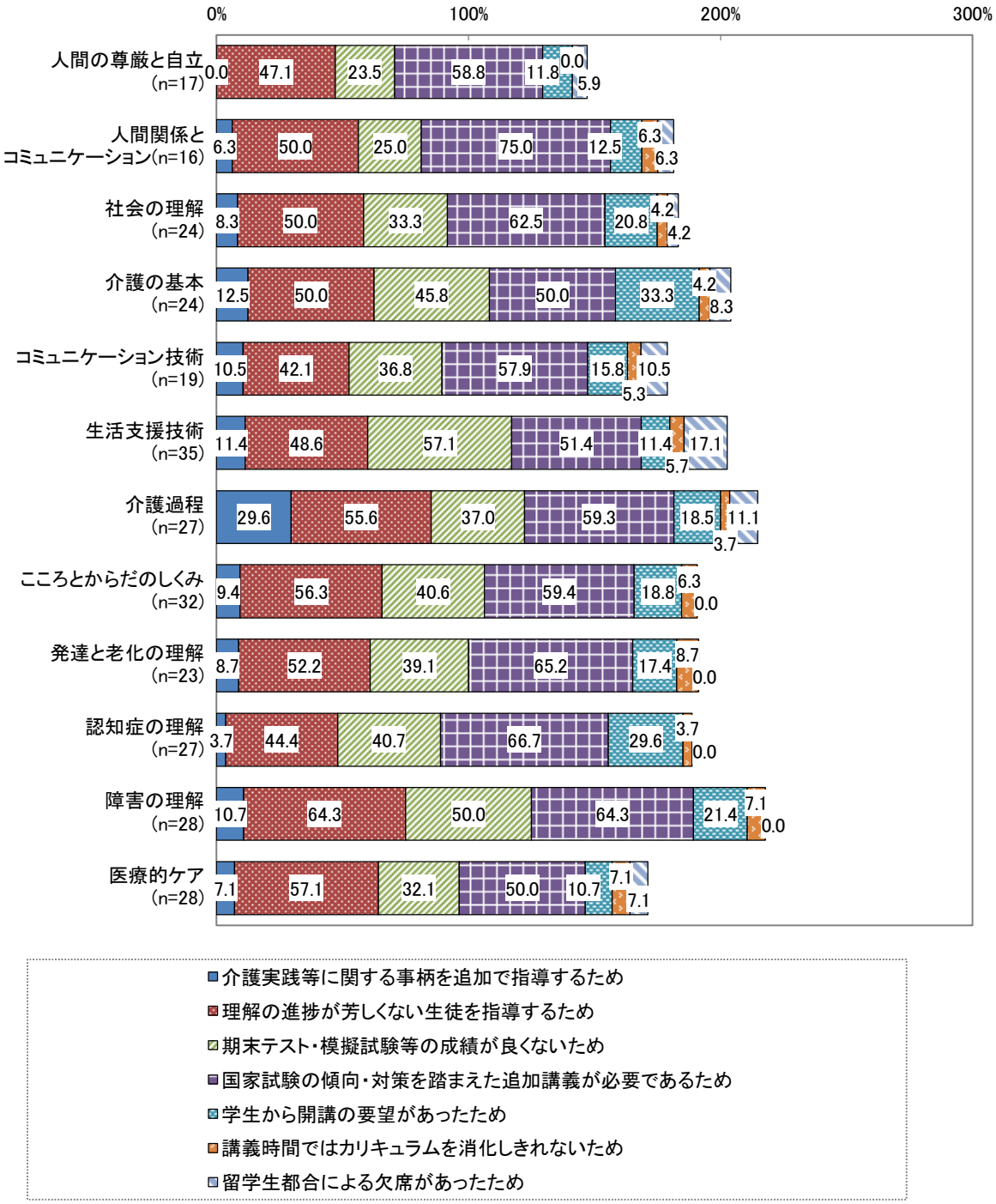


【問 13-1 で「1. 人間の尊厳と自立」と回答の方】

問 13-1.1:なぜその科目が補講として開講されているかについての理由を教えてください。

・補講が開講されている理由としては、いずれの科目も「国家試験の傾向・対策を踏まえた追加講義が必要であるため」が 50%～70%台と他の理由に比べて高い傾向にあった。

・「介護の基本」、「認知症の理解」においては、「学生から開講の要望があったため」の割合が他の科目に比べて高く、いずれも 30%程度であった。



● 人間の尊厳と自立

		調査数	介護実践等に関する事柄を追加で指導するため	理解の進捗が芳しくない生徒を指導するため	期末テスト・模擬試験等の成績が良くないため	国家試験の傾向・対策を踏まえた追加講義が必要であるため	学生から開講の要望があったため	講義時間ではカリキュラムを消化しきれないため	留学生都合による欠席があったため	無回答
	全体	17	0.0	47.1	23.5	58.8	11.8	0.0	5.9	5.9
養成校の種類	専門学校	14	0.0	50.0	21.4	64.3	7.1	0.0	0.0	7.1
	短期大学	2	0.0	0.0	50.0	50.0	50.0	0.0	0.0	0.0
	4 年制大学	1	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0

● 人間関係とコミュニケーション

		調査数	介護実践等に関する事柄を追加で指導するため	理解の進捗が芳しくない生徒を指導するため	期末テスト・模擬試験等の成績が良くないため	国家試験の傾向・対策を踏まえた追加講義が必要であるため	学生から開講の要望があったため	講義時間ではカリキュラムを消化しきれないため	留学生都合による欠席があったため	無回答
	全体	16	6.3	50.0	25.0	75.0	12.5	6.3	6.3	6.3
養成校の種類	専門学校	14	0.0	42.9	28.6	78.6	7.1	7.1	0.0	7.1
	短期大学	1	100.0	100.0	0.0	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0
	4 年制大学	1	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0

● 社会の理解

		調査数	介護実践等に関する事柄を追加で指導するため	理解の進捗が芳しくない生徒を指導するため	期末テスト・模擬試験等の成績が良くないため	国家試験の傾向・対策を踏まえた追加講義が必要であるため	学生から開講の要望があったため	講義時間ではカリキュラムを消化しきれないため	留学生都合による欠席があったため	無回答
	全体	24	8.3	50.0	33.3	62.5	20.8	4.2	4.2	4.2
養成校の種類	専門学校	19	5.3	52.6	36.8	63.2	10.5	5.3	0.0	5.3
	短期大学	4	25.0	25.0	25.0	75.0	75.0	0.0	0.0	0.0
	4 年制大学	1	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0

● 介護の基本

		調査数	介護実践等に関する事柄を追加で指導するため	理解の進捗が芳しくない生徒を指導するため	期末テスト・模擬試験等の成績が良くないため	国家試験の傾向・対策を踏まえた追加講義が必要であるため	学生から開講の要望があったため	講義時間ではカリキュラムを消化しきれないため	留学生都合による欠席があったため	無回答
	全体	24	12.5	50.0	45.8	50.0	33.3	4.2	8.3	4.2
養成校の種類	専門学校	19	5.3	47.4	52.6	52.6	21.1	5.3	5.3	5.3
	短期大学	4	50.0	50.0	25.0	50.0	100.0	0.0	0.0	0.0
	4 年制大学	1	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0

● コミュニケーション技術

		調査数	介護実践等に関する事柄を追加で指導するため	理解の進捗が芳しくない生徒を指導するため	期末テスト・模擬試験等の成績が良くないため	国家試験の傾向・対策を踏まえた追加講義が必要であるため	学生から開講の要望があったため	講義時間ではカリキュラムを消化しきれないため	留学生都合による欠席があったため	無回答
	全体	19	10.5	42.1	36.8	57.9	15.8	5.3	10.5	5.3
養成校の種類	専門学校	17	5.9	41.2	41.2	64.7	11.8	5.9	5.9	5.9
	短期大学	1	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
	4 年制大学	1	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0

● 生活支援技術

		調査数	介護実践等に関する事柄を追加で指導するため	理解の進捗が芳しくない生徒を指導するため	期末テスト・模擬試験等の成績が良くないため	国家試験の傾向・対策を踏まえた追加講義が必要であるため	学生から開講の要望があったため	講義時間ではカリキュラムを消化しきれないため	留学生都合による欠席があったため	無回答
	全体	35	11.4	48.6	57.1	51.4	11.4	5.7	17.1	2.9
養成校の種類	専門学校	34	11.8	50.0	55.9	52.9	8.8	5.9	17.6	2.9
	短期大学	1	0.0	0.0	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
	4 年制大学	-	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

● 介護過程

		調査数	介護実践等に関する事柄を追加で指導するため	理解の進捗が芳しくない生徒を指導するため	期末テスト・模擬試験等の成績が良くないため	国家試験の傾向・対策を踏まえた追加講義が必要であるため	学生から開講の要望があったため	講義時間ではカリキュラムを消化しきれないため	留学生都合による欠席があったため	無回答
	全体	27	29.6	55.6	37.0	59.3	18.5	3.7	11.1	3.7
養成校の種類	専門学校	23	17.4	52.2	43.5	56.5	13.0	4.3	13.0	4.3
	短期大学	4	100.0	75.0	0.0	75.0	50.0	0.0	0.0	0.0
	4 年制大学	-	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

● こころとからだのしくみ

		調査数	介護実践等に関する事柄を追加で指導するため	理解の進捗が芳しくない生徒を指導するため	期末テスト・模擬試験等の成績が良くないため	国家試験の傾向・対策を踏まえた追加講義が必要であるため	学生から開講の要望があったため	講義時間ではカリキュラムを消化しきれないため	留学生都合による欠席があったため	無回答
	全体	32	9.4	56.3	40.6	59.4	18.8	6.3	0.0	3.1
養成校の種類	専門学校	27	7.4	55.6	40.7	63.0	18.5	7.4	0.0	3.7
	短期大学	4	25.0	75.0	50.0	25.0	25.0	0.0	0.0	0.0
	4 年制大学	1	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0

● 発達と老化の理解

		調査数	介護実践等に関する事柄を追加で指導するため	理解の進捗が芳しくない生徒を指導するため	期末テスト・模擬試験等の成績が良くないため	国家試験の傾向・対策を踏まえた追加講義が必要であるため	学生から開講の要望があったため	講義時間ではカリキュラムを消化しきれないため	留学生都合による欠席があったため	無回答
	全体	23	8.7	52.2	39.1	65.2	17.4	8.7	0.0	4.3
養成校の種類	専門学校	21	9.5	52.4	33.3	66.7	14.3	9.5	0.0	4.8
	短期大学	1	0.0	0.0	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
	4 年制大学	1	0.0	100.0	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0

● 認知症の理解

		調査数	介護実践等に関する事柄を追加で指導するため	理解の進捗が芳しくない生徒を指導するため	期末テスト・模擬試験等の成績が良くないため	国家試験の傾向・対策を踏まえた追加講義が必要であるため	学生から開講の要望があったため	講義時間ではカリキュラムを消化しきれないため	留学生都合による欠席があったため	無回答
	全体	27	3.7	44.4	40.7	66.7	29.6	3.7	0.0	3.7
養成校の種類	専門学校	24	4.2	45.8	37.5	66.7	25.0	4.2	0.0	4.2
	短期大学	3	0.0	33.3	66.7	66.7	66.7	0.0	0.0	0.0
	4 年制大学	-	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

● 障害の理解

		調査数	介護実践等に関する事柄を追加で指導するため	理解の進捗が芳しくない生徒を指導するため	期末テスト・模擬試験等の成績が良くないため	国家試験の傾向・対策を踏まえた追加講義が必要であるため	学生から開講の要望があったため	講義時間ではカリキュラムを消化しきれないため	留学生都合による欠席があったため	無回答
全体		28	10.7	64.3	50.0	64.3	21.4	7.1	0.0	3.6
養成校の種類	専門学校	23	8.7	65.2	43.5	65.2	13.0	8.7	0.0	4.3
	短期大学	4	25.0	50.0	75.0	50.0	75.0	0.0	0.0	0.0
	4 年制大学	1	0.0	100.0	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0

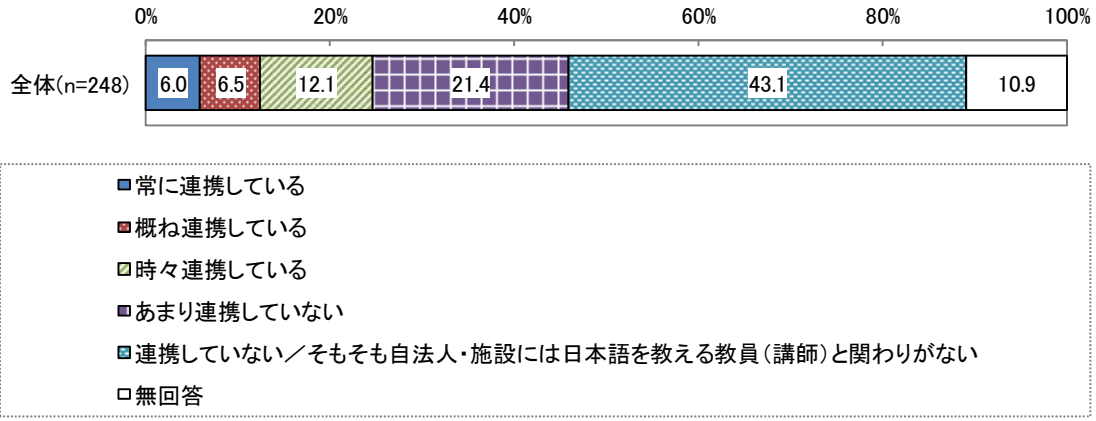
● 医療的ケア

		調査数	介護実践等に関する事柄を追加で指導するため	理解の進捗が芳しくない生徒を指導するため	期末テスト・模擬試験等の成績が良くないため	国家試験の傾向・対策を踏まえた追加講義が必要であるため	学生から開講の要望があったため	講義時間ではカリキュラムを消化しきれないため	留学生都合による欠席があったため	無回答
全体		28	7.1	57.1	32.1	50.0	10.7	7.1	7.1	3.6
養成校の種類	専門学校	25	4.0	52.0	32.0	52.0	12.0	8.0	8.0	4.0
	短期大学	3	33.3	100.0	33.3	33.3	0.0	0.0	0.0	0.0
	4 年制大学	-	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

(2) 日本語教員(講師)と連携について

問 14:あなたが、補講を行う際に、日本語を教える教員(講師)と連携しているかについて教えてください。

・「連携していない／そもそも自法人・施設には日本語を教える教員(講師)と関わりがない」が 43.1%と最も高く、次いで「あまり連携していない」が 21.4%、「時々連携している」が 12.1%であった。



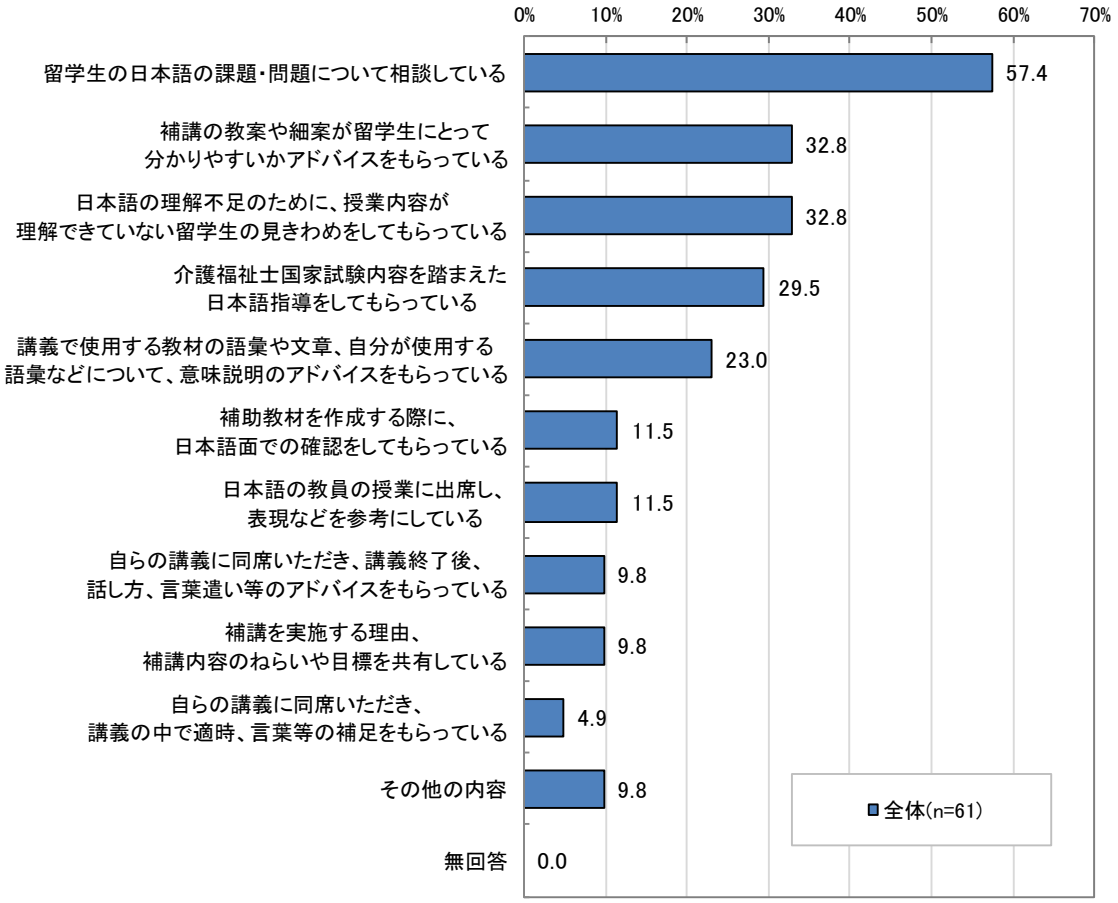
		調査数	常に連携している	概ね連携している	時々連携している	あまり連携していない	連携していない／そもそも自法人・施設には日本語を教える教員(講師)と関わりがない	無回答
全体		248	6.0	6.5	12.1	21.4	43.1	10.9
養成校の種類	専門学校	197	6.1	7.1	13.7	21.3	39.6	12.2
	短期大学	32	6.3	3.1	9.4	18.8	56.3	6.3
	4 年制大学	19	5.3	5.3	0.0	26.3	57.9	5.3

・養成校の種類別に見ると、「短期大学」、「4 年制大学」の場合、連携していない割合が高かった。

【問 14 で「1. 常に連携している」「2.概ね連携している」「3.時々連携している」と回答の方】

問 14-1:あなたが、日本語を教える教員(講師)と補講等でどのように連携しているかについて教えてください。

・「留学生の日本語の課題・問題について相談している」が 57.4%と最も高く、次いで「補講の教案や細案が留学生にとって分かりやすいかアドバイスをもらっている」と「日本語の理解不足のために、授業内容が理解できていない留学生の見きわめをしてもらっている」が 32.8%であった。



		調査数	自らの講義に同席いただき、講義の中で適時、言葉等の補足をもらっている	自らの講義に同席いただき、講義終了後、話し方、言葉遣い等のアドバイスをもらっている	講義で使用する教材の語彙や文章、自分が使用する語彙などについて、意味説明のアドバイスをもらっている	補助教材を作成する際に、日本語面での確認をしてもらっている	補講の教案や細案が留学生にとって分かりやすいかアドバイスをもらっている	留学生の日本語の課題・問題について相談している	補講を実施する理由、補講内容のねらいや目標を共有している	介護福祉士国家試験内容を踏まえた日本語指導をしてもらっている	日本語の教員の授業に出席し、表現などを参考にしている	日本語の理解不足のために、授業内容が理解できていない留学生の見きわめをしてもらっている	その他の内容	無回答
全体		61	4.9	9.8	23.0	11.5	32.8	57.4	9.8	29.5	11.5	32.8	9.8	0.0
養成校教員経験年数	5 年未満	12	0.0	0.0	16.7	8.3	41.7	58.3	0.0	16.7	25.0	33.3	16.7	0.0
	5 年以上10年未満	16	6.3	6.3	18.8	18.8	31.3	75.0	6.3	25.0	0.0	25.0	6.3	0.0
	10年以上15年未満	9	0.0	22.2	22.2	11.1	11.1	22.2	11.1	33.3	0.0	55.6	22.2	0.0
	15年以上	24	8.3	12.5	29.2	8.3	37.5	58.3	16.7	37.5	16.7	29.2	4.2	0.0
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	7	0.0	0.0	28.6	28.6	28.6	71.4	14.3	57.1	0.0	57.1	0.0	0.0
	1 年以上3 年未満	11	9.1	0.0	18.2	9.1	36.4	63.6	9.1	18.2	9.1	18.2	9.1	0.0
	3 年以上5 年未満	26	3.8	11.5	26.9	3.8	30.8	53.8	11.5	30.8	11.5	30.8	11.5	0.0
	5 年以上	17	5.9	17.6	17.6	17.6	35.3	52.9	5.9	23.5	17.6	35.3	11.8	0.0
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	29	6.9	6.9	17.2	10.3	37.9	55.2	13.8	37.9	3.4	37.9	10.3	0.0
	専任講師　かつ　領域責任者	24	4.2	12.5	12.5	4.2	37.5	58.3	12.5	33.3	4.2	29.2	8.3	0.0
	上記以外の専任講師	14	7.1	14.3	28.6	14.3	21.4	71.4	7.1	28.6	28.6	35.7	14.3	0.0
	非常勤講師	3	0.0	0.0	66.7	33.3	0.0	66.7	0.0	0.0	33.3	0.0	0.0	0.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	4	0.0	0.0	25.0	25.0	0.0	25.0	0.0	0.0	25.0	25.0	25.0	0.0
	日本語講師の資格なし	57	5.3	10.5	22.8	10.5	35.1	59.6	10.5	31.6	10.5	33.3	8.8	0.0

・外国人介護人材を指導した経験年数別に見ると、指導経験が長い教員(講師)の方が、短い教員(講師)より、「自らの講義に同席いただき、講義終了後、話し方、言葉遣い等のアドバイスをもらっている」、「日本語教員(講師)の授業に出席し、表現などを参考にしている」等、**具体的な指導手法について連携している割合が高い**傾向にあった。

4. 外国人介護人材の指導全般

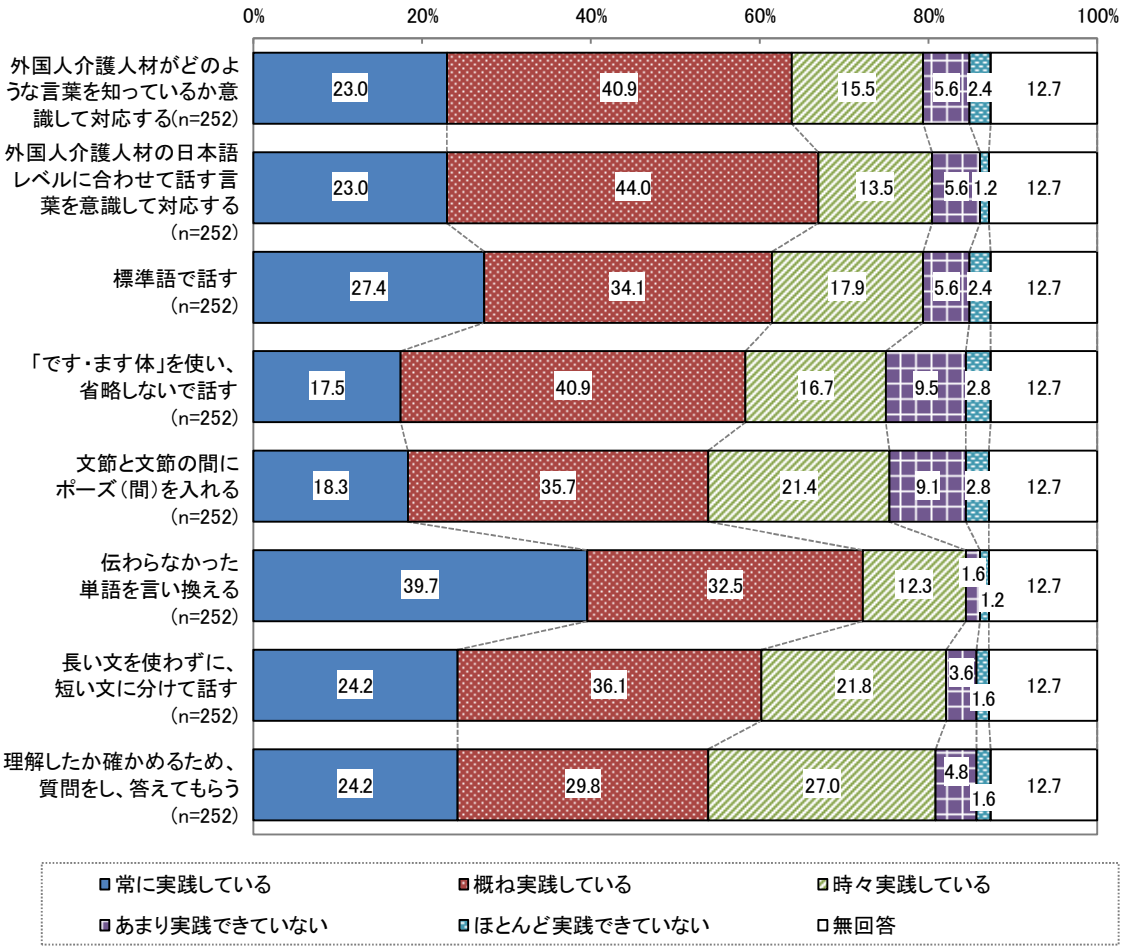
(1) 日本語についての工夫、実践度・対応に関する自信度

問 15:あなたが外国人介護人材へ講義を行う際、以下の日本語に関する対応に関してどの程度実践できているか、また、対応についてどの程度自信があるか、それぞれの項目ごとに教えてください。

・実践度では、「常に実践している」、「概ね実践している」、「時々実践している」を合算すると、「伝わらなかった単語を言い換える」が 84.5%と最も高く、次いで「長い文を使わずに、短い文に分けて話す」が 82.1%、「理解したか確かめるため、質問をし、答えてもらう」が 81.0%であった。

・「「です・ます体」を使い、省略しないで話す」と「文節と文節の間にポーズ(間)を入れる」は、他の工夫に比べて実践できていない割合がやや高く 1 割超であった。

＜日本語についての工夫についての実践度＞



- 外国人介護人材がどのような言葉を知っているか意識して対応する

		調査数	常に実践している	概ね実践している	時々実践している	あまり実践できていない	ほとんど実践できていない	無回答
	全体	252	23.0	40.9	15.5	5.6	2.4	12.7
養成校の種類	専門学校	197	23.4	40.1	16.8	5.6	0.5	13.7
	短期大学	32	25.0	37.5	12.5	6.3	9.4	9.4
	4 年制大学	19	21.1	52.6	10.5	5.3	5.3	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	22.6	45.3	15.1	3.8	0.0	13.2
	5 年以上10年未満	64	26.6	32.8	14.1	6.3	3.1	17.2
	10年以上15年未満	42	28.6	42.9	16.7	4.8	0.0	7.1
	15年以上	89	19.1	42.7	16.9	6.7	3.4	11.2
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	14.3	46.4	21.4	3.6	7.1	7.1
	1 年以上3 年未満	52	17.3	48.1	17.3	5.8	0.0	11.5
	3 年以上5 年未満	99	24.2	34.3	14.1	6.1	3.0	18.2
	5 年以上	69	30.4	42.0	14.5	5.8	0.0	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	25.7	34.7	17.8	8.9	2.0	10.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	19.0	45.7	17.1	2.9	1.0	14.3
	上記以外の専任講師	71	26.8	38.0	12.7	5.6	4.2	12.7
	非常勤講師	5	80.0	0.0	0.0	0.0	0.0	20.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	9	33.3	33.3	33.3	0.0	0.0	0.0
	日本語講師の資格なし	243	22.6	41.2	14.8	5.8	2.5	13.2
日本語講師との連携状況別	連携している	61	36.1	42.6	14.8	1.6	1.6	3.3
	連携していない	160	22.5	46.9	18.8	8.1	2.5	1.3

- 外国人介護人材の日本語レベルに合わせて話す言葉を意識して対応する

		調査数	常に実践している	概ね実践している	時々実践している	あまり実践できていない	ほとんど実践できていない	無回答
	全体	252	23.0	44.0	13.5	5.6	1.2	12.7
養成校の種類	専門学校	197	22.3	44.7	13.7	5.6	0.0	13.7
	短期大学	32	28.1	37.5	15.6	6.3	3.1	9.4
	4 年制大学	19	26.3	47.4	10.5	5.3	5.3	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	26.4	43.4	11.3	5.7	0.0	13.2
	5 年以上10年未満	64	25.0	40.6	12.5	1.6	3.1	17.2
	10年以上15年未満	42	28.6	47.6	11.9	4.8	0.0	7.1
	15年以上	89	18.0	44.9	16.9	9.0	0.0	11.2
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	17.9	46.4	14.3	10.7	3.6	7.1
	1 年以上3 年未満	52	17.3	50.0	13.5	7.7	0.0	11.5
	3 年以上5 年未満	99	23.2	40.4	14.1	3.0	1.0	18.2
	5 年以上	69	30.4	43.5	13.0	5.8	0.0	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	27.7	37.6	15.8	7.9	0.0	10.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	21.9	47.6	10.5	5.7	0.0	14.3
	上記以外の専任講師	71	21.1	40.8	18.3	4.2	2.8	12.7
	非常勤講師	5	60.0	20.0	0.0	0.0	0.0	20.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	9	11.1	66.7	22.2	0.0	0.0	0.0
	日本語講師の資格なし	243	23.5	43.2	13.2	5.8	1.2	13.2
日本語講師との連携状況別	連携している	61	36.1	49.2	6.6	3.3	1.6	3.3
	連携していない	160	22.5	49.4	18.8	7.5	0.6	1.3

- 標準語で話す

		調査数	常に実践している	概ね実践している	時々実践している	あまり実践できていない	ほとんど実践できていない	無回答
	全体	252	27.4	34.1	17.9	5.6	2.4	12.7
養成校の種類	専門学校	197	23.9	37.1	18.8	5.1	1.5	13.7
	短期大学	32	37.5	25.0	18.8	6.3	3.1	9.4
	4 年制大学	19	47.4	26.3	10.5	5.3	5.3	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	30.2	34.0	18.9	3.8	0.0	13.2
	5 年以上10年未満	64	32.8	31.3	10.9	3.1	4.7	17.2
	10年以上15年未満	42	26.2	42.9	19.0	4.8	0.0	7.1
	15年以上	89	22.5	33.7	22.5	7.9	2.2	11.2
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	25.0	39.3	17.9	7.1	3.6	7.1
	1 年以上3 年未満	52	28.8	38.5	13.5	7.7	0.0	11.5
	3 年以上5 年未満	99	24.2	34.3	18.2	3.0	2.0	18.2
	5 年以上	69	31.9	30.4	21.7	5.8	2.9	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	24.8	31.7	21.8	8.9	2.0	10.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	26.7	33.3	19.0	6.7	0.0	14.3
	上記以外の専任講師	71	31.0	33.8	14.1	4.2	4.2	12.7
	非常勤講師	5	20.0	40.0	20.0	0.0	0.0	20.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	9	11.1	77.8	11.1	0.0	0.0	0.0
	日本語講師の資格なし	243	28.0	32.5	18.1	5.8	2.5	13.2
日本語講師との連携状況別	連携している	61	32.8	37.7	18.0	6.6	1.6	3.3
	連携していない	160	30.0	39.4	21.3	5.6	2.5	1.3

- 「です・ます体」を使い、省略しないで話す

		調査数	常に実践している	概ね実践している	時々実践している	あまり実践できていない	ほとんど実践できていない	無回答
	全体	252	17.5	40.9	16.7	9.5	2.8	12.7
養成校の種類	専門学校	197	15.7	43.1	15.7	10.2	1.5	13.7
	短期大学	32	21.9	25.0	31.3	6.3	6.3	9.4
	4 年制大学	19	31.6	42.1	5.3	10.5	5.3	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	22.6	35.8	20.8	5.7	1.9	13.2
	5 年以上10年未満	64	17.2	42.2	15.6	4.7	3.1	17.2
	10年以上15年未満	42	21.4	42.9	14.3	14.3	0.0	7.1
	15年以上	89	13.5	41.6	16.9	13.5	3.4	11.2
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	25.0	32.1	21.4	10.7	3.6	7.1
	1 年以上3 年未満	52	26.9	36.5	19.2	3.8	1.9	11.5
	3 年以上5 年未満	99	13.1	41.4	17.2	8.1	2.0	18.2
	5 年以上	69	14.5	46.4	13.0	15.9	2.9	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	17.8	39.6	17.8	11.9	2.0	10.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	17.1	41.0	16.2	11.4	0.0	14.3
	上記以外の専任講師	71	16.9	38.0	19.7	7.0	5.6	12.7
	非常勤講師	5	20.0	40.0	0.0	20.0	0.0	20.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	9	22.2	66.7	11.1	0.0	0.0	0.0
	日本語講師の資格なし	243	17.3	39.9	16.9	9.9	2.9	13.2
日本語講師との連携状況別	連携している	61	24.6	49.2	14.8	4.9	3.3	3.3
	連携していない	160	18.1	44.4	20.6	13.1	2.5	1.3

- 文節と文節の間にポーズ(間)を入れる

		調査数	常に実践している	概ね実践している	時々実践している	あまり実践できていない	ほとんど実践できていない	無回答
	全体	252	18.3	35.7	21.4	9.1	2.8	12.7
養成校の種類	専門学校	197	18.8	35.0	21.3	9.1	2.0	13.7
	短期大学	32	15.6	34.4	28.1	9.4	3.1	9.4
	4 年制大学	19	21.1	42.1	15.8	10.5	5.3	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	17.0	35.8	22.6	7.5	3.8	13.2
	5 年以上10年未満	64	14.1	37.5	20.3	7.8	3.1	17.2
	10年以上15年未満	42	28.6	42.9	14.3	7.1	0.0	7.1
	15年以上	89	18.0	30.3	25.8	12.4	2.2	11.2
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	21.4	32.1	21.4	14.3	3.6	7.1
	1 年以上3 年未満	52	15.4	44.2	19.2	7.7	1.9	11.5
	3 年以上5 年未満	99	19.2	32.3	22.2	5.1	3.0	18.2
	5 年以上	69	18.8	34.8	23.2	14.5	1.4	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	17.8	37.6	21.8	9.9	2.0	10.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	17.1	36.2	20.0	12.4	0.0	14.3
	上記以外の専任講師	71	21.1	29.6	23.9	7.0	5.6	12.7
	非常勤講師	5	40.0	40.0	0.0	0.0	0.0	20.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	9	22.2	33.3	22.2	22.2	0.0	0.0
	日本語講師の資格なし	243	18.1	35.8	21.4	8.6	2.9	13.2
日本語講師との連携状況別	連携している	61	31.1	37.7	16.4	9.8	1.6	3.3
	連携していない	160	16.9	40.6	27.5	10.6	3.1	1.3

- 伝わらなかった単語を言い換える

		調査数	常に実践している	概ね実践している	時々実践している	あまり実践できていない	ほとんど実践できていない	無回答
	全体	252	39.7	32.5	12.3	1.6	1.2	12.7
養成校の種類	専門学校	197	40.1	32.5	12.2	1.5	0.0	13.7
	短期大学	32	46.9	21.9	15.6	3.1	3.1	9.4
	4 年制大学	19	31.6	47.4	10.5	0.0	5.3	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	39.6	30.2	15.1	1.9	0.0	13.2
	5 年以上10年未満	64	53.1	20.3	4.7	1.6	3.1	17.2
	10年以上15年未満	42	42.9	40.5	9.5	0.0	0.0	7.1
	15年以上	89	30.3	38.2	18.0	2.2	0.0	11.2
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	39.3	28.6	17.9	3.6	3.6	7.1
	1 年以上3 年未満	52	36.5	34.6	15.4	1.9	0.0	11.5
	3 年以上5 年未満	99	40.4	26.3	12.1	2.0	1.0	18.2
	5 年以上	69	43.5	40.6	8.7	0.0	0.0	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	37.6	37.6	12.9	1.0	0.0	10.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	40.0	31.4	13.3	1.0	0.0	14.3
	上記以外の専任講師	71	40.8	28.2	12.7	2.8	2.8	12.7
	非常勤講師	5	60.0	20.0	0.0	0.0	0.0	20.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	9	22.2	66.7	11.1	0.0	0.0	0.0
	日本語講師の資格なし	243	40.3	31.3	12.3	1.6	1.2	13.2
日本語講師との連携状況別	連携している	61	55.7	29.5	8.2	1.6	1.6	3.3
	連携していない	160	41.3	38.8	16.3	1.9	0.6	1.3

- 長い文を使わずに、短い文に分けて話す

		調査数	常に実践している	概ね実践している	時々実践している	あまり実践できていない	ほとんど実践できていない	無回答
	全体	252	24.2	36.1	21.8	3.6	1.6	12.7
養成校の種類	専門学校	197	26.4	32.5	22.3	4.6	0.5	13.7
	短期大学	32	18.8	40.6	28.1	0.0	3.1	9.4
	4 年制大学	19	15.8	63.2	10.5	0.0	5.3	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	26.4	30.2	26.4	3.8	0.0	13.2
	5 年以上10年未満	64	26.6	37.5	14.1	1.6	3.1	17.2
	10年以上15年未満	42	31.0	40.5	19.0	2.4	0.0	7.1
	15年以上	89	19.1	36.0	27.0	5.6	1.1	11.2
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	25.0	28.6	28.6	7.1	3.6	7.1
	1 年以上3 年未満	52	15.4	38.5	32.7	1.9	0.0	11.5
	3 年以上5 年未満	99	27.3	33.3	16.2	3.0	2.0	18.2
	5 年以上	69	27.5	40.6	20.3	4.3	0.0	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	22.8	33.7	26.7	5.0	1.0	10.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	22.9	37.1	21.9	3.8	0.0	14.3
	上記以外の専任講師	71	29.6	33.8	18.3	2.8	2.8	12.7
	非常勤講師	5	40.0	40.0	0.0	0.0	0.0	20.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	9	11.1	44.4	44.4	0.0	0.0	0.0
	日本語講師の資格なし	243	24.7	35.8	21.0	3.7	1.6	13.2
日本語講師との連携状況別	連携している	61	32.8	42.6	18.0	1.6	1.6	3.3
	連携していない	160	25.6	39.4	27.5	5.0	1.3	1.3

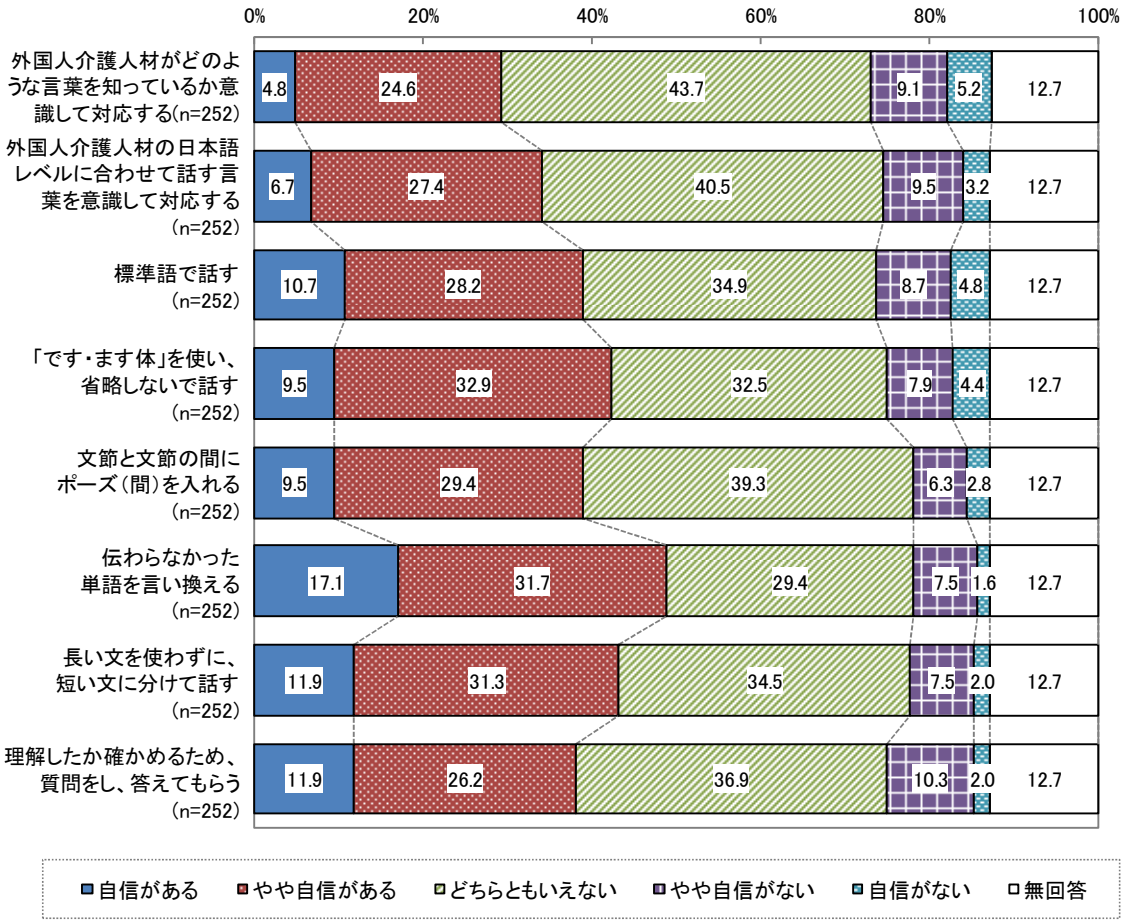
- 理解したか確かめるため、質問をし、答えてもらう

		調査数	常に実践している	概ね実践している	時々実践している	あまり実践できていない	ほとんど実践できていない	無回答
	全体	252	24.2	29.8	27.0	4.8	1.6	12.7
養成校の種類	専門学校	197	24.4	29.9	26.9	4.6	0.5	13.7
	短期大学	32	28.1	25.0	31.3	3.1	3.1	9.4
	4 年制大学	19	21.1	36.8	21.1	10.5	5.3	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	34.0	26.4	20.8	5.7	0.0	13.2
	5 年以上10年未満	64	26.6	26.6	21.9	4.7	3.1	17.2
	10年以上15年未満	42	33.3	28.6	26.2	2.4	2.4	7.1
	15年以上	89	13.5	34.8	34.8	5.6	0.0	11.2
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	25.0	25.0	32.1	7.1	3.6	7.1
	1 年以上3 年未満	52	25.0	25.0	32.7	5.8	0.0	11.5
	3 年以上5 年未満	99	24.2	31.3	20.2	4.0	2.0	18.2
	5 年以上	69	24.6	33.3	30.4	4.3	0.0	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	21.8	27.7	32.7	6.9	0.0	10.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	21.0	32.4	25.7	6.7	0.0	14.3
	上記以外の専任講師	71	26.8	29.6	22.5	4.2	4.2	12.7
	非常勤講師	5	40.0	40.0	0.0	0.0	0.0	20.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	9	44.4	33.3	22.2	0.0	0.0	0.0
	日本語講師の資格なし	243	23.5	29.6	27.2	4.9	1.6	13.2
日本語講師との連携状況別	連携している	61	39.3	36.1	18.0	1.6	1.6	3.3
	連携していない	160	23.1	32.5	35.0	6.9	1.3	1.3

・日本語教員(講師)の資格有無別に見ると、資格保持者の教員(講師)の方が、保持していない教員(講師)よりも、いずれの項目においても実践している割合が高かった。
・日本語教員(講師)との連携状況別に見ると、連携している教員(講師)の方が、連携していない教員(講師)よりも、いずれの項目においても実践している割合が高かった。

・自信度では、「自信がある」、「やや自信がある」を合算すると、「伝わらなかった単語を言い換える」が 48.8%と最も高く、次いで「長い文を使わずに、短い文に分けて話す」が 43.2%、「「です・ます体」を使い、省略しないで話す」が 42.4%であった。

＜日本語についての工夫についての自信度＞



- 外国人介護人材がどのような言葉を知っているか意識して対応する

		調査数	自信がある	やや自信がある	どちらともいえない	やや自信がない	自信がない	無回答
全体		252	4.8	24.6	43.7	9.1	5.2	12.7
養成校の種類	専門学校	197	5.1	23.4	44.2	9.1	4.6	13.7
	短期大学	32	3.1	25.0	40.6	12.5	9.4	9.4
	4 年制大学	19	5.3	42.1	42.1	5.3	0.0	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	3.8	22.6	47.2	9.4	3.8	13.2
	5 年以上10年未満	64	6.3	25.0	37.5	9.4	4.7	17.2
	10年以上15年未満	42	4.8	21.4	45.2	14.3	7.1	7.1
	15年以上	89	4.5	28.1	44.9	6.7	4.5	11.2
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	0.0	32.1	39.3	14.3	7.1	7.1
	1 年以上3 年未満	52	3.8	21.2	44.2	15.4	3.8	11.5
	3 年以上5 年未満	99	5.1	18.2	43.4	9.1	6.1	18.2
	5 年以上	69	7.2	34.8	44.9	2.9	2.9	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	5.9	25.7	41.6	10.9	5.0	10.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	4.8	28.6	42.9	7.6	1.9	14.3
	上記以外の専任講師	71	5.6	19.7	45.1	9.9	7.0	12.7
	非常勤講師	5	0.0	40.0	40.0	0.0	0.0	20.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	9	11.1	33.3	33.3	11.1	11.1	0.0
	日本語講師の資格なし	243	4.5	24.3	44.0	9.1	4.9	13.2
日本語講師との連携状況別	連携している	61	9.8	29.5	49.2	6.6	1.6	3.3
	連携していない	160	3.8	27.5	48.8	11.9	6.9	1.3

- 外国人介護人材の日本語レベルに合わせて話す言葉を意識して対応する

		調査数	自信がある	やや自信がある	どちらともいえない	やや自信がない	自信がない	無回答
全体		252	6.7	27.4	40.5	9.5	3.2	12.7
養成校の種類	専門学校	197	7.1	27.9	39.6	9.1	2.5	13.7
	短期大学	32	3.1	25.0	43.8	12.5	6.3	9.4
	4 年制大学	19	10.5	31.6	42.1	10.5	0.0	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	7.5	26.4	37.7	11.3	3.8	13.2
	5 年以上10年未満	64	9.4	28.1	37.5	6.3	1.6	17.2
	10年以上15年未満	42	4.8	28.6	47.6	9.5	2.4	7.1
	15年以上	89	5.6	28.1	40.4	11.2	3.4	11.2
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	0.0	32.1	42.9	14.3	3.6	7.1
	1 年以上3 年未満	52	3.8	25.0	42.3	17.3	0.0	11.5
	3 年以上5 年未満	99	7.1	27.3	35.4	8.1	4.0	18.2
	5 年以上	69	11.6	29.0	44.9	4.3	2.9	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	6.9	32.7	37.6	8.9	3.0	10.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	8.6	23.8	41.0	10.5	1.9	14.3
	上記以外の専任講師	71	7.0	23.9	39.4	12.7	4.2	12.7
	非常勤講師	5	0.0	60.0	20.0	0.0	0.0	20.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	9	11.1	55.6	22.2	0.0	11.1	0.0
	日本語講師の資格なし	243	6.6	26.3	41.2	9.9	2.9	13.2
日本語講師との連携状況別	連携している	61	9.8	34.4	45.9	4.9	1.6	3.3
	連携していない	160	6.9	30.0	45.0	13.1	3.8	1.3

- 標準語で話す

		調査数	自信がある	やや自信がある	どちらともいえない	やや自信がない	自信がない	無回答
全体		252	10.7	28.2	34.9	8.7	4.8	12.7
養成校の種類	専門学校	197	10.2	27.4	34.5	9.6	4.6	13.7
	短期大学	32	9.4	31.3	37.5	6.3	6.3	9.4
	4 年制大学	19	21.1	31.6	36.8	5.3	0.0	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	9.4	18.9	41.5	11.3	5.7	13.2
	5 年以上10年未満	64	20.3	18.8	34.4	3.1	6.3	17.2
	10年以上15年未満	42	2.4	40.5	35.7	11.9	2.4	7.1
	15年以上	89	9.0	34.8	31.5	10.1	3.4	11.2
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	3.6	32.1	35.7	17.9	3.6	7.1
	1 年以上3 年未満	52	13.5	28.8	32.7	11.5	1.9	11.5
	3 年以上5 年未満	99	8.1	26.3	35.4	7.1	5.1	18.2
	5 年以上	69	15.9	29.0	36.2	5.8	5.8	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	9.9	36.6	29.7	8.9	4.0	10.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	12.4	25.7	32.4	13.3	1.9	14.3
	上記以外の専任講師	71	11.3	22.5	39.4	5.6	8.5	12.7
	非常勤講師	5	0.0	0.0	60.0	0.0	20.0	20.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	9	0.0	44.4	44.4	11.1	0.0	0.0
	日本語講師の資格なし	243	11.1	27.6	34.6	8.6	4.9	13.2
日本語講師との連携状況別	連携している	61	14.8	34.4	37.7	4.9	4.9	3.3
	連携していない	160	11.3	30.6	40.0	11.9	5.0	1.3

- 「です・ます体」を使い、省略しないで話す

		調査数	自信がある	やや自信がある	どちらともいえない	やや自信がない	自信がない	無回答
全体		252	9.5	32.9	32.5	7.9	4.4	12.7
養成校の種類	専門学校	197	7.6	33.5	33.5	8.6	3.0	13.7
	短期大学	32	15.6	28.1	28.1	6.3	12.5	9.4
	4 年制大学	19	21.1	31.6	36.8	5.3	0.0	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	9.4	22.6	45.3	7.5	1.9	13.2
	5 年以上10年未満	64	12.5	29.7	32.8	6.3	1.6	17.2
	10年以上15年未満	42	9.5	47.6	21.4	7.1	7.1	7.1
	15年以上	89	7.9	33.7	31.5	10.1	5.6	11.2
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	17.9	25.0	35.7	14.3	0.0	7.1
	1 年以上3 年未満	52	11.5	36.5	28.8	9.6	1.9	11.5
	3 年以上5 年未満	99	7.1	30.3	33.3	5.1	6.1	18.2
	5 年以上	69	8.7	36.2	34.8	8.7	4.3	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	10.9	35.6	27.7	8.9	5.9	10.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	10.5	33.3	27.6	11.4	2.9	14.3
	上記以外の専任講師	71	8.5	25.4	45.1	4.2	4.2	12.7
	非常勤講師	5	0.0	40.0	20.0	20.0	0.0	20.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	9	11.1	55.6	33.3	0.0	0.0	0.0
	日本語講師の資格なし	243	9.5	32.1	32.5	8.2	4.5	13.2
日本語講師との連携状況別	連携している	61	8.2	37.7	41.0	4.9	4.9	3.3
	連携していない	160	11.9	36.3	35.6	10.6	4.4	1.3

- 文節と文節の間にポーズ(間)を入れる

		調査数	自信がある	やや自信がある	どちらともいえない	やや自信がない	自信がない	無回答
全体		252	9.5	29.4	39.3	6.3	2.8	12.7
養成校の種類	専門学校	197	7.6	30.5	39.6	7.1	1.5	13.7
	短期大学	32	15.6	28.1	31.3	6.3	9.4	9.4
	4 年制大学	19	21.1	21.1	52.6	0.0	0.0	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	5.7	24.5	47.2	5.7	3.8	13.2
	5 年以上10年未満	64	7.8	29.7	39.1	4.7	1.6	17.2
	10年以上15年未満	42	11.9	35.7	38.1	7.1	0.0	7.1
	15年以上	89	12.4	29.2	36.0	7.9	3.4	11.2
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	14.3	14.3	53.6	7.1	3.6	7.1
	1 年以上3 年未満	52	7.7	30.8	42.3	7.7	0.0	11.5
	3 年以上5 年未満	99	9.1	29.3	33.3	6.1	4.0	18.2
	5 年以上	69	10.1	34.8	40.6	5.8	1.4	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	8.9	33.7	36.6	7.9	2.0	10.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	12.4	25.7	40.0	6.7	1.0	14.3
	上記以外の専任講師	71	7.0	26.8	43.7	5.6	4.2	12.7
	非常勤講師	5	0.0	40.0	40.0	0.0	0.0	20.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	9	11.1	33.3	44.4	0.0	11.1	0.0
	日本語講師の資格なし	243	9.5	29.2	39.1	6.6	2.5	13.2
日本語講師との連携状況別	連携している	61	13.1	36.1	42.6	0.0	4.9	3.3
	連携していない	160	10.0	31.9	45.0	10.0	1.9	1.3

- 伝わらなかった単語を言い換える

		調査数	自信がある	やや自信がある	どちらともいえない	やや自信がない	自信がない	無回答
全体		252	17.1	31.7	29.4	7.5	1.6	12.7
養成校の種類	専門学校	197	16.2	34.0	27.9	8.1	0.0	13.7
	短期大学	32	21.9	21.9	31.3	6.3	9.4	9.4
	4 年制大学	19	21.1	21.1	47.4	5.3	0.0	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	9.4	26.4	34.0	15.1	1.9	13.2
	5 年以上10年未満	64	28.1	18.8	31.3	3.1	1.6	17.2
	10年以上15年未満	42	14.3	35.7	33.3	9.5	0.0	7.1
	15年以上	89	15.7	41.6	24.7	5.6	1.1	11.2
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	10.7	28.6	39.3	14.3	0.0	7.1
	1 年以上3 年未満	52	13.5	30.8	30.8	13.5	0.0	11.5
	3 年以上5 年未満	99	17.2	27.3	27.3	7.1	3.0	18.2
	5 年以上	69	23.2	39.1	29.0	1.4	0.0	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	17.8	37.6	27.7	5.0	1.0	10.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	17.1	29.5	30.5	7.6	1.0	14.3
	上記以外の専任講師	71	19.7	23.9	29.6	11.3	2.8	12.7
	非常勤講師	5	0.0	20.0	60.0	0.0	0.0	20.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	9	11.1	44.4	33.3	11.1	0.0	0.0
	日本語講師の資格なし	243	17.3	31.3	29.2	7.4	1.6	13.2
日本語講師との連携状況別	連携している	61	23.0	34.4	36.1	1.6	1.6	3.3
	連携していない	160	18.1	35.6	32.5	11.3	1.3	1.3

- 長い文を使わずに、短い文に分けて話す

		調査数	自信がある	やや自信がある	どちらともいえない	やや自信がない	自信がない	無回答
全体		252	11.9	31.3	34.5	7.5	2.0	12.7
養成校の種類	専門学校	197	11.2	31.5	34.5	8.1	1.0	13.7
	短期大学	32	12.5	34.4	31.3	6.3	6.3	9.4
	4 年制大学	19	21.1	21.1	47.4	5.3	0.0	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	9.4	18.9	43.4	13.2	1.9	13.2
	5 年以上10年未満	64	14.1	23.4	40.6	3.1	1.6	17.2
	10年以上15年未満	42	9.5	45.2	28.6	9.5	0.0	7.1
	15年以上	89	13.5	37.1	29.2	6.7	2.2	11.2
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	10.7	25.0	46.4	10.7	0.0	7.1
	1 年以上3 年未満	52	9.6	21.2	46.2	11.5	0.0	11.5
	3 年以上5 年未満	99	13.1	29.3	28.3	8.1	3.0	18.2
	5 年以上	69	13.0	43.5	31.9	2.9	1.4	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	14.9	30.7	33.7	7.9	2.0	10.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	12.4	32.4	30.5	10.5	0.0	14.3
	上記以外の専任講師	71	11.3	26.8	39.4	7.0	2.8	12.7
	非常勤講師	5	0.0	20.0	60.0	0.0	0.0	20.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	9	0.0	55.6	33.3	11.1	0.0	0.0
	日本語講師の資格なし	243	12.3	30.5	34.6	7.4	2.1	13.2
日本語講師との連携状況別	連携している	61	18.0	36.1	39.3	1.6	1.6	3.3
	連携していない	160	11.9	34.4	39.4	11.3	1.9	1.3

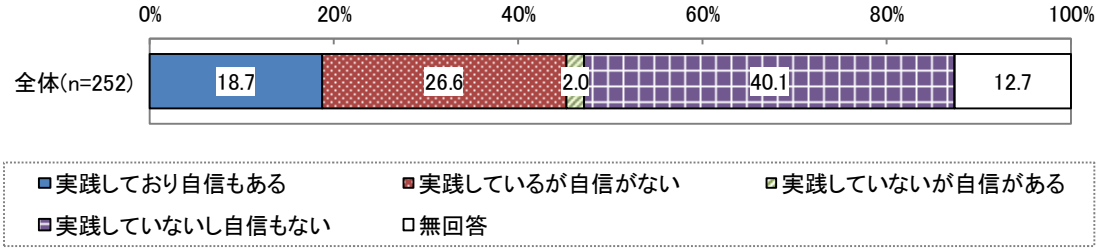
- 理解したか確かめるため、質問をし、答えてもらう

		調査数	自信がある	やや自信がある	どちらともいえない	やや自信がない	自信がない	無回答
全体		252	11.9	26.2	36.9	10.3	2.0	12.7
養成校の種類	専門学校	197	10.7	26.4	37.6	11.2	0.5	13.7
	短期大学	32	15.6	31.3	25.0	9.4	9.4	9.4
	4 年制大学	19	21.1	15.8	52.6	5.3	0.0	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	11.3	18.9	41.5	13.2	1.9	13.2
	5 年以上10年未満	64	15.6	17.2	39.1	9.4	1.6	17.2
	10年以上15年未満	42	11.9	35.7	31.0	11.9	2.4	7.1
	15年以上	89	10.1	32.6	36.0	9.0	1.1	11.2
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	14.3	25.0	42.9	10.7	0.0	7.1
	1 年以上3 年未満	52	9.6	25.0	40.4	11.5	1.9	11.5
	3 年以上5 年未満	99	11.1	23.2	32.3	13.1	2.0	18.2
	5 年以上	69	14.5	31.9	39.1	5.8	1.4	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	12.9	24.8	39.6	10.9	1.0	10.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	14.3	23.8	33.3	12.4	1.9	14.3
	上記以外の専任講師	71	9.9	25.4	39.4	9.9	2.8	12.7
	非常勤講師	5	0.0	40.0	40.0	0.0	0.0	20.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	9	22.2	44.4	22.2	11.1	0.0	0.0
	日本語講師の資格なし	243	11.5	25.5	37.4	10.3	2.1	13.2
日本語講師との連携状況別	連携している	61	19.7	31.1	41.0	3.3	1.6	3.3
	連携していない	160	11.3	28.8	41.9	15.0	1.9	1.3

・日本語教員(講師)の資格有無別に見ると、資格保持者の教員(講師)の方が、保持していない教員(講師)よりも、いずれの項目においても自信がある割合が高かった。

・日本語教員(講師)との連携状況別に見ると、連携している教員(講師)の方が、連携していない教員(講師)よりも、いずれの項目においても自信がある割合が高かった。

・日本語についての工夫についての実践度と、対応に関する自信度を掛け合わせて確認したところ、「実践していないし自信もない」が 40.1%と最も高く、次いで「実践しているが自信がない」が 26.6%、「実践しており自信もある」が 18.7%であった。



		調査数	実践しており自信もある	実践しているが自信がない	実践していないが自信がある	実践していないし自信もない	無回答
全体		252	18.7	26.6	2.0	40.1	12.7
養成校の種類	専門学校	197	16.8	27.4	2.5	39.6	13.7
	短期大学	32	21.9	25.0	0.0	43.8	9.4
	4 年制大学	19	36.8	21.1	0.0	36.8	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	15.1	34.0	1.9	35.8	13.2
	5 年以上10年未満	64	25.0	29.7	0.0	28.1	17.2
	10年以上15年未満	42	16.7	31.0	2.4	42.9	7.1
	15年以上	89	18.0	18.0	3.4	49.4	11.2
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	17.9	28.6	3.6	42.9	7.1
	1 年以上3 年未満	52	19.2	21.2	1.9	46.2	11.5
	3 年以上5 年未満	99	18.2	28.3	1.0	34.3	18.2
	5 年以上	69	20.3	27.5	2.9	42.0	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	20.8	22.8	2.0	43.6	10.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	15.2	25.7	2.9	41.9	14.3
	上記以外の専任講師	71	22.5	26.8	0.0	38.0	12.7
	非常勤講師	5	0.0	80.0	0.0	0.0	20.0
日本語講師の資格有無別	日本語講師の資格あり	9	22.2	22.2	11.1	44.4	0.0
	日本語講師の資格なし	243	18.5	26.7	1.6	39.9	13.2
日本語講師との連携状況別	連携している	61	29.5	34.4	4.9	27.9	3.3
	連携していない	160	18.1	28.1	1.3	51.3	1.3

・養成校の種類別で見ると、「4 年制大学」に所属する教員(講師)は「実践しており自信もある」の割合が他の教員(講師)と比べ高い傾向にあった。

・日本語教員(講師)との連携状況別に見ると、連携を行っている教員(講師)においては、「実践しており自信もある」の割合が他の教員(講師)と比べ高い傾向にあった。

(2) 外国人介護人材の内容理解への工夫

問 16: あなたが外国人介護人材へ講義を行う際、外国人介護人材が内容を理解できるために行っている工夫について、教えてください。

※問 14 で回答された日本語の工夫でなく、指導時の工夫点を記載してください

・講義内で行っている教員(講師)としての工夫については、理解度を確認するほか、わからないことが何かを確認できるような工夫を行っているといった意見が多く挙がった。また、学生に対しては、音読や自ら発言・調べを行う等、自発的に学習を行えるような工夫を行っているといった意見が多く挙がった。

・講義外においては、主にモチベーションアップや、コミュニケーションをとること等で、学生の個別にサポートしているといった意見が多く挙がった。

【講義内で行っている工夫】

		回答数
講師が行うこと		計 269
	理解度を確認する、随時質問を投げかける	85
	「わからない」と言える雰囲気を作る、わからないことは聞くように意識付けをする	28
	ゆっくり話す、はっきり話す、繰り返し説明する	21
	やさしい日本語で話す、言葉を言い換える	19
	重要な点を強調する	16
	音読する	13
	わからないことを確認できる時間を設ける	10
	板書する	8
	視覚に訴える教材を使う	7
	実例・実生活の内容で例えて説明する	7
	周りの日本人と関わる環境を作る	7
	携帯等の使用を認める	7
	発言・発表の機会を設ける	3
	褒める、評価する	3
	ルビを振る	2
	その他	33
学生にしてもらうこと		計 61
	音読してもらう、発音してもらう	39
	自分で説明してもらう、自分で調べてもらう	10
	メモを取ってもらう、書き取りしてもらう、下線を引いてもらう	9
	その他	3

【講義外で行っている工夫】

		回答数
講師が行うこと		計　231
	褒める、意欲を向上させる、達成感を持たせる、できることをみつける、活躍の場を設ける	60
	積極的にコミュニケーションをとる・話を聞く	55
	目標や学習状況を確認する・意識させる	19
	個別面談・指導を行う	19
	講義・教材・演習の工夫をする（視覚的に要素を増やす、グループワークを増やす等）	9
	意欲の低下理由を探る、解決する	9
	スキルアップの魅力や介護・資格取得の魅力・メリットを話す	9
	わかりやすい言葉で説明する、実例・実生活の内容で例えて説明する	6
	日本にいることの目的を確認する、日本での生活の魅力を伝える	6
	別途講義や野外活動を行う	4
	クラスメイト・他学科・学校外との交流の場を設ける	4
	出身国の話題に触れる、出身国の話をしてもらう	4
	「わからない」と言える雰囲気を作る、わからないことは聞くように意識付けをする	3
	他者からの働きかけができるよう協力を仰ぐ	3
	日本語能力・一般常識を教える	2
	アルバイト先と連携する	2
	日本語を使う機会を増やす	2
	わかるまで説明する・質問を投げかける	2
	話しやすい雰囲気をつくる	1
	その他	12

(3) 外国人介護人材の学習意欲への工夫

問 17: あなたが、外国人介護人材の学習へのモチベーションを高めるため、行っている工夫を教えてください。

・外国人介護人材の介護学習のモチベーションの高低にかかわらず、褒める、評価するといった賞賛行動、また積極的にコミュニケーションをとる等対話促進に関する対応が行われていた。
・モチベーションがすでに高い外国人介護人材に関しては、より多くの知識を与える、リーダーの役割を与える等の意見がある一方、孤立しないように配慮するといった意見も挙がった。
・モチベーションが高くない外国人介護人材に関しては、個別面談やコミュニケーションを通して介護の意義や目標を伝え、意識して勉強するように指導しているといった意見が挙がった。

【もともと学習へのモチベーションが高い外国人介護人材に対し、モチベーションを維持するために行っている工夫】

		回答数
講師が行うこと		計 259
	褒める・評価する、意欲を向上させる、達成感を持たせる	65
	より多くのことを教える・求める、レベルを落としすぎない	38
	積極的にコミュニケーションをとる・話を聞く	30
	目標や学習状況を確認する・意識させる	15
	日本人学生と同じ扱いにする	9
	質問できる場を増やす、質問により丁寧に答える	8
	面談を行う	8
	他の学生に教える場面を設ける	5
	資料・教材情報を提供する	4
	常に気に掛ける、見守る、孤立しないよう配慮する	4
	リーダー的役割を任せる	4
	日本の魅力を伝える、日本文化に触れる機会を作る	4
	資格情報や介護・福祉情報を提供する	3
	他学科・卒業生・日本人学生等との交流の場を設ける	3
	話しやすい雰囲気をつくる	2
	講義中に発言する機会を設ける	2
	特にしていない	25
	その他	30

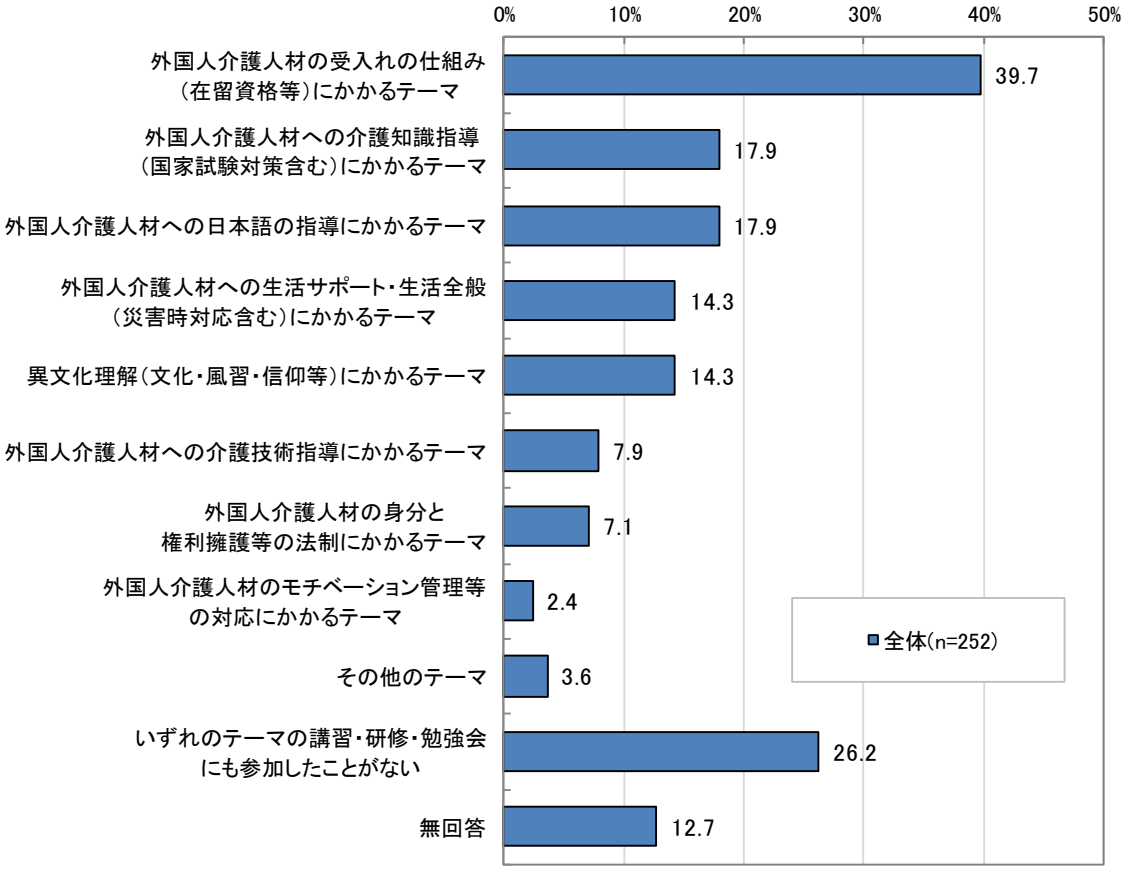
【あまり学習へのモチベーションが高くない外国人介護人材に対し、モチベーションを上げるために行っている工夫】

		回答数
講師が行うこと		計　232
	褒める、意欲を向上させる、達成感を持たせる、できることをみつける、活躍の場を設ける	59
	積極的にコミュニケーションをとる・話を聞く	55
	目標や学習状況を確認する・意識させる	19
	個別面談・指導を行う	19
	講義・教材・演習の工夫をする（視覚的に要素を増やす、グループワークを増やす等）	9
	意欲の低下理由を探る、解決する	9
	スキルアップの魅力や介護・資格取得の魅力・メリットを話す	9
	わかりやすい言葉で説明する、実例・実生活の内容で例えて説明する	6
	日本にいることの目的を確認する、日本での生活の魅力を伝える	6
	別途講義や野外活動を行う	4
	クラスメイト・他学科・学校外との交流の場を設ける	4
	出身国の話題に触れる、出身国の話をしてもらう	4
	「わからない」と言える雰囲気を作る、わからないことは聞くように意識付けをする	3
	他者からの働きかけができるよう協力を仰ぐ	3
	日本語能力・一般常識を教える	2
	アルバイト先と連携する	2
	日本語を使う機会を増やす	2
	わかるまで説明する・質問を投げかける	2
	話しやすい雰囲気をつくる	1
	特にしていない	10
	その他	4

(4) 参加した講習・研修・勉強会

問 18:あなたが、外国人介護人材を指導していくうえで、これまで参加された講習・研修・勉強会について、以下のテーマに該当するものがあるか、教えてください。

・「外国人介護人材の受入れの仕組み(在留資格等)にかかるテーマ」が 39.7%と最も高く、次いで「外国人介護人材への介護知識指導(国家試験対策含む)にかかるテーマ」と「外国人介護人材への日本語の指導にかかるテーマ」が 17.9%であった。



		調査数	外国人介護人材の受入れの仕組み(在留資格等)にかかるテーマ	外国人介護人材の身分と権利擁護等の法制にかかるテーマ	外国人介護人材への介護知識指導(国家試験対策含む)にかかるテーマ	外国人介護人材への介護技術指導にかかるテーマ	外国人介護人材への日本語の指導にかかるテーマ	外国人介護人材への生活サポート・生活全般(災害時対応含む)にかかるテーマ	異文化理解(文化・風習・信仰等)にかかるテーマ	外国人介護人材のモチベーション管理等の対応にかかるテーマ	その他のテーマ	いずれのテーマの講習・研修・勉強会にも参加したことがない	無回答
	全体	252	39.7	7.1	17.9	7.9	17.9	14.3	14.3	2.4	3.6	26.2	12.7
養成校の種類	専門学校	197	43.1	7.1	16.8	7.6	17.3	13.2	13.2	3.0	3.6	22.8	13.7
	短期大学	32	31.3	6.3	18.8	3.1	21.9	28.1	21.9	0.0	0.0	37.5	9.4
	4 年制大学	19	21.1	5.3	21.1	15.8	21.1	5.3	15.8	0.0	10.5	42.1	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	30.2	3.8	17.0	13.2	15.1	7.5	13.2	5.7	7.5	30.2	13.2
	5 年以上10年未満	64	39.1	4.7	18.8	6.3	12.5	10.9	15.6	3.1	0.0	23.4	17.2
	10年以上15年未満	42	45.2	7.1	11.9	9.5	23.8	28.6	19.0	0.0	2.4	31.0	7.1
	15年以上	89	43.8	10.1	19.1	4.5	21.3	14.6	12.4	1.1	4.5	23.6	11.2
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	42.9	7.1	14.3	10.7	17.9	3.6	7.1	0.0	7.1	21.4	7.1
	1 年以上3 年未満	52	28.8	5.8	21.2	15.4	17.3	11.5	21.2	3.8	0.0	34.6	11.5
	3 年以上5 年未満	99	38.4	8.1	16.2	7.1	17.2	17.2	13.1	4.0	3.0	21.2	18.2
	5 年以上	69	49.3	5.8	17.4	1.4	20.3	17.4	14.5	0.0	5.8	29.0	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	47.5	9.9	17.8	5.9	19.8	17.8	15.8	3.0	4.0	23.8	10.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	46.7	9.5	18.1	5.7	22.9	15.2	14.3	2.9	4.8	21.9	14.3
	上記以外の専任講師	71	29.6	2.8	11.3	9.9	9.9	11.3	12.7	1.4	1.4	33.8	12.7
	非常勤講師	5	20.0	0.0	20.0	20.0	20.0	0.0	0.0	0.0	0.0	20.0	20.0
日本語の対応の実践度・自信度	実践しており自信もある	47	53.2	12.8	21.3	4.3	21.3	25.5	19.1	4.3	2.1	29.8	0.0
	実践しているが自信がない	67	31.3	4.5	23.9	7.5	23.9	11.9	14.9	1.5	4.5	32.8	0.0
	実践していないが自信がある	5	100.0	0.0	40.0	0.0	60.0	20.0	20.0	20.0	0.0	0.0	0.0
	実践していないし自信もない	101	48.5	8.9	16.8	12.9	15.8	14.9	15.8	2.0	5.0	29.7	0.0

・養成校の種類別に見ると、「短期大学」、「4 年制大学」の教員(講師)においては、専門学校の教員(講師)と比べ、「いずれのテーマの講習・研修・勉強会にも参加したことがない」の割合が、高かった。

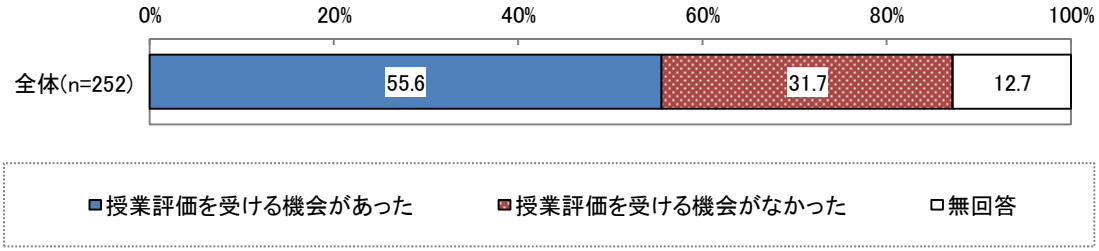
・外国人介護人材を指導した経験年数別に見ると、経験年数が長い教員(講師)においては、その他の教員(講師)と比べ、「外国人介護人材の受入れの仕組み(在留資格等)にかかるテーマ」に参加した割合が高かった。

・日本語の対応の実践度・自信度別に見ると、実践度・自信度が高い教員(講師)においては、その他の教員(講師)と比べ、「外国人介護人材の受入れの仕組み(在留資格等)にかかるテーマ」、「外国人介護人材への生活サポート・生活全般(災害時対応含む)にかかるテーマ」に参加した割合が高かった。

(5) 授業の評価

問 19:あなたが、これまで学生(日本人学生・留学生ともに)から授業の評価を受ける機会があったかについて教えてください。

・「授業評価を受ける機会があった」が 55.6%、「授業評価を受ける機会がなかった」が 31.7%であった。



		調査数	授業評価を受ける機会があった	授業評価を受ける機会がなかった	無回答
全体		252	55.6	31.7	12.7
養成校の種類	専門学校	197	49.7	36.5	13.7
	短期大学	32	71.9	18.8	9.4
	4 年制大学	19	89.5	5.3	5.3
養成校教員経験年数	5 年未満	53	41.5	45.3	13.2
	5 年以上10年未満	64	50.0	32.8	17.2
	10年以上15年未満	42	64.3	28.6	7.1
	15年以上	89	64.0	24.7	11.2
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	28	57.1	35.7	7.1
	1 年以上3 年未満	52	48.1	40.4	11.5
	3 年以上5 年未満	99	56.6	25.3	18.2
	5 年以上	69	59.4	33.3	7.2
教員種別	専任講師　かつ　教務主任	101	59.4	29.7	10.9
	専任講師　かつ　領域責任者	105	56.2	29.5	14.3
	上記以外の専任講師	71	53.5	33.8	12.7
	非常勤講師	5	20.0	60.0	20.0
日本語の対応の実践度・自信度	実践しており自信もある	47	61.7	38.3	0.0
	実践しているが自信がない	67	67.2	32.8	0.0
	実践していないが自信がある	5	60.0	40.0	0.0
	実践していないし自信もない	101	62.4	37.6	0.0

・養成校の種類別に見ると、「短期大学」、「4 年制大学」の教員(講師)においては、専門学校の教員(講師)と比べ、授業評価を受ける機会があった割合が高かった。

・養成校教員経験年数別に見ると、経験年数が長い教員(講師)においては、短い教員(講師)と比べ、授業評価を受ける機会があった割合が高かった。

・日本語の対応の実践度・自信度別に見ると、実践度・自信度が高い教員(講師)においては、その他の教員(講師)と比べ、授業評価を受ける機会があった割合が高かった。

【問 19 で「1.授業評価を受ける機会があった」と回答の方】

問 19-1:授業評価を受けた結果を受け、留学生の指導に関して何らか授業内容を改善された場合、その内容について教えてください。

・授業評価を受けた結果、言葉の伝え方を見直し、改善したといった意見が多く挙がった。

【授業評価を受けた結果、改善した点】

		回答数
		計　113
	話し方（スピード・声のトーン等）を変えた	30
	わかりやすい言葉を用いるようにした	16
	ルビをふるようにした	14
	授業の進行スピード・内容を変えた（レベルに合ったスピード・内容にした）	12
	視覚に訴える教材にした	9
	日本語・専門用語の解説を講義中や講義後に行うようになった	5
	理解度を確認するようになった	5
	板書・プリントの文字を大きくした、フォントを変えた	5
	小テストを行うようになった	4
	資料・教材情報を提供した・するようになった	3
	資料をわかりやすくした	3
	個別対応・少人数対応を始めた	0
	テキスト以外の資料を紹介・追加した	0
	その他	7

(6) 指導時に得た経験の活用

【問 1-4 で「5.留学生以外の外国人介護人材には指導を行っていない」以外と回答の方】

問 20:あなたが、留学生以外の外国人介護人材(EPA 介護福祉士候補者等)の指導時に得た経験の中で、どのような事柄を留学生指導に役立てているかについて、以下それぞれ教えてください。

【役立っている事柄:介護の授業(補講含む)に活かせる事柄】

【役立っている事柄：介護の授業（補講含む）に活かせる事柄】
EPA候補生と世間話も含め、たくさん話をしていたこと
やさしい日本語で表現すること
日本人的コミュニケーションの取り方と、その他多くの外国人のコミュニケーションの取り方の違いを目の当たりにし、できるだけ率直でストレートな関わりを持つ。また、人との距離感が近い留学生が多いので、コミュニケーションスキルの高さを生かした指導や助言。
生活習慣など
実際に現場で経験した事例
その都度の言葉の理解。理解した内容を口頭で確認する。
生活支援技術の習得がアルバイトに活かせるなど。コミュニケーションでは手話を活用した演習など
発言機会を与える 介護現場でのアルバイトと、どうリンクさせるか。
外国人の働き方
制度など
個別指導
国によっては食事は混ぜて手で食べる。食事介助の時に食事を混ぜてしまい注意を受けた学生がいた。実習前には日本の食事について話をするようにしている。
留学生以外の外国人介護人材（EPA介護福祉士候補者等）の指導は行っていない
外国人留学生への特化した講義展開にはしていないが、　反応を見ながら適宜、理解度を確認するため声がけ、説明を加えるなどしている。
専門用語の説明方法
介護の対する職に就くことにモチベーションの維持についてエピソードの共有
様々な国の介護事情を知り、日本の現在の介護に結びつきやすい話ができるようになった
しっかり関わり、話を聞くこと
板書の仕方
一番初めにルビ付きの資料を用意した際、ルビがあるとかえって読むのに時間がかかるため不要と言われ、それ以降ルビは振っていない
留学生の理解度は個々で違うため、やはり個別指導が一番理解度が上がります。
人の心の動きや在り様は、文化を超えて理解できる
留学生以外の外国人介護人材（EPA介護福祉士候補者等）の指導をしていない。
介護観
介護、外国人に関するテレビ番組。
わからないかもしれない言葉については、資料に補足して説明を入れている。
平易な言葉をつかう
留学生への指導、対応の仕方
受講生のモチベーション
穴あき資料の配布
外国人技能実習生が介護現場で困った話
相手のペースで話を聞く、そして何度も繰り返し対話を重ねる
テストに対して意識が高いので、テストを頻繁に行う
わからない単語はその場でおしえる。
実技は真面目に取り組むので、みんなの前でデモンストレーションを実施してもらったりし、花を持たせるようにし、自身を持ってもらえるように。
出身国によって、介護に対する意欲が違ってくるため、アルバイトやボランティア、実際に介護に従事している海外の方との交流できる場面を設けることができると、授業内容の意味が分かって、やる気に繋がった。
大切な事を、繰り返し説明する事
話すスピード　たとえ話
常に優しい日本語を使うこと。言い換えること。 文化を知れる。
全て役立っています。
講義の内容を理解できていないので理解度を確認しながら行う
会話文を短くして、やさしい日本語を使うようにする
ルビを振り、わからないことは質問できるようにしている
わずかだが、英語を活用できること 留学生にとって難しい言葉や、発音、同一異義語に配慮する。指示語を使わないようにする。詳細に伝える（例：〇ページの〇〇行目の真ん中に書いてある言葉です）など。　漢字は略語で書かない。一句一句丁寧に板書する。　方言を使わない。

・特段共通的な意見はなかったものの、講義における日本語の使い方、外国人介護人材の実体験をどのように講義に実体験としてリンクさせるか、等の意見が挙がった。

【役立っている事柄:国家試験対策に活かせる事柄】

【役立っている事柄：国家試験対策に活かせる事柄】
EPA候補生と世間話も含め、たくさん話をしていたこと
日本語の読解能力の差があるため、試験にかかる時間も変わってくる。また、独特な言い回しの表現などがあるため、専門用語以外のところで日本語指導が必要だと感じ、役立てている。
事例問題などの理解
用語、日本語の理解学習。その意味の確認。
模擬試験や国試問題集の別途料金徴収等なし。学費内で完結している。国試問題では時事問題等も適宜指導している。
レベル別（日本人も含む）対策
本校は入学時N3以下の留学生がほとんどなので、日本語力の劇的な上達がない限りは、国試の問題文の意味が理解できない。まずは日本語力の向上がないといけないということ
EPAや、技能実習の違い
得意不得意
過去問題を何度も解く
問題の解き方を意外と知らない。見直しのポイントを知らない。（できない）
留学生以外の外国人介護人材（EPA介護福祉士候補者等）の指導は行っていない
理解度をとらえた個別指導　　口頭試問、記載等
学習時間の確保や学習方法について
しっかり関わり、話を聞くこと
それぞれの国の文化を踏まえた指導方法
過去問に取り組み、選択肢も含め、不明確な理解部分を一つ一つ確認し、学習を進めています。
留学生以外の外国人介護人材（EPA介護福祉士候補者等）の指導をしていない。
ルビつきの書籍
本学の留学生はまだ国家試験受験年度に達していない。
言葉の言いかえを使用して説明する
学習に向かう意欲
穴あき資料の配布
4月、5月（入学時）の早い時期であれば文章内容の読み解きを行う（文章内容は1問もしくは2問）
テスト、順位に対して意識が高いので、テストを頻繁に行う
読み解きをする。
日本語力が関係する。N３以上でなければ難しい。はじめは介護で使用される日本語を意識して教えることが大切だと思う。
専門用語を読み書きし、その意味をさらに繰り返し反復することで、認識として頭に残り、国試の勉強に役立った。インプットとアウトプットを細かく何度も繰り返すことで、記憶として残るようになったように感じる。
大切な事を、繰り返し説明する事
過去問で出たところ
思考のパターンをかいま見れる。
国試対策を自分が勉強する中で、授業時に国家試験の過去問で出た部分は多く話すようにしています。
学生一人ひとり違うので個別で行う
重要なことは繰り返すこと
1年次から解かせるようにしている
試験問題を数多く解くことで、試験ならではの表現方法に慣れる。

・特段共通的な意見はなかったものの、多くの外国人介護人材と関わることで、特定の傾向が確認できたり、個別で外国人介護人材１人ひとりと向き合うことで、弱点を確認して対策を行うことが必要である、等の意見が挙がった。

【役立っている事柄:日本語全般について活かせる事柄】

EPA候補生と世間話も含め、たくさん話をしていたこと
日本語教育と介護福祉教育の連携 リスニングだけでは不十分なことが多いので、見る、聞く、書く　といったところを合わせて説明をする。
読みが同じ言葉
用語、日本語の理解学習。その意味の確認。
時事問題や歴史文化など。また、地域特性を知るための学内演習に外出支援等を設けている。
漢字にルビを振ったら読めはするが、意味がわかってはいないので、国試だけでなく、その内容を介護現場で生かそうと思ってもなかなかつながらない。　漢字のルビは、新卒で入学する日本人学生に結構役立つことがわかった。
日本語能力
個別指導 文章の読み方。留学生は問題文を読むことから労力を使う。わからない用語は飛ばしても読めるということを現在実践している。
留学生以外の外国人介護人材（EPA介護福祉士候補者等）の指導は行っていない コミュニケーションのはかり方　　１５．１の内容
専門用語の説明の方法。　同様の内容や場面では使用することばを統一する。 学習時間の確保や学習方法について しっかり関わり、話を聞くこと
国民性を活かした指導方法 日本の学生とのコミュニケーションによって留学生の日本語のレベルが上がっています。
ジェスチャーや通じているかの確認を短い文章を切って返していっている。
留学生以外の外国人介護人材（EPA介護福祉士候補者等）の指導をしていない。 福井弁
コミュニケーションをよくとる。日本語で発言させる。教科書の音読をさせる。なるべく文章をかかせる。
やさしい日本語を使うようになった。
言葉の言いかえを使用して説明する
留学生への指導、対応の仕方 日本語の習得方法 穴あき資料の配布
母国語で会話しない、日本語で会話する
伝わりやすい発音がある。しかし、この発言で話すと標準的な発言に留学生はならないので注意が必要
留学生の生活習慣や、考え方、価値観についての知識がふえた。　どのような意見に対しても、対応できる。 日本語能力試験を受験させる。 日本での生活全てにおいて、興味あることから話を膨らめ、マナーや礼儀、掃除といった、日常生活から見直しを行ったことで、当たり前の延長線上にある介護にも自ずと繋がる結果となった。日本や日本人が好きになることで、さまざまな学びに繋がるように感じている。 大切な事を、繰り返し説明する事 分かりやすい単語で話す
優しい日本語を使用。
英語の対訳ができる。
ゆっくり話す。文章を短く等。 日本人学生との交流、コミュニケーション　日本語に触れる機会を多くする(テレビ・ラジオの活用)
会話文を短くして、やさしい日本語を使うようにする
漢字の意味を理解させて、難しい言葉の理解につなげる。

・特段共通的な意見はなかったものの、多くの外国人介護人材と関わることで、どのような教材や指導方法を用いれば日本語が理解できるようになるか、という点を理解・実感できるようになった等の意見が挙がった。

(7) 指導上の課題

【問 1-4 で「5.留学生以外の外国人介護人材には指導を行っていない」以外と回答の方】

問 21:あなたが、外国人介護人材を国家試験合格に向けて指導するうえで課題であると感じていることを教えてください。

【介護の授業(補講含む)についての課題】

		回答数
学生に関する課題		計 144
	日本語能力に差がある、講義・介護に必要な日本語力が足りない・低い	85
	習熟度・理解度に差がある	25
	日本の制度・歴史・文化への理解度に差がある、不足している	14
	学び方・調べ方がわかっていない、自習をしない、学ぶ意味が分かっていない	7
	意欲がない、モチベーションの維持が難しい	6
	学生の学習時間が足りない（アルバイト時間が多い等）	4
	記述に時間がかかる	2
	ルール・規則が守れない	1
講義に関する課題		計 80
	日本語での表現・言い回し・言い換え・長文読解の指導が必要、指導が難しい	12
	専門用語や法律の理解が難しい	11
	講義の時間が足りない・カリキュラムが多すぎる	10
	時間配分が難しい、他クラスと進捗状況に差がある	8
	講義・指導法の工夫が必要	6
	国家試験の内容と講義内容に差がある	3
	学生間のコミュニケーションが不足している、できない	3
	教材が足りない	2
	教員が足りない	2
	科目間連携や教科書内でリンクしている内容であるにもかかわらず学生に認識してもらえない、講義が試験に通じる内容であることが理解してもらえない	2
	教科書が難しい	1
	他の講師や非常勤講師と連携が取れない	1
	その他	19

・外国人介護人材の日本語能力が足りず、指導が難しいことや、学生によってレベルの差があるため、どのように指導を行えばよいか分からない等の意見が多く挙がった。

【国家試験対策についての課題】

		回答数
学生に関する課題		計　119
	日本語能力に差がある、講義や試験解答に必要な日本語力が足りない、読解スピードが遅い	78
	学生の学習時間が足りない（アルバイト時間が多い等）	12
	意欲がない、モチベーションの維持が難しい	10
	日本の制度・歴史・文化への理解度に差がある、不足している	8
	習熟度・理解度に差がある	4
	学び方・調べ方がわかっていない、自習をしない、学ぶ意味が分かっていない	3
	集中力が足りない・維持できない	3
	記述に時間がかかる	1
講義に関する課題		計　104
	日本語での表現・言い回し・言い換え・長文読解等の指導が必要、指導が難しい	24
	問題文が難解、問題の意図を把握するのが難しい、試験独特の表記の指導が必要	20
	試験対策講座・個別対応・補講の時間を設ける必要がある、問題になれる時間を作る必要がある	16
	専門用語や法律等が難しい・理解させることが難しい	9
	理解度・進捗を把握する必要がある、把握する方法に難がある	7
	講義の時間が足りない・カリキュラムが多すぎる	6
	国家試験の内容と講義内容に差がある、実務と試験合格のための知識は違う	4
	教材が足りない、教材を追加する必要がある、教材に工夫が必要	3
	教員が足りない	3
	他の講師や非常勤講師と連携が取れない	1
	その他	11

・基本的な日本語能力の不足による介護の概念や基礎項目の理解の困難さに対する意見や、モチベーションの維持について等の意見が多く挙がった。

【日本語全般についての課題】

		回答数
学生に関する課題		計　121
	日本語の習熟度が不足している・差がある（入学時点で一定の日本語力が必要）	83
	日本語での読む・書く力が不足	11
	日本語での会話が不自由、発音が不明瞭	9
	母国語同士で話してしまう	7
	日本語を覚える意欲がない・努力をしない	5
	学生の学習時間が足りない（アルバイト時間が多い等）	4
	日本の制度・歴史・文化への理解度に差がある	2
講義に関する課題		計　83
	日本語での表現・言い回し・言い換え・長文読解等の指導が必要、指導が難しい、注意が必要	14
	日本語講義の時間が足りない・カリキュラムが多すぎる	11
	講義・指導法に工夫が必要	9
	試験独特の表記の指導が必要	8
	日本語に触れる機会を増やす必要がある	6
	補修や個別対応の時間を設ける必要がある	6
	専門用語や法律の理解・解説が難しい	6
	理解度・進捗を把握する必要がある、把握する方法に難がある	4
	資料が不足している	2
	日本語の担当教員がいない・足りない	1
	その他	16

・日本語教員(講師)との連携に対する課題や、外国人介護人材の日本語能力の不足に関する意見が多く挙がった。

【所属する養成校の留学生の受入れ体制についての課題】

※養成校所属者のみ

		回答数
講義に関する課題		計　157
	日本語能力が高い留学者を取得する方法を考える必要がある、入学時の日本語能力の見極め・基準が必要	30
	金銭面（授業力・生活費等）や生活面（住む場所の確保、税金支払い等）・就職、入管等に関するフォローが必要・不十分	28
	留学生向け講師・サポーター・事務職員が必要・不足している、教育ができていない、雇う余裕がない	27
	日本語をサポートする体制が不十分、サポートが必要	13
	留学生を受け入れる体制が出来ていない・不十分、留学生対応の余裕がない	12
	日本語学校や留学生の受け入れ体制がある施設等の協力が必要、連携が不十分、協力施設の対応に差がある	12
	入学前に留学生の能力・意欲・状況が把握できない、把握する方法が必要	10
	受け入れ後の講義方法等・理解度の確認に課題がある（日本語力の差があり授業が進まない等）、配慮が必要	8
	教員の負担が大きい、教員に留学生受け入れに関する知識（在留資格や具体的な手続き、退学時の対処等）や日本語教育知識が必要	5
	経営と質のバランスが悪い	3
	立地に難がある	3
	入学希望者がいない・少ない	3
	仲介会社に不安・不満がある	2
	受け入れに多くの労力・時間を要する	1
学生に関する課題		計　49
	日本語の習熟度が不足している・差がある	35
	理解度に差がある、フォローが必要、成績不良	7
	意欲に差がある、モチベーションの維持ができない	4
	介護に対する意識が日本と異なる	2
	就労のつもりで入る学生がいる	1
その他		計　17
	コロナに係る課題がある（入国できない等）	9
	その他	8

・入学段階での日本語能力の要件に関する事柄や、日本語サポート体制に関する意見、学習に対するモチベーションに関する意見が多く挙がった。

【上記以外のその他の事柄についての課題】

		回答数
講義に関する課題		計 69
	金銭面（授業力・生活費等）や生活面（税金支払い等）・就職、入管等に関するフォローが必要	30
	留学生の学習環境・生活保証や経済的支援が必要、不足している	10
	日本語学校や留学生の受け入れ体制がある施設等の協力が必要、連携が不十分、協力施設の対応に差がある	9
	留学生を受け入れる体制が出来ていない・不十分、留学生対応の余裕がない	4
	受け入れ後の講義方法等・理解度の確認に課題がある（日本語力の差があり授業が進まない等）、配慮が必要	4
	人手不足、教員の負担が大きい	4
	日本人学生との交流が必要、課題がある	3
	各種フォローに限界を感じる、状況を把握しきれない	2
	日本語講師が不足している、介護講師への日本語教育知識が必要	2
	留学生向け講師・サポーター・事務職員が必要・不足している、教育ができていない、雇う余裕がない	1
学生に関する課題		計 52
	学習意欲がそもそもない・継続しない、意欲に差がある、日本在留が目的となっている	12
	日本語能力に差がある、講義・介護に必要な日本語力が足りない・低い	11
	国の文化・宗教の違いに係る課題がある	10
	日本文化・社会常識・マナー指導が必要	8
	学生の学習時間が足りない（アルバイト時間が多い等）	7
	学生同士・近隣住民との関係に係る課題がある	2
	ルール・規則が守れない	2
その他		計 16
	コロナに係る課題がある（入国できない等）	6
	その他	10

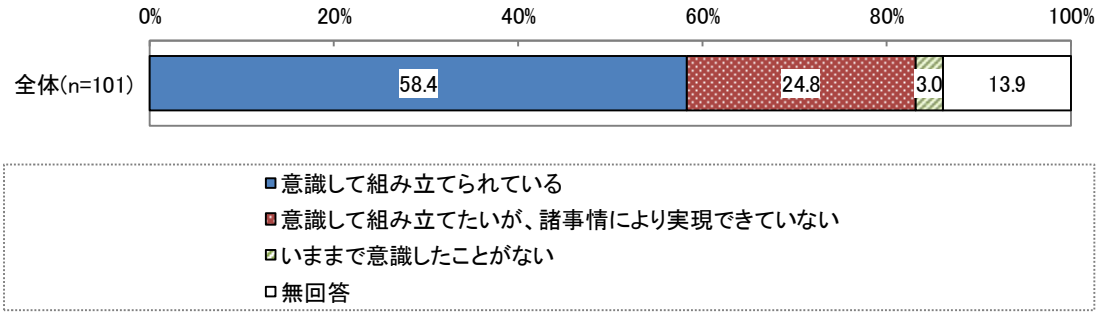
・介護を学ぶモチベーション、文化の違い、日本での生活・学習における総合的なサポート体制等に関する意見が多く挙がった。

5. 貴校の情報　※養成校教員(講師)、かつ教務主任に該当する方のみ

(1) カリキュラム・時間割

問 22:貴校でのカリキュラム・時間割が、学習の順序性を意識して体系的に教授できるよう組み立てられているかについて教えてください。

・「意識して組み立てられている」が 58.4%と最も高く、次いで「意識して組み立てたいが、諸事情により実現できていない」が 24.8%、「いままで意識したことがない」が 3.0%であった。



		調査数	意識して組み立てられている	意識して組み立てたいが、諸事情により実現できていない	いままで意識したことがない	無回答
全体		101	58.4	24.8	3.0	13.9
養成校の種類	専門学校	83	55.4	27.7	3.6	13.3
	短期大学	12	75.0	0.0	0.0	25.0
	4 年制大学	6	66.7	33.3	0.0	0.0

・養成校の種類別で見ると、「短期大学」、「4 年制大学」においては、「専門学校」と比べ、「意識して組み立てられている」の割合が高かった。

【問 22 で「1.意識して組み立てられている」と回答の方】

問 22-1:どのようにカリキュラム・時間割を意識して組み立てているかについて、教えてください。

・留学生が介護の理解を深められるように、基礎→応用と学びがつながるよう工夫しているという意見が最も多かったが、実習や試験に合わせているという意見も多かった。
・科目間で重複する内容を鑑みてカリキュラムや時間割を組み立てている養成校もあった。

【意識している点】

		回答数
		計 66
	基礎→応用・専門知識への流れを意識している、年次・月次ごとにカリキュラムを設計している	29
	実習や試験に合わせてカリキュラムを組む（必要となる知識の詰め込み方・流れを考える）	27
	科目間で重複・連動する内容は連携する	9
	環境要因（科の目標・コロナウイルス感染症等）に合わせて教育課程を見直す	1

【問 22 で「2. 意識して組み立てたいが、諸事情により実現できていない」と回答の方】

問 22-2:どのようにカリキュラム・時間割を組み立てたいか、教えてください。

・カリキュラムについては、基礎→応用と学びがつながるように組み立てたいが実際にできていないという意見や、実習の時期を組み立てなおしたいといった意見が挙がった。
・時間割については、教員(講師)の都合や実習の都合等により思うような時間割が組み立てられていないといった意見が挙がった。

【組み立てたいカリキュラム】

人間と社会　　介護実習
国家試験合格を目指す上で、他の科目を入れる余裕がない。学生も余裕がない。可能なら選択科目を入れたい
地域の特性にあわせた教科の充実を図りたい。 基礎知識を活用できるように進捗や内容を合わせていく。
他科目と介護カリキュラムがリンクすような時間割
介護が理解できる順序
実習Ⅱを実施するまでにほぼすべてのカリキュラムを終えて、2年の後期は国家試験対策としたい。
日本語フォローアップ・授業のフォローアップを毎週組み込んでいきたい 学習進捗状況に合わせて実習（実践）へ繋げるカリキュラム 外国人留学生に合わせたカリキュラムを考える必要あり。日本の風習について必要最低限ではだめなのであろうか。
外部への見学・体験
実習の時期を組み立て直したい。
難しい科目を実習後にするなど、科目によって開講時期を検討したいが、教員の配置上難しい。 介護の基本、コミュニケーション、生活支援技術等は１年前期に組み立てたい 介護実習と介護過程を中心として、体系的に組み立てていきたい 生活支援技術をすべて終えた後に介護実習を行いたい
日数が経つにつれて着実に身につくカリキュラム
検討していきたいと考えているので詳しく答えられない 科目間の連携・整合性が図りやすいカリキュラム
順序立てて教えたい
講義→演習を通じて、核となる介護実習及び介護過程へとつながる開講

【組み立てたい時間割】

科目内容によって1年次から系統的に組み立てたい
他校では3限までの時間割で組んでる学校もあるが、できるなら実現したいが、現実難しい
生活支援技術、認知症の理解、こころとからだのしくみ
１年前期にコミュニケーション技術を組み入れたいが、講師の都合で難しい
留学生のアルバイトの関連もあるため、水曜日金曜日を短縮日課としたい。
午前中に授業、午後に留学生のフォローアップ授業
クラスメートが（多国籍）学校に興味を持てるような授業。 授業内容にあわせたコマ割り １つの科目が同じ曜日同じ時間で進んでいくようにしたい。
実習を中心として、実習の段階に応じた科目の編成を行いたい。 組み立てたいカリキュラムがあるが、科目によって非常勤の先生をお願いしているので、非常勤の先生を優先して時間割を作成している。 留学生の勉強時間の確保等も考えると、15時くらいに授業を終了として、日本人とは別の個別に学習指導ができる時間割を考えたい
時間を有効に利用できる時間割。無駄な空き時間を作らず、授業外でボランティアや社会参加等々に参加できる学校だけに偏ったものではなく、学生の生活や将来への配慮も交えた時間割。
ある程度、基礎知識を入れて生活支援へとかんがえるが、あわせにくい。
科目間の連携・整合性が図りやすい時間割
介護領域を軸に組み立て、核になる介護過程の授業の開講を、全体の中で位置づける

問 23:貴校でカリキュラム・時間割を組み立てる上での課題があれば、教えてください。

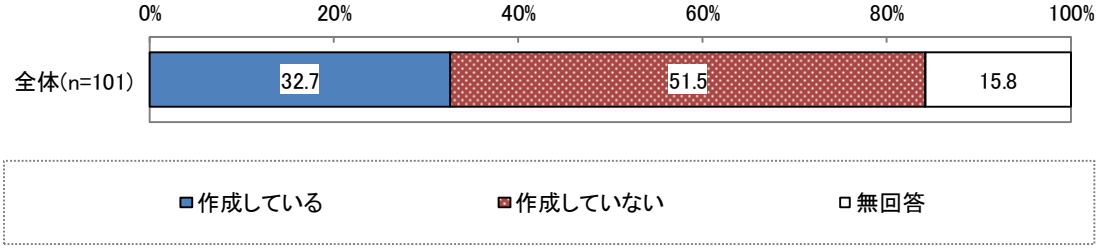
・学生のレベルやアルバイトとの両立、教員(講師)間の連携、人材不足等の要因があり、組み立てたいカリキュラムや時間割を実現できていない、といった意見が挙がった。

【カリキュラム・時間割を組み立てるうえでの課題】

		回答数
講義に関する課題		計 45
	常勤講師・非常勤講師・兼任講師の時間調整が難しい、一部の講師に負担がかかる	25
	講義の時間が足りない	9
	実習・試験に合わせたカリキュラム作成が必要、時間配分が難しい	7
	実習や実習先に係る課題がある	4
学生に関する課題		計 8
	アルバイトと両立できるよう配慮が必要	4
	学生のレベルが講義の内容に達していない	2
	日本語の授業が必要	2
人材不足		計 6
	講師・事務職員が足りない、定着しない	6
その他		計 11
	コロナに係る課題がある	3
	その他	8

問 24:貴校で、カリキュラムマップを作成しているかについて教えてください。

・「作成していない」が 51.5%、「作成している」が 32.7%であった。

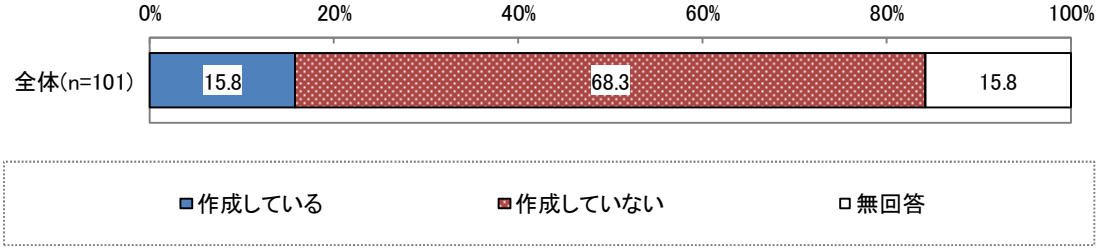


		調査数	作成している	作成していない	無回答
全体		101	32.7	51.5	15.8
養成校の種類	専門学校	83	27.7	56.6	15.7
	短期大学	12	58.3	16.7	25.0
	4 年制大学	6	50.0	50.0	0.0

・養成校の種類別で見ると、「短期大学」、「4 年制大学」においては、「専門学校」と比べ、「作成している」の割合が高かった。

問 25:貴校で、カリキュラムツリーを作成しているかについて教えてください。

・「作成していない」が 68.3%、「作成している」が 15.8%であった。



		調査数	作成している	作成していない	無回答
全体		101	15.8	68.3	15.8
養成校の種類	専門学校	83	10.8	73.5	15.7
	短期大学	12	33.3	41.7	25.0
	4 年制大学	6	50.0	50.0	0.0

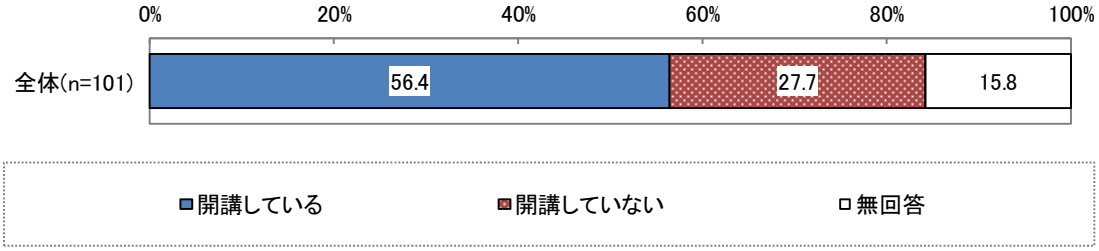
・養成校の種類別で見ると、「短期大学」、「4 年制大学」においては、「専門学校」と比べ、「作成している」の割合が高かった。

(2) 国家資格取得に資する科目

問 26:貴校で、指定科目以外に国家資格取得に資する科目(※1)を開講されているかについて教えてください。

(※1)「調理実習」や「レクリエーション」、「日本語能力」「日本の文化」等、介護福祉士としての実践力向上を意図して設定された科目を指します。

・「開講している」が 56.4%、「開講していない」が 27.7%であった。



		調査数	開講している	開講していない	無回答
全体		101	56.4	27.7	15.8
養成校の種類	専門学校	83	55.4	28.9	15.7
	短期大学	12	66.7	8.3	25.0
	4 年制大学	6	50.0	50.0	0.0

・養成校の種類別で見ると、「短期大学」は、その他の養成校に比べ、「開講している」の割合が高かった。

【問 26 で「1.開講している」と回答の方】

問 26-1:問 26.でご回答いただいた科目について、具体的な科目名／必修・選択の扱い／対象学生と、当該科目がどのように国家資格取得に関連しているのかについて、具体的に教えてください。

【介護全般にかかる科目について】

科目名	どのように国家資格取得に関連しているのかについて
介護の応用	障害の理解だけでは、手話の時間を設け聴覚障害者への理解を深める為。
介護の応用２	授業だけでは、国家試験対策が不十分な為模擬問題を通じて、国家試験に慣れることと日本語の理解が必要な為。
介護における文章・記録	現場での記録等、文章能力の向上のため
アクティビティ演習	介護過程の計画で必要だから
介護福祉ゼミ	授業だけでは理解できていないため
介護福祉士国家試験対策	介護福祉士国家試験対策
介護予防運動指導員	国家試験というより、現場でのスキルアップや＋αの学び（資格）のため
介護予防学	高齢者の身体的特徴を理解し、こころとからだのしくみの理解につなげる学習が出来ている。また、地域における活動として生活と福祉の領域に関しても学習できている。
介護予防指導士	介護予防全般の知識が生活支援技術やこころとからだのしくみに関連している
セレクション科目	多岐にわたる介護現場で実践されている内容の理解を深めるため
チームケア演習	多職種連携の理解のため
ボランティア論	ボランティアの必要性と実際のボランティア体験を行うことで、日本の文化、伝統に触れ、日本語理解やコミュニケーション力の強化が図れる。
フットケア・ハンドケア	介護予防の観点から重要。
口腔ケア	介護予防の観点から重要。
スポーツレクリエーション	介護予防についての理解
スポーツ科学	国家資格ではありません（レクリエーションインストラクター）
レクリエーション	介護福祉士として現場で勤務するうえで大切と考えるから
レクリエーション	コミュニケーション技術の一つとして関連
レクリエーション基礎　指導法	介護実習の充実
レクリェーション支援	生活支援技術・コミュニケーション技術だけでは、利用者の余暇時間の過ごし方やコミュニケーションのとり方の理解が不十分な為。
レクリエーション支援技術	レク実技だけではレク実践における知識が不十分であるから
レクリエーション実技	日本の歌や物語、習慣等の理解促進が必要だから
レクリエーション理論	レクリエーション・インストラクター資格取得につなげる科目であり、主に日本人学生が受講している。介護実習時のレクリエーション企画やその進行を行うことから、利用者理解や障害理解、日本語会話の促進になる。
生活レクリエーション	利用者の余暇活動について、どのように支援するべきか理解することが必要であるから。また、余暇活動支援のバリエーションを増やすため。
車いすシーティング等	こころとからだのしくみと生活支援技術の補講となっている
手話	コミュニケーション技術の聴覚障害について実践的に学ぶため
住環境コーディネート	様々な科目の補講となっている
グリーンプランニング	学内農園を活用し、実際に野菜や花を植えたり収穫したりします。多様な利用者ニーズに応えるために必要な技術と考えます
医学一般	医学の知識は必要である。
児童福祉論	社会福祉主事資格
児童福祉論	社会の理解だけでは児童分野の理解が不十分であるから
社会と福祉（国家試験対策含む）	国家試験に向け、1年次で終了している科目についても、振り返りを行っている
福祉と倫理	高い倫理性を養うため。
福祉メイク	生活支援技術の中の、QOLの向上について理解するため
福祉レクワーカー	現場でのスキルアップや＋αの学び（資格）のため、非言語的コミュニケーション力の涵養
社会福祉施設運営論	社会福祉主事
社会福祉総合演習	国家試験科目全ての学修をさせている。
地域支援活動	地域福祉の理解と実践を意識
地域福祉	授業に関連した制度内容を学ぶことで理解を深めることができる。介護の理解、障害の理解他の科目に関連している。
地域福祉学	地域連携に関連するフォーマル、インフォーマルなサービスの内容を含めたい。
地域福祉論	障害分野に特化して実施

【家政学・栄養・調理にかかる科目について】

科目名	どのように国家資格取得に関連しているのかについて
栄養・調理	生活支援技術だけでは不十分。
栄養調理	基本的な食材の分類、栄養素をもとに基本的な調理・保存方法、日本食文化、食習慣、四季の食材、食事のマナーを習得する必要がある。
調理実習	生活支援技術だけでは、十分に栄養調理が理解できないから、介護の日本語理解の促進が必要
調理実習	栄養については外国人は無知です。授業だけでは理解困難味付けも辛い・濃い習慣があるため
調理実習	栄養調理や日本文化の理解習得のため
家政学	生活支援技術の授業の一貫として、調理や被服、住環境についてより詳しく理解できるように行っている。
家政学概論	生活支援技術だけでは、十分に栄養調理や被服等に関する内容の理解ができないから
家政学実習	生活支援技術だけでは、十分に栄養調理や被服等に関する内容の理解ができないから
家政学実習（栄養と調理）	生活支援技術の内容を実践的に行うため
生活支援技術E	生活支援技術だけでは、十分に栄養調理が理解できないから
生活文化	講義内では理解が不十分なため
生活文化	事例問題において利用者の生活理解につながる

【試験対策にかかる科目について】

科目名	どのように国家資格取得に関連しているのかについて
国家試験対策	個人では、国家試験の対策か十分にできないため
国家試験対策	模擬試験や全科目の復習、国家試験に向けた重点項目の解説など
国家試験対策	過去問の授業
国家試験対策講座	授業だけでは、国家試験問題に触れることが少なくなってしまう為。
資格取得対策	問題を解く練習

【日本語にかかる科目について】

科目名	どのように国家資格取得に関連しているのかについて
日本語	日本語能力の向上が国家試験合格に必要だから
日本語	介護の日本語理解の促進が必要
日本語クラス	入学当初、早い段階からより日本語理解の強化を図り、他科目に生かすことを目的としている。
日本語会話Ⅰ・Ⅱ	テーマは、日本語学習の初級から中級を復習し、大学での勉学に必要な日本語力の基礎固めを行う。場面に応じ、適切な表現が使えるようになる。短文～中文程度の文章の内容を正確に読み取る。場面に応じ、適切な表現を用いた会話ができるようになる。短文～中文程度の文章の内容を､より速く正確に読み取る。以上、国家資格取得に必要な日本語の基礎である。
日本語学習	不得意分野の克服並びにＪＬＰＴに向けての対策講座
日本語学習	日本語能力の習得促進が必要だから
日本語検定（カリキュラム外）	国家試験問題の理解度を高める。
日本語授業	授業内容、国家試験問題の理解において日本語理解の促進が必要
日本語特講	日本語の基礎的理解を十分に獲得するため
日本語能力	科目全般（日本語の理解力向上）
日本語表現	留学生クラスと日本人クラスは分けている。留学生クラスではN4レベル程度の文章を正確に理解できることを目標に１年生前期に学習する。
日本語表現法	日本語のみならず日本の文化についても学べるから
日本語表現法	介護の日本語理解と記録も含め文章表現の強化が必要だから。
基本の言葉	言葉の理解を深める
国語表現	日本語理解の促進が必要だから
文章能力開発	介護の日本語理解の促進が必要だから　、実習日誌がしっかりと書けるようなるため
文章表現	介護の日本語理解の促進が必要だから　、実習日誌がしっかりと書けるようなるため
介護の日本語	介護の日本語理解促進のため

【日本文化にかかる科目について】

科目名	どのように国家資格取得に関連しているのかについて
奈良の伝統文化	地元奈良に根ざした文化を知り、利用者理解、利用者支援に役立てるため。
日本の文化	全ての学生に日本の文化（昔から現在までの）ことを理解し、利用者（特に高齢者）理解、地域の理解を深めてもらいたいから。
日本の文化	日本人の生活様式の理解が前提であるため
日本文化の理解	日本の文化を理解することは制度や自立の考え方を理解することにもつながると思われるから。
福祉文化活動	日本文化の理解を深める
法と人権	社会の理解や人間の理解だけでは、日本国憲法のなかでの人権、日本人としての尊厳等が理解できないから
国際理解Ⅰ及びⅡ	人間と社会の領域の選択必須科目として位置付けています。留学生の日本文化の理解、日本語理解に充てています。
国際理解コース	日本語理解に力を入れ、各科目の全面バックアップを図っている
多文化共生	多様な人、文化、価値観を受け入れる意識を高めたいから。
社会学	社会のしくみ・人間の特性を知ることが、利用者の人物理解・生活理解に必要であり、制度的背景を含めた学習につながるため
社会学習	日本語の理解に
生活文化論	日本の歴史、文化を育み、沖縄県の歴史を理解することで、日本語力や方言、気候風土や習慣を獲得できる
生活の理解と基礎教養	生活支援技術との関連性、理解が不十分、

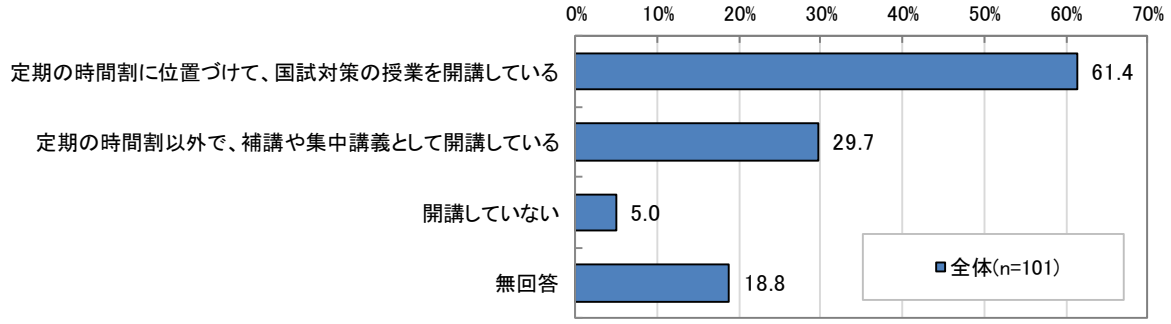
【情報処理にかかる科目について】

科目名	どのように国家資格取得に関連しているのかについて
情報基礎演習	パソコンの使い方（Word、Excel、PowerPoint等）を学ぶことにより、自ら学習が深められ、国家試験の自己学習が充実できる。
情報処理	介護の基本や社会の理解だけでは、利用者情報の管理についての理解が不十分な為。
ICT概論	コミュニケーションスキル、最新の介護ロボットに触れることで介護の魅力を深める、記録やデーターの管理などの重要性を理解するために必要
創造性開発	日本の生活様式への理解、余暇活動支援の理解

(3) 国家試験に特化した授業内容

問 27:貴校で、国家試験に特化した授業や補講が開講されているかについて教えてください。

・「定期の時間割に位置づけて、国試対策の授業を開講している」が 61.4%と最も高く、次いで「定期の時間割以外で、補講や集中講義として開講している」が 29.7%、「開講していない」が 5.0%であった。



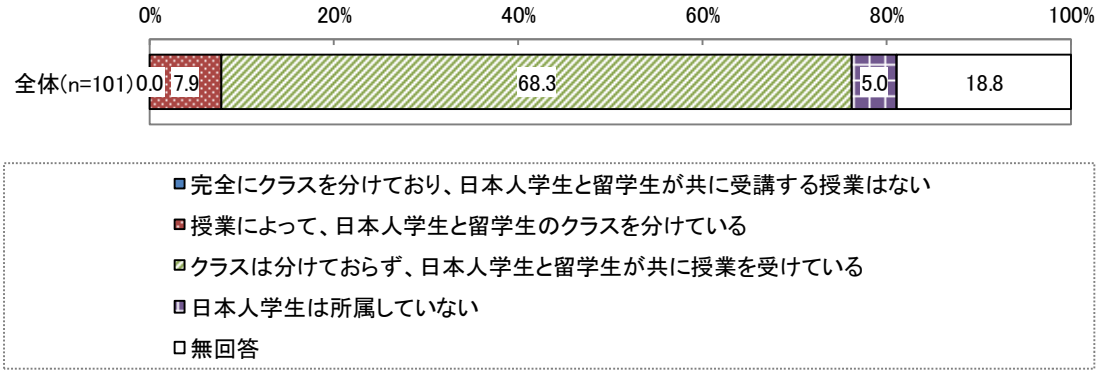
		調査数	定期の時間割に位置づけて、国試対策の授業を開講している	定期の時間割以外で、補講や集中講義として開講している	開講していない	無回答
全体		101	61.4	29.7	5.0	18.8
養成校の種類	専門学校	83	59.0	31.3	6.0	19.3
	短期大学	12	66.7	16.7	0.0	25.0
	4 年制大学	6	83.3	33.3	0.0	0.0

・養成校の種類別で見ると、「短期大学」、「4 年制大学」においては、「専門学校」と比べ、「定期の時間割に位置づけて、国試対策の授業を開講している」の割合が高かった。

(4) クラス体制

問 28: 貴校のクラス体制について、留学生と日本人学生のクラスを分けているかについて教えてください。

・「クラスは分けておらず、日本人学生と留学生が共に授業を受けている」が 68.3%と最も高く、次いで「授業によって、日本人学生と留学生のクラスを分けている」が 7.9%、「日本人学生は所属していない」が 5.0%であった。



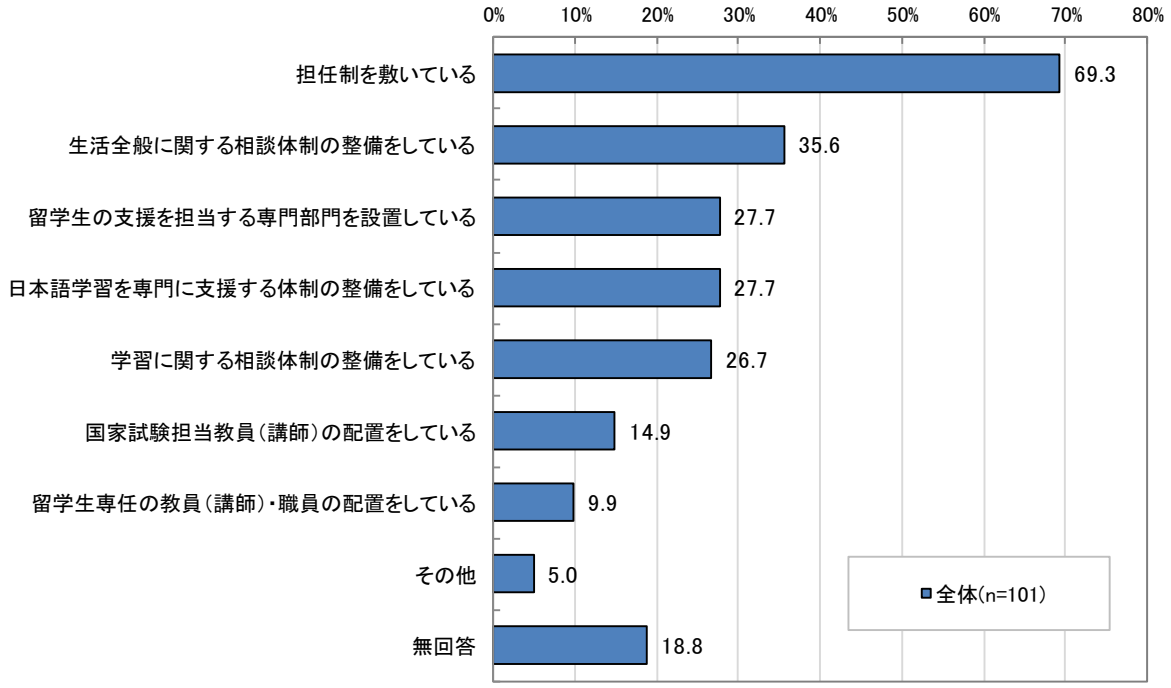
		調査数	完全にクラスを分けており、日本人学生と留学生が共に受講する授業はない	授業によって、日本人学生と留学生のクラスを分けている	クラスは分けておらず、日本人学生と留学生が共に授業を受けている	日本人学生は所属していない	無回答
全体		101	0.0	7.9	68.3	5.0	18.8
養成校の種類	専門学校	83	0.0	8.4	67.5	4.8	19.3
	短期大学	12	0.0	8.3	66.7	0.0	25.0
	4 年制大学	6	0.0	0.0	83.3	16.7	0.0

・養成校の種類別に見たところ、特段大きな傾向の違いは見られなかった。

(5) 指導体制

問 29:貴校での、留学生に対する指導体制について、以下の項目で該当するものがあるか教えてください。

・「担任制を敷いている」が 69.3%と最も高く、次いで「生活全般に関する相談体制の整備をしている」が 35.6%、「留学生の支援を担当する専門部門を設置している」と「日本語学習を専門に支援する体制の整備をしている」が 27.7%であった。



		調査数	担任制を敷いている	留学生の支援を担当する専門部門を設置している	留学生専任の教員(講師)・職員の配置をしている	学習に関する相談体制の整備をしている	日本語学習を専門に支援する体制の整備をしている	生活全般に関する相談体制の整備をしている	国家試験担当教員(講師)の配置をしている	その他	無回答
全体		101	69.3	27.7	9.9	26.7	27.7	35.6	14.9	5.0	18.8
養成校の種類	専門学校	83	74.7	24.1	9.6	22.9	26.5	33.7	16.9	3.6	19.3
	短期大学	12	50.0	25.0	8.3	25.0	33.3	33.3	8.3	16.7	25.0
	4 年制大学	6	33.3	83.3	16.7	83.3	33.3	66.7	0.0	0.0	0.0

・養成校の種類別で見ると、「4 年制大学」においては、複数の指導体制を敷いている傾向にあった。

(6) 実習配属先やアルバイト先の施設・事業所との学習指導に関する連携内容

問 30:貴校では、留学生の実習配属先や、アルバイト先の施設・事業所と、学習指導に関することで、どのような連携をされているか、教えてください。

・留学生の能力やできることについて連携して対応しているといった意見が最も多かった。

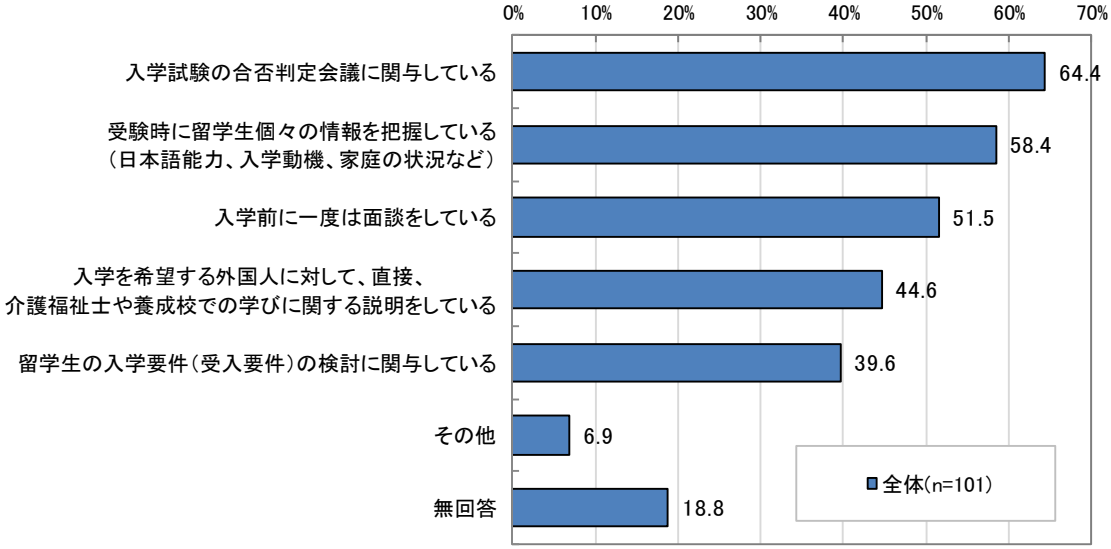
【留学生の実習配属先や、アルバイト先の施設・事業所との連携】

		回答数
実習先・アルバイト先との連携		計 90
	留学生の評価・能力・生活情報等を提供する	35
	実習配属先・アルバイト先に協力を仰いでいる（事前に留学生受入れ依頼・指導依頼をする、実習や試験期間に配慮いただく等）	24
	情報共有の場を設ける・定期的に電話やメールで連絡を取り合う	16
	留学生の現場での様子について共有してもらう	15
講義に関する課題		計 6
	実習先をアルバイト先としている	3
	留学生にアルバイト先を紹介している	3
その他		計 8
	その他	8

(7) 教務主任としての取組内容

問 31:留学生の受入れにあたり、教務主任として取り組んでいることについて教えてください。

・「入学試験の合否判定会議に関与している」が 64.4%と最も高く、次いで「受験時に留学生個々の情報を把握している(日本語能力、入学動機、家庭の状況など)」が 58.4%、「入学前に一度は面談をしている」が 51.5%であった。



		調査数	入学を希望する外国人に対して、直接、介護福祉士や養成校での学びに関する説明をしている	入学前に一度は面談をしている	入学試験の合否判定会議に関与している	受験時に留学生個々の情報を把握している（日本語能力、入学動機、家庭の状況など）	留学生の入学要件（受入要件）の検討に関与している	その他	無回答
	全体	101	44.6	51.5	64.4	58.4	39.6	6.9	18.8
養成校の種類	専門学校	83	48.2	57.8	65.1	61.4	41.0	6.0	19.3
	短期大学	12	25.0	33.3	66.7	41.7	41.7	8.3	25.0
	4 年制大学	6	33.3	0.0	50.0	50.0	16.7	16.7	0.0
養成校教員経験年数	5 年未満	7	14.3	57.1	71.4	28.6	28.6	14.3	14.3
	5 年以上10年未満	21	42.9	52.4	61.9	57.1	47.6	9.5	23.8
	10年以上15年未満	17	64.7	64.7	70.6	76.5	52.9	11.8	11.8
	15年以上	56	42.9	46.4	62.5	57.1	33.9	3.6	19.6
外国人介護人材を指導した経験年数	1 年未満	10	40.0	40.0	60.0	40.0	50.0	10.0	30.0
	1 年以上3 年未満	17	23.5	47.1	58.8	64.7	35.3	11.8	11.8
	3 年以上5 年未満	41	53.7	65.9	68.3	65.9	36.6	2.4	17.1
	5 年以上	33	45.5	39.4	63.6	51.5	42.4	9.1	21.2

・養成校の種類別で見ると、「専門学校」の教務主任においては、その他の養成校の教務主任と比べ、「入学前に一度は面談をしている」の割合が高かった。

・養成校教員経験年数別に見ると、経験年数が長い教務主任の方が、複数の対応について実践している割合が高かった。

第 5 章　授業参観及び動画分析

1. 養成校の予備情報シートの作成

EPA 介護福祉士候補生対象の集合研修の動画を除く養成校の授業撮影動画については、以下の養成校基本情報を作成した。作成にあたっては、事務局が様式を作成したものを各養成校に事前送付し、後日記載・回答いただいたものを事務局で取りまとめた。当該内容は、授業分析時に分析者(作業部会委員)に予備資料として送付した。

図表 32：授業参観校基礎情報シート

<table>
<tr><td>実施日時</td><td colspan="2">2021年　月　日（ ）</td><td colspan="2">：　～　：　（　）分間</td><td>コマ目</td></tr>
<tr><td>科目名</td><td colspan="2"></td><td colspan="3">週目 /１５・３０週*1</td></tr>
<tr><td colspan="2">本日の学習目標</td><td colspan="4"></td></tr>
<tr><td rowspan="3">教員</td><td>氏名</td><td colspan="2">先生</td><td>教員歴</td><td>年</td></tr>
<tr><td>保有資格</td><td colspan="2">介護福祉士・社会福祉士・介護支援専門員
看護師・その他（　　）</td><td>前職*2</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="5">他に担当している科目があれば、お聞かせください。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">クラス</td><td>１・２年</td><td>全体　　名</td><td colspan="2">内訳：日本人：　　名、留学生：　　名</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="5">特徴（明るいクラス、居眠りが多いクラス、1年次から持ち上がり など）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">留学生</td><td>国別</td><td colspan="4">ベトナム　　名、ネパール　　名、中国　　名、フィリピン　　名、
インドネシア　　名、その他（　　）</td></tr>
<tr><td>JLPT</td><td colspan="4">N1　　名、N2　　名、N3　　名、N4　　名、N５　　名、
非該当　　名</td></tr>
<tr><td>質問１</td><td colspan="5">本日の授業目標に対しての達成度をお聞かせください。（先生の主観でOK)</td></tr>
<tr><td>質問２</td><td colspan="5">日ごろの授業運営において、気を付けている点をお聞かせください。
（学生の発言を促す工夫、板書の方法など）</td></tr>
<tr><td>質問３</td><td colspan="5">小テストや期末テストなどの教材で工夫している点をお聞かせください。</td></tr>
<tr><td>質問４</td><td colspan="5">担当している授業内で、国試対策を意識した内容はありますか。</td></tr>
<tr><td>質問５</td><td colspan="5">他職員との情報共有の方法や頻度などを教えてください。</td></tr>
<tr><td>質問６</td><td colspan="5">日本語教員と連携している場合、どのような内容を共有していますか。</td></tr>
</table>

2. 授業分析について

(1) 授業分析シートの作成指導体制

EPA 介護福祉士候補生を対象とした集合研修の動画、養成校の授業参観校の動画を作業部会委員に確認いただくため、以下の内容確認シートを作成した。

当該シートは、動画上で確認する各種講義内で、教員(講師)が留学生等に対して行った指導で「学びを深められるような良対応」があった場合、その具体的内容と、当該行為を良対応と考えるにいたった理由を記載いただく形式となっている。当該内容を取りまとめ、「指導のポイント」作成にあたり、教員(講師)の取るべき対応を抽出するために作成したものである。

図表 33：講義内での教員(講師)が行う良対応についての記載シート

学校名	
科目名	

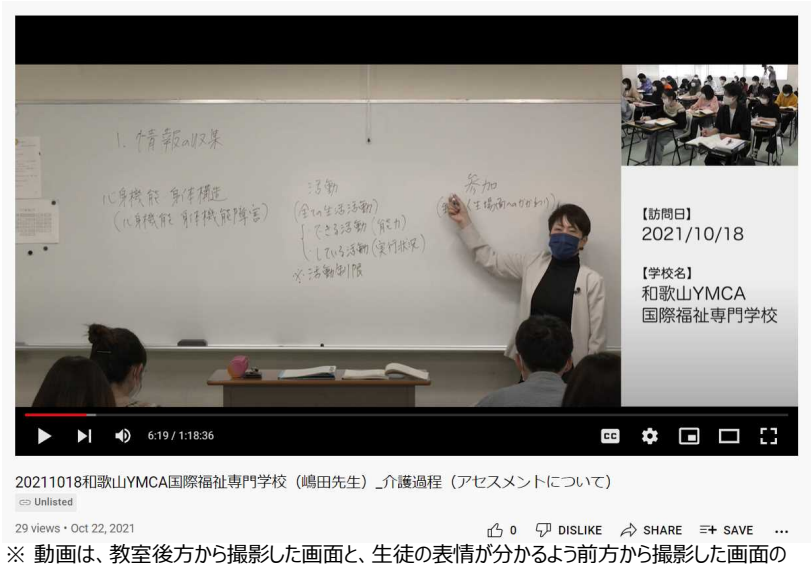
記載者名	

時間	講師の対応の内容	左記対応の良い点
(例) 0:15:20 右記記載のポイントが出てくる動画における箇所	(例) 留学生が内容を理解していないことを察知し、言葉と概念の再確認のために、言葉で説明をするよう促した。	(例) 留学生自らが言葉で説明することで、教員が理解度を図ることができるだけでなく、留学生の知識定着にもつながる。 左記の「講師が行った良い行動」について、どのような点が「良い」とされるのかについて、理由を記載して下さい。

(2) 動画の作成・作業部会委員への確認依頼

EPA介護福祉士候補生対象の集合研修、養成校の授業参観にて撮影した講義動画を編集し、YouTube上に非公開にて投稿したうえで、作業部会委員に当該講義内容の確認をいただいた。確認結果は、上記「①授業分析シートの作成」に記載した分析シートに記載いただいたのち、事務局にて取りまとめた。

図表 34：作業部会委員への動画の提供形式(例として 1 つの動画の見本を掲載)



※ 動画は、教室後方から撮影した画面と、生徒の表情が分かるよう前方から撮影した画面の2 方向画面を合体させ、1 つの動画に編集している

3. 授業分析結果

作業部会各委員からご提出いただいた授業分析シートにて記載されたコメントについて、内容を踏まえコード化し、集計した。

分け方としては、どの領域にもかかるポイントと思われる「1. 指導全般に係るポイント」、および各領域に特徴的な項目であると思われる「2. 領域ごとの指導のポイント」に分けて記載している。

なお、「2. 領域ごとの指導のポイント」について、「領域：医療的ケア」については授業参観をしなかったため、分類には加えていない。また、授業参観の結果から抽出したポイントであることから、当該分類はあくまでサンプルであり、これが指導のポイントの全分類ではないことに留意が必要である。

当該分析結果については、後述「7 章.「指導のポイント」の作成」に記載の「指導のポイント」の掲載項目や記載内容の基礎資料として使用した。

図表 35：授業分析結果(指導全般に係るポイント)

大項目	中項目	件数	詳細（作業部会委員から記載された内容を抜粋）
1．指導全般に係るポイント	やるべき事、学ぶべきこと、復習、注意・注目すべきポイントの理解を促す	51	意識付け。知識の定着。学生に求められることを明確に伝えている。先生の経験からのマークシートのつけ方指導。利用者への接し方。
	繰り返しの説明、専門用語を解説、アンダーラインや印をつけてもらう	39	確認しやすい。口頭で理解できない受講者に視覚的理解を促せる。都度確認で正しく理解できる。改定ポイントに赤ラインを引いている。
	言葉、漢字の理解向上ができるような説明、対応を行う	38	板書、読み仮名をつける。日常使う言葉に置き換えると理解しやすい。「共生」という言葉を選んだ説明が良い。訓読みで意味を理解することで知識と関連付けられる。文字からの理解。
	授業内での教員・留学生の双方向のやり取りを行う	22	留学生に考えさせる。質問に回答させるのは良い。
	ジェスチャー、動作を見せての説明を行う	15	動作で理解しやすい。自身の体の動きを想像させる。
	明確な口調、簡潔な言葉での説明、内容の明示等分かりやすく話す	14	言葉が明確ではっきりして聞きやすい。今何を話しているか伝えることで話題を負いやすい。言い間違いがないと聞きやすく、理解しやすい。
	一人一人に寄り添った指導を行う	13	声掛けをすることで、その場での問題把握・理解・修正が可能。モチベーションアップにつながる。グループワーク前に個別ワークを入れることでまず自分で考えて書く作業をすることができて良い。日本語レベルに合わせた指導・解説方法。
	気づき、やる気を促すよう語り掛ける	13	生活支援技術の確認実施後のコメントについて各グループ終了後にコメントがあって学生の気づきを促すものになっていた。主語を「みなさんが」とすることが理解につながる。
	テキストと問題文の内容との関連付けを行う	9	正解を判断するために必要な知識についてテキストで正しく理解。テキストでの学習の大切さ。
	身近な話題から理解していけるよう説明する	1	パラリンピック開催で障害のところも出題されるのではと促していた。

図表 36：授業分析結果(領域ごとの指導のポイント)

大項目		中項目	件数	詳細（作業部会委員から記載された内容を抜粋）
2．領域ごとの指導のポイント	領域：人間と社会	外国人と日本人の価値観の違いについての理解（領域：人間と社会）を促す	1	「共生」がどのような概念かを取り上げ、意味をかみ砕いて説明していた。
		介護固有のことばの理解（領域：人間と社会）を促す	22	「合理的配慮」を赤丸で囲む。板書した「法令遵守」に読み仮名を記した。「職場体験」＝仕事・就労　ということについて説明。
		日本の法制の改正の流れ・国の歴史等の理解を促す	5	パラリンピック開催の話題に紐づけて障害の話をしていた。
		各種介護保険等サービスの理解を促す	3	サービスの名称を略さずに板書し、そのことについて意図を話していた。地域密着サービスをcommunity basedと表記（地域包括ケアシステムも同様）。介護保険制度の変更点の年代を分けてポイントを板書していた。
	領域：介護	外国人と日本人の価値観の違いについての理解（領域：介護）	1	「浮かない表情」という言葉が利用者のどのような気持ちを表しているか説明
		介護固有のことばの理解（領域：介護）	9	「多角的に」という言葉を「複数の角度から」と言い換える。「膝折れ防止」についてどのような状況を指すのかを言葉で説明する。学生の「全部介助しています」という発話を「全介助」と言いかえた。
		介護過程の理解	9	できる活動としている活動に関する説明で、わかりやすい具体例を出して説明をしている。アセスメントの記述の仕方を、「型」を提示し書き方をわかりやすく指導している。
		理論と実践を紐づけた理解	16	移動移乗の基本的な視点の説明において、自分たちの仕事の場面やそのときに自分たちが行っている動きを例に出して説明している。活動と参加の概念を、学生達の学習と学習への思いにおきかえて説明。
		演習のポイント	47	回の演習の目的を再確認されていた。着脱介助を行う事に注意が向き過ぎているため、目的の再確認を促した。
	領域：こころとからだのしくみ	外国人と日本人の価値観の違いについての理解（領域：こころとからだのしくみ）	9	「埋葬」「火葬」「土葬」「散骨」などの言葉の意味について、日本の伝統的な風俗やその後の変化とその背景などを踏まえて説明。国が変われば高齢期の治療の考え方や死生観が大きく異なることを説明する。
		介護固有のことばの理解（領域：こころとからだのしくみ）	4	「褥瘡」についてわかりやすい言葉に言い替えた。「生じている」を言い換えて説明した。
		解剖生理、人体の構造の理解	10	褥瘡の進行について、発赤→疼痛→壊死→潰瘍について、赤くなって、痛くなって、細胞が死んで、穴が開くと、イメージがわきやすいように説明する。

第 6 章　模擬授業の撮影及び教員研修会の実施

1. 模擬授業の撮影

「第 1 章　事業の概要―2. (5) 模擬授業の撮影及び教員研修会の実施」で記載した方針で模擬授業の撮影を行った。教員研修会参加者には、研修会当日に動画を閲覧(Zoom 上で放映)いただくこととし、授業で撮影したテキストや、模擬授業の教案については事前送付した。

なお、模擬授業教案については付属資料を参照のこと。

図表 37：模擬授業撮影動画(一部サンプル)

2. 教員研修会の実施

「第 1 章　事業の概要―2. (5) 模擬授業の撮影及び教員研修会の実施」で記載した方針で、教員研修会を開催した。

(1) 模擬授業の放映

前述のとおり、撮影した模擬授業を Zoom 上にて放映した。模擬授業の趣旨説明は、動画放映前に、担当教員(講師)から説明を行った。

(2) 模擬授業の解説

放映した模擬授業について、実際に「指導のポイント(案)」の項目に沿って、指導のポイントを解説するため、解説講義を設けた。当該開設講義についても、当協会 HP にて後日公開予定である。

なお、模擬授業の解説の教案については付属資料を参照のこと。

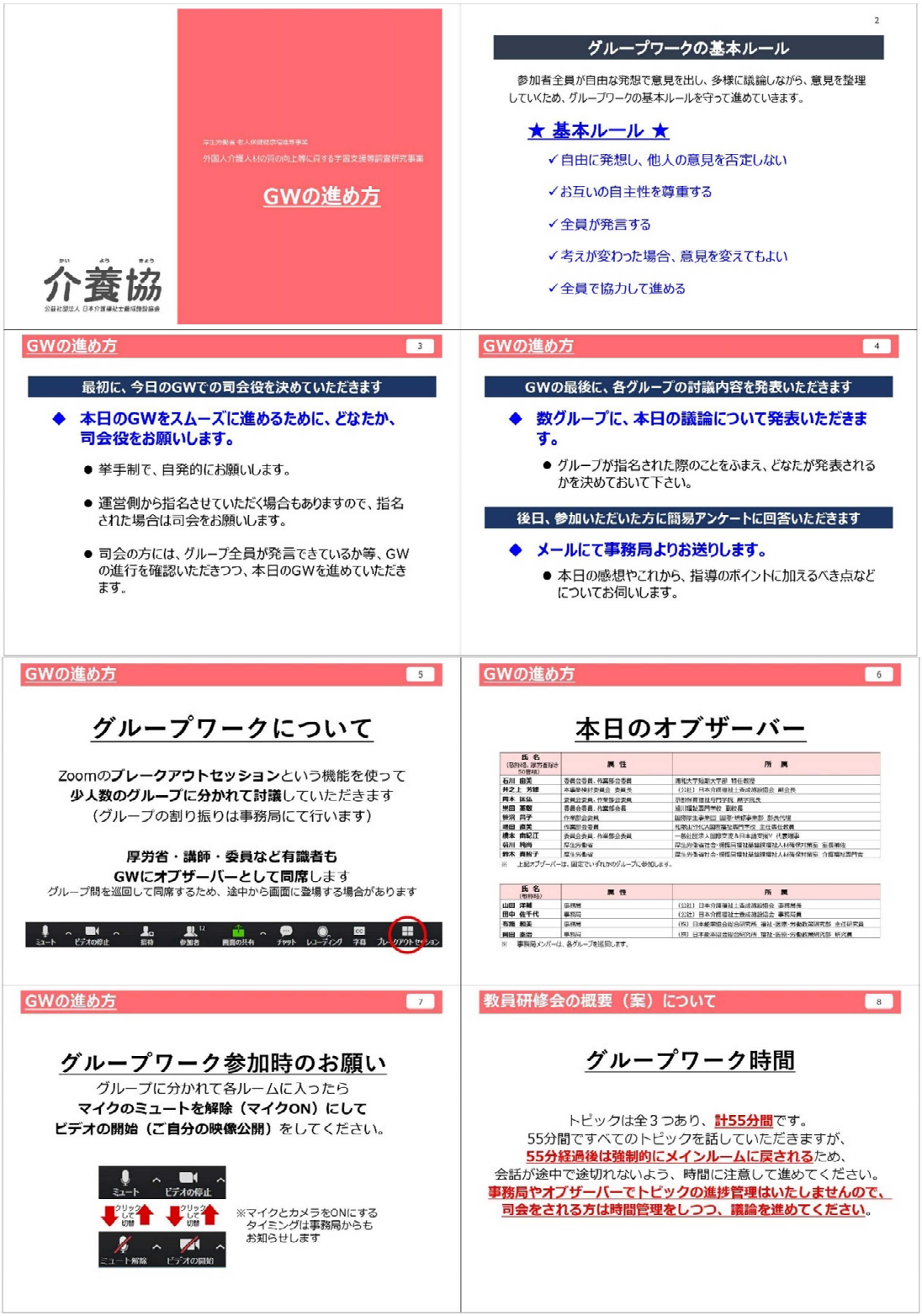
図表 38：模擬授業解説講義概要

項目	内容
授業時間	60分
授業科目	放映した模擬授業の解説
授業担当教員	京都保育福祉専門学院　副学院長　岡本　匡弘氏(本事業委員会委員／作業部会委員)
授業内容	指導のポイント(案)の項目に沿って、指導のポイントを解説。特に、介護教員(講師)同士の科目連携、日本語教員(講師)との連携、講義時に使用する日本語の考え方については詳しく解説する。

(3) 留学生指導に関する教員同士の意見交換

模擬授業、模擬授業の解説の講義を受講していただいた後、教員(講師)同士でのグループワークを実施した。参加者数が 65 名であったため、1 グループ 5～8 名程度の小グループに振り分け、以下の議論を行っていただいた。全グループに、作業部会委員もしくは事務局等メンバーが常駐(オブザーブ)し、当日研修会後に行われる第 4 回作業部会での検討材料とするため、行われた議論の内容を確認した。

図表 39：留学生指導に関する教員同士の意見交換(資料)



GWの進め方 10

トピック０

◆ 司会進行役を決めてください。

- どなたでも構いません！
- 皆さんで議論する時間を確保するため、できるだけ素早く決めてください。

（2分以内）

GWの進め方 11

トピック１

◆ ご所属、お名前を教えてください。
◆ 留学生への指導経験も簡単に教えてください。

- 時間は10分程度でお願いいたします。（必ず全員が発表してください）
- 時間が余ったら、参加者内で質問等をして、議論をしてみましょう。

（10分間）～16:55まで

GWの進め方 12

トピック２

◆ 留学生を指導する際、介護の理解を深めていくことに対し、どのような困難点がありますか。ご自身の担当科目に関することでお話しください。

- 時間は30分程度でお願いいたします。（必ず全員が発表してください）
- 時間が余ったら、参加者内で質問等をして、議論をしてみましょう。

【想定される議題】
・自立支援の概念を理解してもらうのが難しい。
・整容など、現場で求められるレベルをどのように理解してもらうかが難しい。
・学習の理解が進まない点において、日本語の問題によるものか、それとも介護の専門理解が足らないことによるのか判別が難しい 等

（25分間）～17:20まで

GWの進め方 13

トピック３

◆ トピック２で挙げた困難点について、本日の模擬授業、模擬授業解説を踏まえ、ご自身の授業において、今後どのような点を改善していくべきだと思われますか。

- 時間は20分程度でお願いいたします。（必ず全員が発表してください）
- 時間が余ったら、参加者内で質問等をして、議論をしてみましょう。

【想定される議題】
・日本語教師との連携方法で●●を試してみる。
・国試分析について、全員の教員で科目別の傾向をみるようにする 等

（20分間）～17:40まで

GWの進め方 14

まとめ

◆ メインルームに戻り、参加者全員の前で、グループの中から、どのような話し合いが行われたか、発表をしていただきます。

◆ オブザーバーから、皆様に向けて本日のご意見を踏まえた感想をいただきます。

GWの進め方 15

アンケート

◆ 後日事務局から、参加者全員に向けて本日の教員研修会のアンケートを送付いたします。お手数ですが、ご協力をお願いいたします。

第７章　「指導のポイント」の作成

1. 指導のポイントの作成趣旨

当協会では、令和 2 年度事業で作成した「介護福祉士国家資格取得に向けた留学生指導についてのガイドライン」(本文では「ガイドライン」という)にて、学習支援のほか学習環境の整備など養成校に求められる対応を中心にまとめている。本年度令和 3 年度事業で作成した「指導のポイント」は、養成校の留学生のみならず、国家試験受験対象者である EPA 介護福祉士候補者も対象とし、指導する際の前提知識や具体的な指導方法など、教員(講師)の皆様が外国人介護人材を指導するための具体的な指導の在り方をまとめたものである。

留学生をはじめ外国人介護人材の質の向上が図れるよう、介護福祉士養成施設はもとより、関係する教員(講師)の方々に、本指導のポイントを活用いただければ幸甚である。

2. 指導のポイントの項目

「指導のポイント」には、一口メモを多く記載している。この一口メモは、ヒアリング調査で得られた有益な情報である。すぐに実践できる内容が紹介されているため、ぜひ、ご活用いただきたい。また、アンケート調査において、多くの教員(講師)が、留学生の日本語能力には差があり、理解度が低いことを承知しているが、その改善のための有効な対策がわからないという実態が明らかになった。こうした状況を踏まえ、多くの教員(講師)が試行錯誤のなか授業に取り組んでおられる様子を窺い知ることができた。

本書は、日々留学生や EPA 介護福祉士候補者への指導にご尽力いただいている教員(講師)の皆様にとって、指導の方針、見直し等を検討する際の一助となることを願って作成している。

図表 40：指導のポイントの構成内容

章	構成内容
Ⅰ.外国人介護人材の国家試験の得点傾向・解答傾向について	ここでは、第33回国家試験での得点結果から数量分析を行い、合否に与える影響が高い科目などを紹介しています。(1. 国家試験の科目別に見た留学生の特徴) そのうえで、昨年度のガイドライン調査から留学生の生の声を活かし、具体的な誤答の理由を3題提示しています。試験対策を担当される教員(講師)をはじめ多くの教員(講師)に、役立つ内容となっています。(2. 具体的な誤答の理由について)
Ⅱ.指導する際の前提知識	ここでは、Ⅰ.で明らかとなった留学生の傾向を踏まえ、日ごろの指導全般に関して、知っておいていただきたいことを、3項目にして、まとめています。 まず、外国人介護人材へ指導する前の心構えです。(1. 外国人介護人材を指導すること) 次に、ご自身が担当されている科目と他科目との連携の重要性について「求められる介護福祉士像」や「第33回国家試験の得点率データ」等から示し、授業評価の積極的な導入と活用の方法を提案しています。授業参観時に使用できる記載シートのサンプルも掲載していますので、ご参考ください。(2. 講義(授業)の位置付けを考える) 最後に、外国人介護人材に向けた日本語での指導ポイントについて、ガイドラインの記載に加え、さらに内容を充実させました。日本語の専門家がお近くにいなくても誰でもできる内容も示していますので、ぜひ、すぐにでも実践してみてください。(3. 指導する際の日本語の使用)また、Ⅱの内容を「模擬授業」という形で動画視聴ができます。教案資料と併せて、ご自身の授業の振り返りとして、ご参照いただけたらと思います。
Ⅲ.具体的な指導方法	ここでは、外国人介護人材のⅠ.国家試験での傾向とⅡ.指導全般での前提知識を踏まえ、より日ごろの授業に活かせる内容を示しています。学生の理解度を上げる手段、自主学習を促す方法、日本人学生との相互交流、習熟度に差がある場合の工夫など、多様な解決方法を明示していますので、できるところから、試してみてください。(1. 指導全般にかかるポイント) 最後に、ご自身の授業に落とし込んでいただくため、4領域ごとの指導のポイントを記載しました。科目による違いはもちろんありますが、領域ごとの特徴をまずは把握していただき、科目間連携に繋げていく基盤となることも念頭に記載しました。ぜひ、担当領域外の内容を把握するためにも、ご一読ください。

※「指導のポイント」本体は、本報告書別冊を参照ください

付属資料

調査票サンプル：ご回答はWEBからお願いします

令和3年10月

厚生労働省　老人保健健康増進等事業
「外国人介護人材の質の向上等に資する学習支援等調査研究事業」

外国人介護人材を指導される教員（講師）の皆様に対する指導内容に関するアンケート調査

【本調査の目的】
令和7年度（2025年度）、我が国の介護従事者の需要は約245万人と推計されています。これは、同時に、介護ニーズの複雑化・多様化に伴う質の高い介護が求められていることを意味しています。
このことを踏まえ、当協会では、昨年度より厚生労働省の補助事業（外国人介護人材の質の向上等に資する学習支援等調査研究事業）を実施しております。昨年度は、アンケート調査など各種試験調査にご協力いただき、留学生の国家試験における科目別理解度の差や高得点／低得点における傾向など、全体的な傾向を明らかにし、これらの結果を踏まえ、留学生指導におけるガイドラインを作成することができました。ただし、留学生の特性を踏まえた具体的な養成校等での個別対応の内容、その在り方等については、定性的な情報が主となり、体系化までは行えていませんでした。このため、本年度は、外国人介護人材を指導するための具体的な指導の在り方や方策を検討することを目的として実施しており、アンケート調査では、養成校教員のみならず、EPA介護福祉士候補者を指導される教員（講師）の皆様を対象に、指導時の課題や困難等をお尋ねするものです。このアンケート調査の結果を検討・分析し、外国人介護人材への指導時に参考となる指導のポイント（仮称）」冊子の作成を目指しています。
つきましては、本事業の趣旨をご理解いただき、下記のとおり、本調査へのご協力をお願いいたしたく、何卒よろしくお願いいたします。

【本調査の対象】
・全国の養成校のうち，留学生が所属している養成校の介護教員（講師）の皆様
・EPA介護福祉士候補者を対象とした研修をご担当される介護教員（講師）の皆様

【回答期限】
10月21日（木）までに WEBにてご回答ください。

※　本調査では、留学生、およびEPA介護福祉士候補者を総称して「外国人介護人材」と表記しています。

【調査票の取扱いに関しまして】
ご回答いただきました内容につきましては、次のように取扱います。
・ 調査結果については取りまとめを行い、厚生労働省に提出させていただきます。
・ 調査への拒否があっても、そのことで不利益が生じることは一切ございません。

■本調査に関する問合せ先
〒105-0011　東京都港区芝公園3-1-22　日本能率協会ビル5階
株式会社日本能率協会総合研究所　福祉・医療・労働政策研究部
担当：布施、岡田
TEL:（ﾌﾘｰﾀﾞｲﾔﾙ）0120-304-603（平日 10:00～17:00）FAX:03-3432-1837

■本事業の趣旨等に関する問合せ先
〒113-0033　東京都文京区本郷3-3-10 藤和シティコープ御茶ノ水2階
公益社団法人 日本介護福祉士養成施設協会　事務局
担当：山田、田中
TEL:03-3830-0471（平日 10:00～17:00）FAX:03-3830-0472

※全員回答

Ⅰ．貴職についてお伺いします。

問１．あなたの教員（講師）としての属性を教えてください。（あてはまるものいくつでもチェック）
１．養成校教員　⇒**問1-1へ**
２．EPA介護福祉士候補者対象　研修講師　⇒**問1-6へ**

［問1で1.を選択した方］
問1-1．あなたが所属する養成校の4桁の養成校番号（会員番号）を教えてください。（記述式）

養成校の番号（会員番号）	□□□□

［問1で1.を選択した方］
問1-2．あなたが所属する養成校の種別を教えてください。（最もあてはまるもの1つにチェック）
１．専門学校（2年制）
２．専門学校（3年制）
３．短期大学（1年制）
４．短期大学（2年制）
５．短期大学（3年制）
６．4年制大学

［問1で1.を選択した方］
問1-3．あなたの養成校の教員（講師）としての経験年数と、外国人介護人材を指導した経験が何年あるかについて、それぞれ教えてください。（記述式）

養成校の教員（講師）としての経験年数	通算（　　）年
外国人介護人材を指導した経験年数	通算（　　）年

［問1で1.を選択した方］
問1-4．あなたが、現在、養成校に所属しながら、自校の留学生以外の外国人介護人材（EPA介護福祉士候補生等）に対し、どれくらいの頻度で指導をされているか、教えてください。（最もあてはまるもの1つにチェック）
１．週1回以上程度
２．月数回～2・3か月に1回程度
３．半年に1回程度
４．年に1回程度か、それ以下
５．留学生以外の外国人介護人材には指導を行っていない

［問1で1.を選択した方］

問1-5．あなたが、現在所属する養成校で、教員（講師）としてどのようなお立場にあるか、教えてください。（最もあてはまるもの1つにチェック）

1．専任講師
2．非常勤講師

［問1-5で1.を選択した方］

問1-5-1．あなたが、現在所属する養成校で、以下の職務に従事しているかについて教えてください（あてはまるものいくつでもチェック）

1．教務主任
2．領域責任者
3．上記のいずれにも該当しない

［問1で2.を選択した方］

問1-6．あなたのEPA介護福祉士候補者対象　研修講師の経験年数と、外国人介護人材を指導した経験が何年あるかについて、それぞれ教えてください（記述式）

研修講師 としての経験年数	通算（___）年

外国人介護人材を 指導した経験年数	通算（___）年

問2．あなたの保持する資格について、以下に該当するものがあるか教えてください。（あてはまるものいくつでもチェック）

1．介護福祉士
2．社会福祉士
3．介護支援専門員
4．看護師（保健師・助産師）
5．作業療法士
6．理学療法士
7．日本語講師（420時間講座受講、日本語教育能力検定試験合格等）
8．上記のいずれの資格も保持していない
9．その他の資格（具体的に：　　）

［問2で8.以外を選択した方］

問2-1．あなたが、問2．で回答いただいた保持資格を活かした現場経験があるかについて教えてください。（あてはまるものいくつでもチェック）

1．介護・福祉の現場での経験がある
2．医療現場での経験がある
3．日本語学校等日本語を教える現場での経験がある
4．その他の内容（具体的に：　　）
5．現場での経験がない

※養成校教員に該当する方のみ回答

Ⅱ．講義内（時間割内）で行っている指導内容についてお伺いします。

問3．あなたが教員（講師）として留学生に教えている科目（補講を除く、時間割内の講義に該当するもの）と、その開講時期を教えてください。（あてはまるものいくつでもチェック）

1．人間の尊厳と自立
2．人間関係とコミュニケーション
3．社会の理解
4．介護の基本
5．コミュニケーション技術
6．生活支援技術
7．介護過程
8．こころとからだのしくみ
9．発達と老化の理解
10．認知症の理解
11．障害の理解
12．医療的ケア

問4．あなたが、問3．でお答えいただいた留学生に教えている科目（補講を除く、時間割内の講義に該当するもの）について、他科目の教員（講師）と指導内容や指導方法等を連携しているかどうか教えてください。（それぞれ最もあてはまるもの1つにチェック）

担当科目を表示	連携有無（SA）	連携している科目（MA）
担当科目1	連携している・連携していない	担当している科目以外の科目を表示
担当科目2	連携している・連携していない	担当している科目以外の科目を表示
・・・・	連携している・連携していない	担当している科目以外の科目を表示

※↑問3で回答された担当科目をひとつずつ表示し、それぞれご回答いただく

［問4の何らかの科目で「連携している」を選択した方］

問4-1．あなたが、留学生に教えている科目について、他科目の教員（講師）とどのようなことを連携されているかを教えてください。（記述式）

【他科目の教員（講師）との連携内容】

※詳しくご記載ください
（例：理解度の低い留学生の学習の進捗度合いを共有　等）

問5．あなたが感じる、科目間連携の課題について教えてください。（記述式）

※詳しくご記載ください

問６．あなたが、留学生に教えている科目の講義を行う際、介護実習や留学生の行う介護施設・事業所等のアルバイトでの出来事を授業での説明に活かしているかについて教えてください。（それぞれ最もあてはまるもの1つにチェック）

担当科目を表示	活用頻度（SA）	具体的な活かし方（記述式）
担当科目１	１．常に活かすようにしている ２．概ね活かすようにしている ３．時々活かすようにしている ４．あまり活かせていない ５．活かせていない	※1-3の方のみ回答
担当科目２		※1-3の方のみ回答
・・・・		※1-3の方のみ回答

※↑問3で回答された担当科目をひとつずつ表示し、それぞれご回答いただく

問７．あなたが、講義（補講を除く、時間割内の講義に該当するもの）を行う際に、日本語を教える教員（講師）と連携しているかについて教えてください。（最もあてはまるもの1つにチェック）

１．常に連携している　⇒**問7-1へ**
２．概ね連携している　⇒**問7-1へ**
３．時々連携している　⇒**問7-1へ**
４．あまり連携していない
５．連携していない／そもそも自法人・施設には日本語を教える教員（講師）と関わりがない

［問7で1.-3.を選択した方］

問7-1．あなたが、日本語を教える教員（講師）と講義内（時間割内）でどのように連携しているかについて教えてください。（あてはまるものいくつでもチェック）

１．自らの講義に同席いただき、講義の中で適時、言葉等の補足をもらっている
２．自らの講義に同席いただき、講義終了後、話し方、言葉遣い等のアドバイスをもらっている
３．講義で使用する教材の語彙や文章、自分が使用する語彙などについて、意味説明のアドバイスをもらっている
４．補助教材を作成する際に、日本語面での確認をしてもらっている
５．講義の教案や細案が留学生にとって分かりやすいかアドバイスをもらっている
６．留学生の日本語の課題・問題について相談している
７．シラバスの内容、科目のねらいや到達目標を共有している
８．介護福祉士国家試験内容を踏まえた日本語指導をしてもらっている
９．日本語の教員の授業に出席し、表現などを参考にしている
10．日本語の理解不足のために、授業内容が理解できていない留学生の見きわめをしてもらっている
11．その他の内容（具体的に：　　）

問８．あなたが感じる、日本語を教える教員（講師）との連携についての課題を教えてください。（記述式）

※詳しくご記載ください

問９．あなたが講義で留学生の理解度を高めるために使用している教科書以外の教材について、担当科目ごとに教えてください。（あてはまるものいくつでもチェック）

担当科目を表示	教材種別（MA）	具体的な活かし方（記述式） （例：前期はすべてにルビをつけているが、後期からはつけていない。日本語能力の低いクラスでは、穴埋め式の資料を多くしている　等）
担当科目１	１．総ルビ付き教材 ２．写真等、視覚的に理解を図る教材 ３．ミニテスト ４．穴埋め式教材 ５．母語や英語等が併記された教材 ６．関連語句、重要語彙等の一覧表が記載された教材 ７．シュミレーター、モデル人形などの教材 ８．言葉の意味や内容を確認するための電子機器などの教材 ９．講義内容を簡略化等わかりやすく加工したパワーポイント等 10．教科書以外の教材は使用していない	※10以外の方が回答
担当科目２		※10以外の方が回答
・・・・		※10以外の方が回答

※↑問3で回答された担当科目をひとつずつ表示し、それぞれご回答いただく

問10．あなたが、国家試験対策について、ご自身の担当科目の開講後どの時期から行っているか教えてください。また、それぞれの時期ごとに、授業で国家試験対策として行っている取組について教えてください。なお、担当科目が複数ある場合、どれか1つの科目を選択していただき、その科目についてお答えください。

●担当科目の選択（　　）※問３で選んだ担当科目を選択肢として掲載（SA）

国試対策開始時期	講義で行っている国家試験対策の工夫や取組み（記述式）
１．１年次　前期	※左記で回答した項目以降のリストを表示させ、それぞれの時期でどのような対応を行っているか回答いただく → ２．を回答いただいた場合は、２．３．４．それぞれ記述する） ※問1-2の回答内容によって選択肢の表示を変更する。 2年制の場合は1-4のみ、3年制の場合は1-6のみ、 4年生の場合は1-8。
２．１年次　後期	
３．２年次　前期	
４．２年次　後期	
５．３年次　前期	
６．３年次　後期	
７．４年次　前期	
８．４年次　後期	

問11．あなたが、留学生の理解度を高めることを目的として宿題や課題を出している場合、その内容と、あなたが宿題や課題を作成する際に行っている工夫を教えてください。（記述式）

【宿題や課題の内容】

※詳しくご記載ください

【宿題や課題を作成する際に行っている工夫】

※詳しくご記載ください

問12．あなたが、留学生が行う自己学習に対し、どのような指導を行っているかについて教えてください。（記述式）

【留学生の自己学習についての指導内容】

※詳しくご記載ください

※養成校教員に該当する方のみ回答

Ⅲ．補講（時間割外）で行っている指導内容についてお伺いします。

問13．あなたが、現在所属する養成校にて、補講を担当されているかについて、教えてください。（最もあてはまるもの1つにチェック）

1．補講を受け持っている　⇒**問13-1へ**
2．補講は受け持っていない

［問13で1.を選択した方］

問13-1．あなたが教員（講師）として留学生に教えている補講の科目と、なぜその科目が補講として開講されているかについての理由を教えてください。（あてはまるものいくつでもチェック）

担当する補講の科目	開講理由（MA）
1．人間の尊厳と自立	1．介護実践等に関する事柄を追加で指導するため 2．理解の進捗が芳しくない生徒を指導するため 3．期末テスト・模擬試験等の成績が良くないため 4．国家試験の傾向・対策を踏まえた追加講義が必要であるため 5．学生から開講の要望があったため 6．講義時間ではカリキュラムを消化しきれないため 7．留学生都合による欠席があったため
2．人間関係とコミュニケーション	
3．社会の理解	
4．介護の基本	
5．コミュニケーション技術	
6．生活支援技術	
7．介護過程	
8．こころとからだのしくみ	
9．発達と老化の理解	
10．認知症の理解	
11．障害の理解	
12．医療的ケア	

※それぞれについて、開講理由を選択いただく

問14．あなたが、補講を行う際に、日本語を教える教員（講師）と連携しているかについて教えてください。（最もあてはまるもの1つにチェック）

1．常に連携している　⇒**問14-1へ**
2．概ね連携している　⇒**問14-1へ**
3．時々連携している　⇒**問14-1へ**
4．あまり連携していない
5．連携していない／そもそも自法人・施設には日本語を教える教員（講師）と関わりがない

［問14で1.-3.を選択した方］

問14-1. あなたが、日本語を教える教員（講師）と補講等でどのように連携しているかについて教えてください。（あてはまるものいくつでもチェック）

1．自らの講義に同席いただき、講義の中で適時、言葉等の補足をもらっている
2．自らの講義に同席いただき、講義終了後、話し方、言葉遣い等のアドバイスをもらっている
3．講義で使用する教材の語彙や文章、自分が使用する語彙などについて、意味説明のアドバイスをもらっている
4．補助教材を作成する際に、日本語面での確認をしてもらっている
5．補講の教案や細案が留学生にとって分かりやすいかアドバイスをもらっている
6．留学生の日本語の課題・問題について相談している
7．補講を実施する理由、補講内容のねらいや目標を共有している
8．介護福祉士国家試験内容を踏まえた日本語指導をしてもらっている
9．日本語の教員の授業に出席し、表現などを参考にしている
10．日本語の理解不足のために、授業内容が理解できていない留学生の見きわめをしてもらっている
11．その他の内容（具体的に：　　）

※全員回答

Ⅳ．外国人介護人材にかかる指導全般に関する事柄についてお伺いします。

問15．あなたが外国人介護人材へ講義を行う際、以下の日本語に関する対応に関してどの程度実践できているか、また、対応についてどの程度自信があるか、それぞれの項目ごとに教えてください。（それぞれ最もあてはまるもの1つにチェック）

日本語についての工夫	実践度（SA）
1．外国人介護人材がどのような言葉を知っているか意識して対応する	1．常に実践している 2．概ね実践している 3．時々実践している 4．あまり実践できていない 5．ほとんど実践できていない
2．外国人介護人材の日本語レベルに合わせて話す言葉を意識して対応する	
3．標準語で話す	
4．「です・ます体」を使い、省略しないで話す	
5．文節と文節の間にポーズ（間）を入れる	
6．伝わらなかった単語を言い換える	
7．長い文を使わずに、短い文に分けて話す	
8．理解したか確かめるため、質問をし、答えてもらう	

※それぞれについて、実践度を選択いただく

日本語についての工夫	対応に関する自信度（SA）
1．外国人介護人材がどのような言葉を知っているか意識して対応する	1．自信がある 2．やや自信がある 3．どちらともいえない 4．やや自信がない 5．自信がない
2．外国人介護人材の日本語レベルに合わせて話す言葉を意識して対応する	
3．標準語で話す	
4．「です・ます体」を使い、省略しないで話す	
5．文節と文節の間にポーズ（間）を入れる	
6．伝わらなかった単語を言い換える	
7．長い文を使わずに、短い文に分けて話す	
8．理解したか確かめるため、質問をし、答えてもらう	

※それぞれについて、対応の自信度を選択いただく

問16．あなたが外国人介護人材へ講義を行う際、外国人介護人材が内容を理解できるために行っている工夫について、教えてください。（記述式）
※問14で回答された日本語の工夫でなく、指導時の工夫点を記載してください

【講義内で行っている工夫】

※詳しくご記載ください
（例：重要なワードは音読してもらう、「分かりません」と言える雰囲気を作る　等）

【講義外で行っている工夫】

※詳しくご記載ください
（例：学習管理、生活管理の具体的方法、等）

問17．あなたが、外国人介護人材の学習へのモチベーションを高めるため、行っている工夫を教えてください。（記述式）

【もともと学習へのモチベーションが高い外国人介護人材に対し、モチベーションを維持するために行っている工夫】

※詳しくご記載ください

【あまり学習へのモチベーションが高くない外国人介護人材に対し、モチベーションを上げるために行っている工夫】

※詳しくご記載ください

問18．あなたが、外国人介護人材を指導していくうえで、これまで参加された講習・研修・勉強会について、以下のテーマに該当するものがあるか、教えてください。（あてはまるものいくつでもチェック）

1．外国人介護人材の受入れの仕組み（在留資格等）にかかるテーマ
2．外国人介護人材の身分と権利擁護等の法制にかかるテーマ
3．外国人介護人材への介護知識指導（国家試験対策含む）にかかるテーマ
4．外国人介護人材への介護技術指導にかかるテーマ
5．外国人介護人材への日本語の指導にかかるテーマ
6．外国人介護人材への生活サポート・生活全般（災害時対応含む）にかかるテーマ
7．異文化理解（文化・風習・信仰等）にかかるテーマ
8．外国人介護人材のモチベーション管理等の対応にかかるテーマ
9．その他のテーマ（具体的に：　　）
10．いずれのテーマの講習・研修・勉強会にも参加したことがない

問19．あなたが、これまで学生（日本人学生・留学生ともに）から授業の評価を受ける機会があったかについて教えてください。（最もあてはまるもの1つにチェック）

1．授業評価を受ける機会があった⇒**問19-1へ**
2．授業評価を受ける機会がなかった

［問19で1.を選択した方］

問19-1．授業評価を受けた結果を受け、留学生の指導に関して何らか授業内容を改善された場合、その内容について教えてください。（記述式）

【授業評価を受けた結果、改善した点】

※詳しくご記載ください

［問1-4で5.以外を選択した方］

問20．あなたが、留学生以外の外国人介護人材（EPA介護福祉士候補者等）の指導時に得た経験の中で、どのような事柄を留学生指導に役立てているかについて、以下それぞれ教えてください。（記述式）

【役立っている事柄：介護の授業（補講含む）に活かせる事柄】

※詳しくご記載ください

【役立っている事柄：国家試験対策に活かせる事柄】

※詳しくご記載ください

【役立っている事柄：日本語全般について活かせる事柄】

※詳しくご記載ください

問21．あなたが、外国人介護人材を国家試験合格に向けて指導するうえで課題であると感じていることを教えてください。（記述式）

【介護の授業（補講含む）についての課題】

※詳しくご記載ください

【国家試験対策についての課題】

※詳しくご記載ください

【日本語全般についての課題】

※詳しくご記載ください

【所属する養成校の留学生の受入れ体制についての課題】

※養成校所属者のみお答えください

※詳しくご記載ください

【上記以外のその他の事柄についての課題】

※詳しくご記載ください

※養成校教員、かつ教務主任に該当する方のみ回答

Ⅴ．貴校についてお伺いします。

問22．貴校でのカリキュラム・時間割が、学習の順序性を意識して体系的に教授できるよう組み立てられているかについて教えてください。（最もあてはまるもの1つにチェック）

1．意識して組み立てられている　⇒**問22-1へ**
2．意識して組み立てたいが、諸事情により実現できていない　⇒**問22-2へ**
3．いままで意識したことがない

［問22で1.を選択した方］

問22-1．どのようにカリキュラム・時間割を意識して組み立てているかについて、教えてください。（記述式）

【意識している点】

※詳しくご記載ください

［問22で2.を選択した方］

問22-2．どのようにカリキュラム・時間割を組み立てたいか、教えてください。（記述式）

【組み立てたいカリキュラム】

※詳しくご記載ください

【組み立てたい時間割】

※詳しくご記載ください

問23．貴校でカリキュラム・時間割を組み立てる上での課題があれば、教えてください。（記述式）

【カリキュラム・時間割を組み立てるうえでの課題】

※詳しくご記載ください

問24．貴校で、カリキュラムマップを作成しているかについて教えてください。（最もあてはまるもの1つにチェック）

1．作成している
2．作成していない

問25．貴校で、カリキュラムツリーを作成しているかについて教えてください。（最もあてはまるもの1つにチェック）

1．作成している
2．作成していない

問26．貴校で、指定科目以外に国家資格取得に資する科目（※1）を開講されているかについて教えてください。（最もあてはまるもの1つにチェック）

1．開講している　⇒**問26-1へ**
2．開講していない

（※1）「調理実習」や「レクリエーション」、「日本語能力」「日本の文化」等、介護福祉士としての実践力向上を意図して設定された科目を指します。

［問26で1.を選択した方］

問26-1．問26.でご回答いただいた科目について、具体的な科目名／必修・選択の扱い／対象学生と、当該科目がどのように国家資格取得に関連しているのかについて、具体的に教えてください。

科目名（記述式）	必修･選択区分（SA）	対象（SA）	どのように国家資格取得に関連しているか（記述式）（例：生活支援技術だけでは、十分に栄養調理が理解できないから、介護の日本語理解の促進が必要だから　等）
	1．必修 2．選択	1．全学生 2．留学生のみ 3．日本人学生のみ	

※最大5つ程度回答いただけるように枠を作成

問27．貴校で、国家試験に特化した授業や補講が開講されているかについて教えてください。（あてはまるものいくつでもチェック）

1．定期の時間割に位置づけて、国試対策の授業を開講している
2．定期の時間割以外で、補講や集中講義として開講している
3．開講していない

問28．貴校のクラス体制について、留学生と日本人学生のクラスを分けているかについて教えてください。（最もあてはまるもの1つに○）

1．完全にクラスを分けており、日本人学生と留学生が共に受講する授業はない
2．授業によって、日本人学生と留学生のクラスを分けている
3．クラスは分けておらず、日本人学生と留学生が共に授業を受けている
4．日本人学生は所属していない

問29．貴校での、留学生に対する指導体制について、以下の項目で該当するものがあるか教えてください。（あてはまるものいくつでもチェック）

1．担任制を敷いている
2．留学生の支援を担当する専門部門を設置している
3．留学生専任の教員（講師）・職員の配置をしている
4．学習に関する相談体制の整備をしている
5．日本語学習を専門に支援する体制の整備をしている
6．生活全般に関する相談体制の整備をしている
7．国家試験担当教員（講師）の配置をしている
8．その他（具体的に：　　）

問30．貴校では、留学生の実習配属先や、アルバイト先の施設・事業所と、学習指導に関することで、どのような連携をされているか、教えてください。（記述式）

※詳しくご記載ください

問31．留学生の受入れにあたり、教務主任として取り組んでいることについて教えてください。（あてはまるものいくつでもチェック）

1．入学を希望する外国人に対して、直接、介護福祉士や養成校での学びに関する説明をしている
2．入学前に一度は面談をしている
3．入学試験の合否判定会議に関与している
4．受験時に留学生個々の情報を把握している（日本語能力、入学動機、家庭の状況など）
5．留学生の入学要件（受入要件）の検討に関与している
6．その他（具体的に：　　）

以上でアンケートは終了です。
ご協力ありがとうございました。

令和３年度老人保健健康増進等事業
外国人介護人材の質の向上等に資する学習支援等調査研究事業
ヒアリング

「人間と社会」領域に関して

日時		令和４年１月７日(金)14:00～15:00
場所		ZOOM
出席者	ヒアリング対象	養成校Ｂ
	傍聴者	厚生労働省 社会・援護局福祉基盤課　福祉人材確保対策室　翁川氏 社会・援護局福祉基盤課　福祉人材確保対策室　鈴木氏
	事務局	介養協　山田・田中　　日本能率協会総合研究所　岡田

1.学生数および外国人留学生の構成

１年生　うちインドネシア１名　N3
２年生　うちミャンマー人1名 N1 、3名 N2、ベトナム人１名　N3　合計６名

2.外国人留学生受入れの考え方

○国別の違い・知識の概念について

特に国ごとによって理解がしにくいということはない。日本ではこのような考え方である、ということを話して理解してもらう。また、それぞれの留学生の母国ではどうか？と質問を投げかける。日本はこういった国だからというのを押し付けるのではなく、それぞれの母国の状況も聞き、親近感を持ってもらえるように話を進める。

○留学生の個別対応の方法について

毎朝、教員全員で行う朝礼で１日のスケジュール確認をしたあと、最近の学生の動向をそれぞれの教員から主に担任を中心として話を挙げる。授業態度、学生の表情、少し違った変化があるとき情報を挙げる。そこから一度学生と面談の機会を持つ。１回切りの面談ではなく、定期的にその後の経過を見ながら面談を行ったことも情報共有する。常に学生の情報共有を意識して行っている。

学習意識が低いと思われる学生は、居眠りやノートも取らない、表情が暗い。その場合、個人面談を行う。授業についていけない場合、放課後の時間に補講を行い分からないところを確認している。

○各科目を留学生が横断的に理解できるための工夫について

レベルが高い学生が必ずしも入学してこない。このため、言葉の意味を丁寧にゆっくり話したり、少し砕いて話をしないと理解が難しい場合がある。専門用語は砕いて説明するほか、漢字の意味を説明する。根拠を説明し、「なぜ・どうして」を特に重点的にゆっくりと言葉の意味を説明する。必要性を学び、理解が深まることをねらいとし、意識して対応している。

また、実習は体験とつながってくるところである。さらに、それに関連して難しくなった授業が入る流れになっているため、教科書の構成等をうまく使いながら授業構成を考えている。実習を経て初めて、横断的な意味合いを学生が理解できる。現場の方々の意見を言ってもらうことで、理解が深まることとなる。

3.活用する教材について

○補助教材について

テキスト以外に、中央法規の「国試ナビ」を使用している。当該教材を分かりやすく時間をかけて説明し、学生全員が理解できたら次に進む、という繰り返しである。学生の理解についての判断は、重点的に学生の表情を見ながら説明を続ける等、表情で判断している。

○理解度の確認テストについて

授業ごとに、15 分～20 分程度でできる小テストを繰り返す。小テストをすることで常日頃から勉強をするという意欲、環境を作るという意味で、大変重要である。各科目が小テストを行い、その結果を全教員に情報共有する。

○映像教材について

「人間の理解」については人権や尊厳を学ぶ。これについては、テキストより新聞や映像などを通して、学生も情報収集しながら理解を深めていくことが効果的である。

4.「人間と社会」を学ぶ時期について

社会の理解Ⅰは１年生から始まり、１年間、通年科目。社会の理解Ⅱは２年生から通年科目。実習は 450 時間のうちの最初 240 時間をデイサービス、次が地域密着型。その次が障害、その後が高齢者施設で、ここで介護過程が入る。情報収集をメインにした高齢者宅実習があり、２月末から３月にかけて訪問をする。２年生は前期の通年科目が終わり、夏休みに 28 日間の介護過程の展開と総まとめの実習を1カ月行う。

5.「人間の尊厳と自立、介護の基本」について

○介護に対する考え方の違いについて

日本人の中でも違いは見受けられる。自分の中で解釈して受け入れることにより、介護観、理念観というものが専門家として持っていなければならないものに少しずつ変化している。

外国人の方は、介護＝お世話というところにとどまっているところが多い。日本の介護での世話ということ以上に支援というところの理解ができない留学生が多くいる。実際に介護を行っている中で、ただおむつを交換する、食事を介助するというところのお世話でとどまってしまっている介護観ができてしまっているため、そうではないことを繰り返し説く必要がある。

○自立支援の考え方について

自立支援、尊厳ということはキーワードとして挙げている。学生に対しては、実習時に現場にて肌で自立支援や尊厳を感じてほしいと伝えているが、実際目の前で行われている介護が学校で学んだようなものでなかったとショックを受ける場合もある。そのような場合は、「あなた方の持っている感情は、日々学校での勉強をしっかり理解しているからこそである。そのショックな気持ちというのは間違いではない」という話をしたうえで、「ただ、なかなか介護の現場の質がそこまで追いついていないのも現状であることを十分理解しなさい」と説明するようにしている。特に、２年間勉強したことを、今度は実践するという立場で、その活躍を期待しているということについては、どの科目、どの教員も繰り返し伝えている。このため、嫌でも頭の中は支援という形に置き換わっていると思う。

6.「社会の理解」について

○社会の理解の教え方について

福祉の法制度に関しては、社会情勢、時代の背景の理解ができないと頭に入らない。今の留学生も含め、日本の学生も同じような状況。基本は教科書に沿って説明する。教科書に細かく書かれていないところの社会情勢を詳しく説明し、そこで学生が理解できたかどうかの確認を取ったうえで、法律はこういう内容ですよということを特に時間をかけて説明をしている。社会の理解の１に関しては介護保険制度と障害者総合支援法の２つの大きな介護に関する法律を授業で行う。介護保険制度も仕組みを理解することが必要。障害者総合支援法に関しては特に苦手意識を持つ学生がいる。社会の理解の１に関しては、倍の時間をかけて授業を行い理解してもらえる努力をしている。

社会という捉え方自体、いろいろな意味が出る。学生に社会の捉え方を教える中で、身近なところから捉え方を理解してもらうために、まずは学校という場所も社会であることや、、就職したら必要となる保険料や、病気や怪我をしたら病院に行く、そういったところで理解をもらえるよう努力をしている。どれだけ理解できたかどうかを確認するために単元ごとに小テスト(10 問程度)を行い、個々の学生の理解度を把握する。小テストはある程度の得点が取れるまで繰り返しテストを行う。

○特定の概念の事前説明の必要性

社会という科目自体に苦手意識を持つ学生が多い。新聞などを確認しながら介護に関する記事があったら、歴史だけではなく今の日本の中での介護の動きというのをしっかり捉え、社会を理解していくことに繋げる。暗記をするだけではな

く、今後どう変わっていくのかということを自分たちで推測しながら、少しずつ理解を深めるようにする。

○自分の生活と引き寄せて理解するような伝え方、教え方について

社会保険に関しては、体調が悪くなったら病院に行き、保険証持っていく。それが医療保険であると教えている。年金も、それぞれ支援先のほうで年金の保険料をかけているのか、自分でかけているのかは留学生の方も十分理解をしている。雇用保険、労災保険に関してはこれから働いたときに必要になってくるものであるという話をする。人生設計の中でこれからのリスクを考えた中で話を進めると教科書の内容ではなかなか理解しがたいところが理解につながっていると思われる。

○留学生に向けた特徴的な「社会の理解」の指導方法

社会の理解については、サービスの名前がたくさん出てくるため、それぞれのサービスについて留学生が理解できず、混乱する。実習で目の当たりにすることにより、頭の中でつながっていく学生もいる。実習をすることにより、理解が深まる学生は多い。

社会保障という捉え方は広いため、社会保険、公的扶助の理解が難しい。国試対策をする中で、ようやくつながってきた。常に社会の理解の２と国試対策というのは大体並行し、もう一度社会保険の内容などの確認をする。それで理解が足りない場合は改めて時間を作り説明等をするよう心がけている。

実習に行く前は、種別の特徴や機能を事前学習して、実習先で初めて確認をする。施設の機能や特徴を学び、理解を深め、事後の学習を深めていく。

留学生においては、語学力の問題がある。法律・医学的なことも漢字である程度、概略をつかむ指導も行っている。なぜこれが必要になったかという説明をする。基本的なことを抑えた上で、国家試験対策につなげていくということが理解につながっていると思われる。

○日本人と留学生の価値観の違いに対する指導について

虐待防止法について、ミャンマーの留学生が、「日本では高齢者・障害者を虐待する者が存在する」という事実にショックを受けたということがあった。そのような事象自体が、ミャンマーには存在しない。日本は法律として確立されているため、そのような法律を作らなければいけないという事実にショックを受けたとのこと。このように、留学生のもつ背景もしっかり捉え、それに合わせて指導していくことが、社会の理解をする中で一番重点している点である。

7.科目間の連携について

○教員間での共有について

各担当科目も違い、内容も変わる。授業の進路、学生の理解度を常に情報共有しながら各教員が連携しながら授業を進めている。留学生が理解に苦しんでいる場合、その状況や、小テストの結果も全員で確認しながら、授業を行っている。

○非常勤講師との連携と工夫について

非常勤講師にまずは学生の状況を定期的にお伝えする。常勤講師から非常勤講師に対し、成績や小テストの状況を聞いている。その中で学生が理解に苦しんでいることを把握するよう心がけている。非常に密に連携が取れていると感じる。

8. 介護教員の日本語の使い方に関する工夫について

○日本語講師の連携・工夫について

日本語講師とは全く連携を取れていない。介護教員が留学生一人一人と向きあう時間を持ちながら、国家試験でよく出てくる言葉や教科書で難しいと思う言葉をピックアップし、一つ一つ確認していく時間を作るようにしている。

教科書で何度も出てくる言葉は決まっているため、教科書と国家試験の問題集などを照らし合わせ、理解出来ているかという確認から始める。どうやった使い方が普段話をするときに使われているのかについて、具体例を出しながら確認をしている。

○留学生のための補助教材の作成に関する工夫について

基本的にはルビつきのもので資料を作成する。基本は教科書に忠実に行っている。教科書に書いてある言葉と別途作成したプリントに書いてある言葉が違うと混乱する留学生もいるため、統一した言葉を使うようにしている。

【事務局所感】

介護の概念を理解するということについては、「外国人だから理解しづらい」との点は特にないとのことであったが、自立支援の考え方等については介護＝お世話といった留学生のもつ価値観をどのように変えるかについて、日ごろから何度も説明する等で指導をされているとのことであった。このように、どの教員の方も、留学生１人１人に対し、全教員で理解状況・進捗状況を確認し、個別で指導していく体制を構築していることがうかがえる。日本語の問題、介護に関する問題のいずれにせよ、補講・個別指導を通して「分からない」を１つずつ潰していく、という点に注力されている。

また、全体を通し、留学生に効果がある特徴的な指導としては、以下２点が挙げられる。

①自分のこと、身近なことに置き換えて介護科目を理解してもらう

- 「社会」の理解を留学生の所属する学校に置き換えて説明する等、身近なものに置き換えて理解できるよう各教員が意識して専門知識の説明を行う。

②学生１人１人に対して行う細やかな理解度の確認

- 授業、授業外でも学生の表情を見ながら理解度を確認し、理解できていない場合はその場で解消できるように対応しているだけでなく、各科目において度重なるミニテストを活用し、理解漏れがないよう対応している。

また、日本語教員とは連携していないとのことであったが、教科書・国試で登場する日本語について、教員が抽出して留学生に指導し、それらについてもミニテスト等を活用して細やかに理解度を確認していく等の工夫がみられる。また、これらミニテストの確認結果、学生の日ごろの態度や勉強の進捗など、非常勤講師も話に入れ、教員全体で生徒１人１人について詳細に情報共有し、教員全体で生徒をサポートする姿勢がみられる。このような細やかなサポート、漏れのないサポートが、留学生含む学生の専門知識の理解力向上に効果を生み出していると示唆できる。

以上

令和３年度老人保健健康増進等事業
外国人介護人材の質の向上等に資する学習支援等調査研究事業
ヒアリング

「介護」領域に関して

日時		2022 年 1 月 8 日(土)19:00～20:00
場所		ZOOM
出席者	ヒアリング対象	養成校 C(別途授業参観でも訪問)
	傍聴者	厚生労働省 社会・援護局福祉基盤課　福祉人材確保対策室　翁川氏
	事務局	介護協　山田・田中　　日本能率協会総合研究所　岡田

1.学生数および外国人留学生の構成

１年生　ベトナム　13 名(うち１名が男性)、フィリピン　１名、インドネシア　２名
※入学時には N2 保持。やむなく N2に達していない学生も数名はいる。
２年生　16 人　うちベトナム人 12 名、中国人１名、フィリピン人１名
JLPT:N1 が２名、N2 が 10 名、他４名は日本留学試験 200 点以上ということで N2 相当

2.指導全般について

○「書く」ことへの指導

読解力自体については、留学生だから、日本人だからといった違いはあまり感じない。ただし、留学生に関しては、読解には時間がかかるため、ルビ打ち教材を使用している。外国人、特に非漢字圏の方は書くことが苦手だが、重要なことなので、書き取りとしての記述例を挙げ、文章を真似て練習させる。日本人と留学生が交じったグループワークで話し合いしながら文章を書いてもらい、添削を繰り返して数回書かせる。特に留学生は「てにをは」を間違う学生が多い。※参考までに述べれば、ケアマネジャーの専門課程の研修等へ行くと、文章を書けない方が多い。具体的には、ケアの気づきとその根拠、またその結果から今後どのようなことが予想されるのかというような起承転結について書けない方が多く、これらを書けるようにということで、「書く」ことについてはこだわりを持って指導している。

○パワーポイントを使わない授業

授業ではパワーポイントはできるだけ使わないようにしている。パワーポイントでは教員が一方的にしゃべるばかりになってくるため、板書をしながら学生のレベルに合わせてぽっと書く。ただし、行書ではなく、できるだけ楷書で書くように気を付けている。

なお、パワーポイントは外国人の授業であればあまり使わない方がいいかと思う。パワーポイントを使ってしまうと、それを写すことで授業を受けた感が出てしまい学生が、受け身になると思う。また、学生たちがパワーポイントを見る時間がもったいないと思う。板書であれば、ぱーっと書いて、「はい消すよ、できた？書けた？はい、消します」、「はい、はい、書くよ、書けた？はい消します」というふうに、学生のペースに合わせることができる。たまにパワーポイントを使うが、そんな場合はできるだけシンプルに作っている。でもやはり板書はする。特に生活支援技術の国試対策をする時には、絵を描く場合もある。でも私には絵心がないので、びっくりするような絵を描く。学生はそれで笑ってくれながら写している。そのやり取り。パワーポイントではそれがびしっとしたものになってしまうから、あまり気持ちが伝わらないかなというのはある。

○個々の学生の理解力の差の要因

個々の学生の理解力の差については、外国人だから理解できないということは決してない。留学生においては、日本語能力があるかないかにつきる。

○成績が悪い要因は何か

当校の場合は、成績が悪い、危ない学生においては、要因として「理解力がない」ということに尽きる。勉強はしていても、他の学生より理解できていない、理解力がない。このような学生に対しては指導に時間が掛かるものだという前提をとって、実際に教員は手間を掛けている。

また、日本語能力があっても、理解に時間がかかる学生というのは存在し、そのような学生は、日本人であろうと留学生であろうと、他の学生に比べ相当指導に時間がかかる。この点を教員も覚悟し、実際に補講、個別指導等でたくさんの時間をかける。経験上、N1・N2を取得している学生はやはり元々の理解力が高いと言える。

○日本人のみの場合、日本人と外国人のいる場合、全員外国人の場合を想定した工夫点

外国人がたくさん在籍するクラスと、そうでないクラスを指導する際の違いを考えるとしたら、あまり授業内容は変わらないと思う一方、外国人が多いクラスの方では、イラストを描くことが増えると思う。スピードは現状(模擬授業撮影時の授業を参照)以上遅くできない。板書の量も減らせない。

○日本人であれ留学生であれ、何も知らないことを前提とした指導を行う

高卒の日本人の学生などは、びっくりするぐらい何も知らない子が多い。社会人学生であれば、「ああ、分かりました」もあるけれど、やはり日本人は留学生と同じくらい手が掛かる。留学生かどうかは関係なく、基本的には何も分からないという前提に立って説明をする。

○授業で伝えなければいけないことが多い中で、どのように内容を取捨選択するか

ある先生曰く、自分の価値観、想いをすごく学生に伝えるから授業の時間が足りなかったということであった。私はあまりそういった想いなどというものは入れないようにしている。あくまでも授業理解、事例、専門用語的なことを中心としている。たまに「その熱い思い、先生、端折ったらどうですか」とさらっと言うようにはしているが、場合によっては、教員の熱い想いが、学生を混乱させることにつながるケースがあると思う。

3.「介護過程」を意識した指導内容、留学生特有の課題

○専門領域・専門用語の理解

専門用語は１年生から習っているため特に問題はないが、日本人であれば普通に知っている言葉が分からないことが時々ある。以前は、「エスカレーター」を知らない留学生がいた。介護用語は覚えればよいが、そういった用語を知らず、結果として授業の理解ができないことがある。また、特に感覚にズレがある学生の場合は徹底的に、個別に説明し、本人が「分かりました」と答えたら、本当に理解できているか本人から説明させてみている。

理解力が乏しい学生(日本人、留学生ともに)に対しては、「分かりましたか」「分かりません」「じゃあ、こういうことで、こういう」と、通常は一つで教えることも細かく分解して、理解しやすいように噛み砕いて説明をしていって、「分かりますか」「まだ分かりません」「じゃあもう次はこうでこうで」などと、理解できたかどうかを一つ一つのステップ毎に個別に確認していくこととなる。これには、時間がかかる。

4.「生活支援技術」を意識した指導内容、留学生特有の課題

国籍や文化の違いで根拠を考えることに不自由はない。専門的な根拠、考えることは分かるが、事例問題等にあいまいな表現が出てくる場合は解釈を入れる。留学生の反応を見て理解できるかどうか判断することを積み重ねて、あっこれは分からんかな、あいまいかなというのがわかってくる。

5.「人間の尊厳と自立」を意識した指導内容、留学生特有の課題

○最低限の尊厳の自立や最低限の理解は、どのレベルまで必要か

尊厳と自立、概念については、専門的な考え方、介護福祉に対する考え方はこうだということを授業で繰り返し言っていく必要がある。これについては、日本人でも一緒だと思う。特に外国人だからということではなく、福祉介護というのは、困っている人を助けるだけではないということを繰り返し言っていけば、学生は頭の中へインプットというか、理解していっ

てくれると思う。

6.日本語教師との連携

○情報の連携

当校は学内に日本語科もあるため、介護を目指す学生や、時々、途中から介護を希望する学生もいるが、そういう学生の情報は常に密に取っている。その場合には入学・入コース前から学習指導に取り組んでおり、例えば、年明けの今月も4月から入ってくる留学生に対して補講を行い、文章や実習日誌を書く練習をさせている。具体的には、日本語学校の学生のうち、ほぼ全員が施設でアルバイトしながら学んでいるため、補講をするときに専門用語であったり、実習日誌、実施と考察文、また事例文を出して、書かせている。施設でやったことを書いてきなさいと、実際のことを書いてきなさいという練習をさせる。

日本語科の先生は全員優しいので、介護科に来たら私はちょっと怖いよと慣らすためもある。そちらの理由方が大きい。

○日本語力の要件を低く入学させてしまった学校ではどのように対応すればよいのか

なめたら駄目、頭が悪いんだったら、なんとかなると思わないように、とにかく一生懸命に勉強、そういうのを常に指導し、実践するようにしてもらいたい。

7.学生の勉強方法について

効率が悪い学生もいる。長時間、勉強していると本人は思っていても、それが勉強してるうちに入っていない可能性もある。毎日何か課題を出して、教員が確認し、又課題を出す。それの繰り返し。よくあるのが、YouTubeを見て日本語を勉強したと学生から聞くものの、実際やったことを聞いてみたら、母国語字幕が入っている映像であったなど。それであれば、一切勉強にならない。YouTubeやインターネットを使って勉強しているという学生には、それは駄目、勉強に入らないと言うようにしている。

8.学生のやる気を出させる方法

当校の場合は、介護施設に奨学金を出してもらい、それを受けている学生も結構多い。このため、施設に連絡を入れて発破を掛けてもらい、施設・教員・学校が連携しながら、プレッシャーも適切に掛けつつ、勉強の基本を教え、理解を確認しながら、総合的に見ていく。

9.さいごに

私自身が特に指導等で困ったと感じていないのが現状。何回も言うが、日本人と留学生だからということで特別扱いはしていない。かといって当校の学生全員が大丈夫というわけではない。今でも留学生の何人かには放課後に国試対策で補講もしている。繰り返し事例を読み解き読み慣れる、その文章の最後に変な言葉が入っていたらそこはバツだ、という指導の繰り返しである。

【事務局所感】

「指導上、留学生だからといって特別に意識していることは、あまりない」ということであった。しかし、教員としての教え方について、細心の注意を払って実践されていることがうかがえた。日本人であろうと留学生であろうと、以下の2点(①②)を基本的に網羅できている教授法であるため、「特に意識していない」という回答になると思われる。

① 学生の予備知識がないことを前提とした指導

- 授業参観に訪問した際、人体の構造、代表的な疾病等、学生がワークショップで模造紙にまとめて発表した資料が教室一面に張り付けられていた。日ごろから、学生が主体性をもって基礎的な知識をつけるよう工夫が行われていることがうかがえる。また、人体、疾病、すべてにおいて、学生(日本人、留学生)には予備知識がない、ということを前提とした授業を行うとのことであった。実際に授業参観のビデオでも、留学生に向け、特定の介護用語について「留学生、この意味わかる？」というような呼びかけをされている場面があった。日ごろから意識的に理解度確認を実践されていることがうかがえる。
- 説明の際は、誰でもわかる言い回しを自然と選び、学生の反応も見ながら、理解不足がないよう意識して授業を行っているとのことである。また、人体、疾病、すべてにおいて、学生(日本人、留学生)には予備知識がない、ということを前提とした授業を行うとのことであった。

②学生の疑問点を残さないような講義、不足があれば補講、個別指導で対応

- 全ての講義において、個別の学生の理解度を確認し、他教員と連携しながら講義を実践している。もし不足があれば、学生ごとに個別指導を徹底するほか、補講も行う。

先行研究においては、外国人が介護等の概念を理解できない場合があるほか、介護の用語の理解が難しい場合があることが既に検証されている。これを鑑みると、先生が「あまり日本人と外国人との差を感じない」といったご発言をされることには、先行研究の結果との相違が生じる。この相違の理由を考えた際、以下の2点が類推される。

- 教員がもともと相当丁寧に学生に対して説明している。また、理解できないポイントがないように授業内外にて日ごろから対応されている。
- 学生自体のレベルが高く、自ら学習して分からないポイントを放置しないように自主的に学習できる学生である。

今回のケースでは、上記の双方が該当すると考えられる。

以上

令和３年度老人保健健康増進等事業
外国人介護人材の質の向上等に資する学習支援等調査研究事業
ヒアリング

「こころとからだのしくみ」領域に関して

日時		令和４年１月７日(金)10:00～11:30
場所		ZOOM
出席者	ヒアリング対象	養成校Ａ(大学附属の養成校)
	傍聴	厚生労働省 社会・援護局福祉基盤課　福祉人材確保対策室　鈴木氏 社会・援護局福祉基盤課　福祉人材確保対策室　翁川氏
	事務局	介護協　山田・田中　　日本能率協会総合研究所　岡田

1.学生数および外国人留学生の構成

１年生　40～50人 うちベトナム人１名　N2
２年生　40～50人 うちベトナム人１名、中国人１名、フィリピン人１名　合計３名全員 N2

2.外国人留学生受入れの考え方

学生の定員割れを補てんするために外国人留学生を受け入れるという考え方ではなく、グローバル化に向けて外国人留学生を受け入れ、早い段階から共に学ぶということを目的としている。留学生の受け入れは入学予定者数の１割から２割程度とし、常に日本人より外国人が多くなることを防いでいる。

常勤の教員は全員 JICWELS に関わった経験がある。外国人留学生を受け入れる際には不安はあまりなく、自分たちには受け入れる下地があったと思われる。学生に関しては、留学生を受け入れたことで大きく変わったということは特段ない。外国人、日本人に限らず困った人がいれば互いに声を掛け合うということは常にある。サポートすることで育つというかたちは継続されていると感じている。

○外国人と日本人の指導の違いについて（全体）

外国人だから日本人だから指導が異なるとは考えていない。介護福祉士を育てる学校だと捉えている。どの子も段階を経て構築できるような学習のスタイルにしていくことが大事だと考えている。

外国人は日本人と交流しながら、まねることで育っていく。外国人留学生には日本人の子たちがサポートしてくれる。学ぶの語源である「まねる」ということは非常に大事だと思っている。日本人の学生が理解できないことは外国人も理解できない。本来の教育のスタイルの課題を常に見直しをし、外国人留学生も同じように育てていくことが重要だと考えている。

○日本人と外国人の反応の違いについて

反応の違いはほとんどないが、日本語の理解力の差はあると思う。日本語が理解できていないことで適切に行動できないことがある。ただ、外国人の多くは耳コピーができる。聞くことで覚える能力が高い。

ただ、「聞く・話す」より「読む・書く」が苦手だと思われる。漢字圏ではない学生は漢字が記号のようだと言っていた。文字を形で覚えるため、日本人より試験の結果が良い場合もある。

演習を通して日本人と外国人の間の違和感はあまりない。アルバイトをすることで現場実践し、経験を積んでいる影響もあるかと思われる。

3.「こころとからだのしくみ」について

○事前知識の確認について

事前の知識については何も確認はしていない。入学前の段階で１人当たり30分ぐらい事前面談を行っている。その際に学習に対する意欲、介護に関する関心、自信の適正という意味で介護に向いている点などを聞いている。事前の知識よりも意欲や日本語能力を重視している。

人体の構造や解剖生理などの予備知識は、あってもなくても変わらないと思っている。医学的なことを学習している日本人でもその知識を的確に覚えているかどうかは別だと思っている。間違って覚えている可能性もある。日本人も外国人もみんな「はじめの一歩」だと捉え、みんな一緒にゼロからスタートするという考えである。

○日本人と外国人の違いについて

特段大きくかけ離れているということはない。むしろ国民性の違いによる関係性づくりの必要性を感じる。例えばインドネシア人は相手に対して忖度(そんたく)する国民性があると思う。きちんと理解していなくても「大丈夫」と答える。分からないところははっきり分からないと言うことの必要性を伝え、一歩進んだコミュニケーションを取ることが大事だと思う。看護大学を卒業した優秀な留学生が入ったことがあったが、知識のあるなしではなく、本来持っている能力や意欲が大切だと考えている。

○外国人留学生の能力について

理解力が最も重要。また、日本語を理解する能力および意欲が重要。２年間の学習できちんと資格を取得できることを目指している。高い学費を払うので時間もお金も無駄にすることはもったいない。ある程度やり切れるだろうというところを見つけて入試の際に対応している。

○授業での資料の工夫について

授業で外国人留学生に対し、科目ごとに特段工夫していることはない。むしろ専門用語の漢字の読みの学習に重点を置いている。例えば「こころとからだのしくみ」では病気の理解がある。病態、原因、症状、治療とあるが、症状のところで専門用語が出てくる。咳嗽(がいそう)、肱量(げんうん)、喘鳴(ぜんめい)などがある。そういう症状の読み方とその内容の理解が必要である。まずはよく出てくる漢字を読む、そして意味が分かるように丁寧に学習し、そして１つずつ代表的な疾患から学習するように進めている。

○「こころとからだのしくみ」の学習体系について

３つに分けている。

① 代表的な病気を学習する。日本人の死因として代表的なが ん、脳血管疾患、心臓疾患、肺炎など、または介護保険の特定疾患など、循環器系、脳神経系などの代表的な疾患を学ぶ。そこで病態、症状を学習する。
② 健康状態、心身機能、身体構造までを学習する。③の前に認知症の理解、発達と老化、障害のところに出てくる疾患を繰り返し学習する。プラス活動参加など支援についても学ぶように配置している。
③ 医学的なところも含め、生活支援技術に関わっていく内容として観察する上で必要な知識を学ぶ。例えば入浴の際に自律神経がどのように影響するのかなど、それぞれの項目に対して学習していく。また、認知症と発達と老化、障害の理解のところでは、１と２に分けて、１では疾患の理解、２では生活の支援とし、総合的に捉えられるように組み立てている。

○担当教師について

①は非常勤講師、②③は専任教師である。認知症は常勤教員が、発達と老化と障害の理解は非常勤講師が担当している。非常勤講師は長年勤めているので、学生のこと、学校の方針なども よく理解している。

4.「生活支援技術」について

○生活支援技術での事例について

事例を作る際、留学生を意識したことはない。介護福祉士を育てる学校としての教育という観点がベースにあるため、日本人と外国人留学生は同じように捉えている。

例えば、１つの事例で、虚弱な人と片まひの人の場合、２人の事例をベースにして、虚弱だからとか、片まひだから技術が変わるのではなく、本来ベースは一緒である。そうしないと、虚弱ありきの支援、片まひありきの支援になってしまい、応用が効かなくなる。１本の縄のところにその人の状態がどこにあるかだけの違いで、支援というベースは変わらな

い。そのように学習し、アセスメント能力が高められることを目指している。

5.カリキュラムの変更について

当校では、カリキュラムを変更している。実習Ⅰの前「認知症の理解」ではなく「発達と老化の理解と障害の理解」を据えている。カリキュラムの構成は１学年、２学年とも前期・後期に分けている。１学年の前期は「介護とは」ということで基礎的なもの、後期には演習などを入れ知識を深めていく。２学年の前期はより専門的に、そして後期では広く深めていき専門性を高めるという構成にしている。

「発達と老化の理解と障害の理解」は２学年の前期に配置していたが、その時期に入る科目が非常に多くなり、調整する必要が生じた。「発達と老化の理解と障害の理解」は実習に行った際にも必要な知識だろうという判断もあり、１学年の後期で実習１の前に配置したという経緯がある。認知症については、変わらず動かさないという自分の要望もあり、そのまま２年生の前期に配置している。カリキュラムを変更したことが実習にどの程度生かされているかは、まだスタートしたばかりなので報告できることはない。

6.科目間の連携について

○生活支援技術の授業構成

科目間の連携については、それほど意識していない。シンプルな事例しか入れていないというのが実情である。生活支援技術の手順に特化して説明をする。

生活支援技術の科目は８つに分けている。１年生の前期では生活支援技術の基礎で、基礎的な知識を体験することを行う。要は技術の展開に必要なものを入れている。

例えばおむつの場合、おむつを実際に当ててみて、立ったり座ったり、排泄したりという体験をする。入浴介助の場合、実際にお風呂に入って、またいでみる、座ってみる、お湯の温度を計るなどを体験する。食事の介助の場合だと、5cc、15cc、30cc と一口量を体験して、一番飲み込みやすい 15cc を理解する。

後期では演習を行い、手順に沿って展開できるようにしている。

○その他の生活支援技術の授業構成

授業	内容
家政学	生活体験の乏しい子が多いので、調理、住居、被服などの勉強をする。
レクリエーション	現場に行くとレクレーションは必須なので、体験することでうまく展開できることを目的としている。
リハビリ	OT の先生によるリハビリの勉強で、介護予防も含めながらの演習である。
ターミナル	経験が少ないためにターミナルケアに不安を持っている学生がいるというデータがある。不安の緩和や心構えを考えるきっかけにしてもらうためである。
観察	介護職員は観察が苦手であると思っている。それは観察項目が分からないためである。何を見なければいけないかということをきちんと考えさせることで観察力を付けさせる。 例えば、「ちゃんと座る」という場合の「ちゃんと」は何なのか。何と何を見たらちゃんと座れていることになるのか。深く座ること、足や足底が床に付いていること、足が肩幅に広がっていること、骨盤の上に体幹が乗っていること、そのような項目を観察することで座位バランスが取れちゃんと座っていると分かる。そのように観察項目を明確にしていくということである。これは生活支援技術の演習と非常に連動しているので、演習のレポートの内容が非常に充実してきている。

7. 日本語教師との連携について

○日本語教師の授業内容

付属の大学にある国際部の日本語センターの教師に来てもらっている。１年生の前期に月に１回１コマないし２コマ、４カ月だけ日本語の授業がある。非常に短い期間である。助詞の使い方や日常的な表現を主に学習していることが多い。また話すだけでなく、書く授業もある。日本語教師と毎回連携を図っているわけではなく、前年度の課題になったことを重点的に教えてもらっている。

○日本語の授業で気を付けていること

新しい言葉が出てきた際には、外国人の反応を見るようにしている。表情を見て、目くばせをしたり、個別に声を掛けたりする。外国人のみ携帯電話の持ち込みを許しているので、分からない言葉が出てきた際にすぐ調べられるようになっている。またゆっくり話すこと、１センテンスを短くするように配慮をしている。通訳がいた場合は、日本語を聞いて理解し、通訳の言葉で再度確認をするようにしている。難しい言葉が出てきたら、皆で一斉に声を合わせて言ってみることも行っている。

○外国人留学生が調べる言葉について

携帯電話で調べているのは、新しく出てきた言葉である。繰り返し出てくる言葉はそのまま書き留めている。母国語で書くことも認めてはいるが、ある程度力が付いてくると日本語で書いている。板書もまねて日本語で書いている。「まねる」ということの大事さを痛感する。書く・読むが苦手な学生が多いので、「聞く・話す」と「書く・読む」という能力はきちっと分けて見ないといけない。話すことができるから分かっているとは限らない。

【事務局所感】

先生からは、「指導上、留学生だからといって特別に意識していることは、あまりない」ということであった。しかし、教員としての教え方について、細心の注意を払って実践されていることがうかがえた。日本人であろうと留学生であろうと、以下の３点(①～③)を基本的に網羅できている教授法であるため、「特に意識していない」という回答になると思われる。

① 学生の予備知識がないことを前提とした指導

- 常勤の教員は全てEPA講師も経験しており、外国人に対して常日頃から指導経験がある教員が、留学生の指導対応をされている。説明の際は、誰でもわかる言い回しを自然と選び、学生の反応も見ながら、理解不足がないよう意識して授業を行っているとのことである。また、人体、疾病、すべてのカテゴリにおいて、学生(日本人、留学生)には予備知識があるわけではない、ということを前提とした授業を行うとのことであった。

②学生の疑問点を残さないような講義、不足があれば補講、個別指導で対応

- 全ての講義において、個別の学生の理解度を確認し、他教員と連携しながら講義を実践している。もし不足があれば、学生ごとに個別指導を徹底するほか、補講も行う。

③明確なカリキュラムと、教員間の連携

- カリキュラムが明確であり、科目ごとにここで何を学ぶかを明確に各教員が意識し、学生にも伝えていることがうかがえる。科目間の教員の意思統一が非常にはっきりしている。

先行研究においては、外国人が介護等の概念を理解できない場合があるほか、介護の用語の理解が難しい場合があることが既に検証されている。これを鑑みると、先生が「あまり日本人と外国人との差を感じない」といったご発言をされることには、先行研究の結果との相違が生じる。この相違の理由を考えた際、以下の２点が類推される。

- 教員がもともと相当丁寧に学生に対して説明している。また、理解できないポイントがないように授業内外にて日ごろから対応されている。
- 学生自体のレベルが高く、自ら学習して分からないポイントを放置しないように自主的に学習できる学生である。

当該学校の場合、ヒアリング内容や学生の属性(入学時に原則全員 N2 保持)を鑑みると、上記の双方が該当すると考えられる。

以上

令和３年度老人保健健康増進等事業
外国人介護人材の質の向上等に資する学習支援等調査研究事業
ヒアリング

「医療的ケア」領域に関して

日時		令和４年１月 21 日(金)13:00～14:00
場所		ZOOM
出席者	ヒアリング対象	養成校D
	傍聴者	厚生労働省 社会・援護局福祉基盤課　福祉人材確保対策室　翁川氏 社会・援護局福祉基盤課　福祉人材確保対策室　鈴木氏
	事務局	介養協　山田　　日本能率協会総合研究所　岡田

1.外国人留学生受入れの考え方

○学生の理解度を測る方法

学んだことを言葉にできるというのは一つの評価項目である。しかし日本語でできないと不可という先生と、正しい日本語でなくても伝わる日本語なら可とする先生がいると困るため、そこは標準化している必要がある。

また、一番評価の軸として考えるのは、テストの点数である。本校では毎時間小テストを行っており、普通は取れるべき点数を取れない学生を見つけ、それはなぜかを考えるようにしている。

小テストの前に、コマシラバス(教員が学生たちに明確に示す大事なポイント作りのことを指す)を配っている。コマシラバスの中で、その日の授業中に学ぶ知識についてのキーワードを出しておくようにしている。教員としても、何が大事かについて再確認して授業ができることにつながっている。小テストでは、コマシラバスに合った復習をし、知識を定着させている。授業最後の５分間で集中して振り返る時間を毎回設けることで、理解の確認と定着につながっている。記憶の積み重ねが大事であり、それが理解に繋がる。

○読み書きに関しての留学生に対する支援方法

特段何かを変えているということはない。科目によって個性の出方が違うため、基本的には担当する先生により指導は異なっている。

○意欲の低い学生に対するモチベーションアップについて

実習で利用者さんと関わりを持つということが最もモチベーションアップにつながる。この２年間はコロナ禍の影響でオンライン上での関わりが多かったが、コロナが少し落ち着いた際、施設に行き自主的に利用者と関わることをしたら、学生の表情がとても良かった。利用者に褒められたり、喜んでもらったりなど、そういった関わりがモチベーションの維持と向上に繋がると思う。

また、現在においては、学生の優劣をつけて校内で公表するやり方が好まれないことから、テストにおいて、学生は、誰がどのくらいの点数を取っているのか知らない状況となっている。２年時の模擬試験にて初めて順位が分かるため、そこでモチベーションアップすることがある。日本語が苦手だった学生でも点数が高いことが分かれば、やる気になる。日本人より留学生の方が勝ち気な傾向があり、そこをうまく活用する。日本人も、留学生が自分たちより日本語ができないのに点数が高いというのを知ると、そこに競争原理が働いていい関係性になっている。競わせるというのも一手である。

○テキストにおいて指導すべきことが大量にあるなかで、どのように取捨選択しているか

介護教員の基本であるが、目標値は最初に決めてあるため、そこは絶対に下げない。下げないが、そこへ行くステップは様々なものがあるため、その工夫は教員がすべきことである。目標は、どのような介護福祉士を目指すのか、この科目で何を伝えるのか、である。目標値は国家試験でレベル評価されるため、そこで確認されること以下であってはならない。以上は良いが以下はだめ、というのがラインである。

また、指導の際は、教科書にあるキーワードが何なのかを明確に示すことがとても大事である。アクティブ・ラーニングというところでは、キーワードをちゃんと伝えてそこから考えさせるという学び方をすれば、もしかしたら教科書は無くてもいいという論にもなってくる。それは日本人も留学生も同様である。

○日本語の使い方

国家試験で登場するほか、現場でも理解していなければいけない言葉は複数あるが、定まっている。そのような言葉は常に意識して使う。学生にも、使ってもらう。

○教員の教え方について

例えば、「こころとからだのしくみ」では重要項目が決まっている。しかし「介護」は人間の尊厳等様々な考え方があり、どれが正しいというところを突き詰めると、とても難しい。このような場合は、「よりシンプルな言葉をもって説明できる」ということが重要であり、教員は意識して対応すべきである。

養成校で教えることは基本であり、そうするとやはり教科書が大事となってくる。何が大事かということを本当に突き詰めていくのであれば、介護教員たちが集まり、色々と話し合い、教える技術の研修が必要である。

最近は開催できていないが、本学園では、"オープン授業週間"がある。オープン授業とは、全ての授業が公開となっており、教員のうち誰が何の授業を見に行ってもよい、ということである。本学園は、福祉だけでなく、医療や美容など色々な学校があるため、多職種の中から学ぶこともできる。教員としては、色々な方法を学んで自分の力をつけていくということも大事である。今までは本校の若い教員にはそういった機会が無かったが、今はオンラインで簡単に繋がることができるため、活用できるとよい。やったことがなくて教員の経験が浅いときは、色々な先生の授業を見に行くしかない。いいところを褒め合うというのはできるのに、改善すべき点は見えているのに言わない傾向にある。これでは、成長につながらない。

なお、教員の授業の評価を学生にしてもらうということについては、最近の学生は当たり障りなく評価をする傾向にあるため、授業評価の方法も工夫して実施すべきではないかと考えている。

2.医療的ケアに関して

【全般について】

医療的ケアは看護職・医療職が教えるのが第一前提である。その中で、養成校の現状を知らない非常勤の先生も多く入ってくる。そのような先生方に対して、まずは養成校の現状（どのような学生がおり、学習状況、日本語習得状況、基礎学力・知識がどの程度あるのか等）をしっかり伝えることが重要である。

介護福祉士養成校のカリキュラム全体を把握してもらい、それに合わせた指導が必要であるが、特に医療的ケアはやることが決まっていることが特徴である。知識だけでなく演習をするため、日本語力が無くても対応できる場合もあるが、演習の中で言葉にて問いを求めると、やはり日本語力が無いと理解することは難しい。

知識については、登場する日本語がたくさんあり、日本人でも難しく感じる場合がある。頭の中で理解できていてもそれを言葉にするのは難しく、反復学習が必要。

○留学生と日本人への指導の違い

国が違い、観念が違っても、医療的ケアに関しては、例えば清潔・不潔の考え方や、それがなぜ大事かという理由等、留学生であっても日本人であっても、教えれば理解できる。このため、そこに価値観はあまり関係しないと思われる。

○どのようなことを事前知識として知っていれば、医療的ケアの理解が進むか

養成校では医療的ケアを学ぶのは２年生からであるが、心臓がどこにあるか分からない学生も存在するため、「こころとからだのしくみ」をやって学ぶ。分かっている学生も分からない学生もいるので、ここでもう一回確認をするという形をとっている。重要なのは、正しいことを伝えるということ。知らないのは当たり前というよりも、これは知っておくべきこととして教えていき、理解してもらう。

【演習について】

留学生が演習を行うにあたっての特別な配慮として、「日本語を明確する」という点に注意した。状態を知る言葉として「痛みはありませんか」「気分は悪くありませんか」等の言葉がなぜ大事かを伝え、必ずこれを聞くように示している。言葉で言えない場合も目で見るというパフォーマンスは一緒に行う様に伝えている。例えば「苦しくないですか」は、どこを見て言葉にするのかということである。これは日本人でも留学生でも同様である。

また、教員同士もすり合わせをすることが必要である。教員によって評価が変わってくる場合があるため、様々な先生に演習対応をしていただく分、教員の評価方法はきちんと統一した。

【医療的ケアをより学生に理解してもらうために】

最も重要なものは日本語力であるが、JLPT に限った話ではない。介護を勉強する際によく使う言葉を理解する必要があり、当校では、その勉強に多くの時間を掛けている。

医療的ケアは映像教材もたくさんあり、物品などの教材関係が統一で準備されているなど、理解度を増すための工夫が先になされている。日本語ができなくても、まず見ることから始めるとよい。そして体験し、体験したことを繰り返し、知識と技術をうまく融合していく。この学びの繰り返しを小さくすることが効率的な理解を促すと思う。なお、物品に慣れさせる、普段の生活の中でも見てもらうということも重要である。

【事務局所感】

先生からは、科目によっても学ぶべきことは異なり、教員による科目ごとの工夫が必要ということであった。特に、「こころとからだのしくみ」、「医療的ケア」等、やるべきこと・重要項目が決まっている科目については、必要な指導を明確に行ったうえで、テストも活用しつつ、何度も反復しながら理解してもらうということが重要であるとのことであった。教員のこだわりや価値観を挟まず、シンプルな言葉を使い淡々と教えることがこの領域の特徴でもある。

また、やるべきこと・重要項目がわかり辛い「介護」等の科目については、「よりシンプルな言葉をもって説明できる」ということが重要であり、教員は意識して対応すべきということであった。

また、留学生に言葉で理解してもらうだけでなく、既存の映像教材、物品など視覚・聴覚・体験等を通して理解を深めることも重要であり、そのような教材が用意されている科目（特に医療的ケア）については、積極的に活用していくべきとのことであった。

一方、こういった対応を教員が行う上で、教員の「教える力」、つまり科目の深い理解をし、それをどのように伝えていくかという能力も重要になるとのことであった。これについては、教員１人でできることではなく、他介護教員、医療職の教員、福祉以外の教員等の授業を参観するほか、教員同士で伝え方、教え方についての議論を深める等、外部からの視点を踏まえつつ、研鑽を積んでいくことが必要であるとのことであった。

さらに、教員の教え方については、学生からもフィードバックをもらうことは教員の教え方の能力を高めるために効果的であるとのことであったが、学生から正直な意見を引き出すため、授業評価をどのように行うかについての工夫が必要とのことであった。

3. 模擬授業教案

「社会の理解」学習指導案
実施日：2022 年 2 月 12 日（土）

【 授業教案 】

科目名	社会の理解	授業回	補講
学年			
授業のテーマ	第 2 章 地域共生社会の実現に向けた制度や施策 を 理解する		
学習の目標 （到達目標）	第 3 節 地域包括ケア ◆地域包括ケアという考え方が出てきた背景について理解する ◆地域包括ケアのめざす介護のあり方について理解する ◆追記包括ケアシステムについて理解し、介護福祉士としてどのようなことが期待されているのかを理解する		
学習上の キーワード	『第 3 節のキーワード』 地域包括ケア 地域包括ケアシステム 地域包括支援センター 日常生活圏域(30 分以内、中学校区) 自助・互助・共助・公助		
使用する教材	最新 介護福祉士養成講座 社会の理解 最新 介護福祉士養成校講座 介護の基本Ⅰ、Ⅱ (介護の基本Ⅰ、Ⅱのテキストは、養成校で使っていたら、活用する)		

《 授業運営計画 》

時間	授業内容	展開方法	教育活動の留意点	使用する教材
5 分	・前回箇所の確認 ・本日の授業の説明	テキストを活用した口頭説明	本日の授業のテキスト箇所が分かるように説明する	社会の理解のテキスト P.59～62 介護の基本Ⅰ、Ⅱのテキストを持参してきているか確認する
35 分	・地域包括ケア ・地域包括ケアシステム ・地域包括支援センター ・日常生活圏域	社会の理解の他ページを活用する 他の科目になるが、テキストを確認して、活用する	社会の理解の他の該当ページを活用する 介護の基本Ⅰのテキストの活用を示す	「地域包括ケアシステム」については、 社会の理解のテキスト P.183 介護の基本Ⅰのテキスト P.61 のイラストを活用する 地域包括支援センターについては、 社会の理解のテキスト P.185 のイラストを活用して説明する
15 分	・自助・互助・共助・公助	まず言葉の持っているイメージを聞いてみる	各言葉の内容を理解できるようにする	介護の基本Ⅱのテキスト P.62 を活用する。
5 分	・本日のまとめ	本日の学習上のキーワードを示す。そして、テキストの該当箇所を示す。 確認をする		

令和 3 年度　厚生労働省　老人保健健康増進等事業
外国人介護人材の質の向上等に資する学習支援等調査研究事業　報告書

令和 4 年 3 月
公益社団法人 日本介護福祉士養成施設協会

〒113-0033　東京都文京区本郷 3-3-10　藤和シティコープ御茶ノ水 2 階
TEL 03-3830-0471　FAX 03-3830-0472